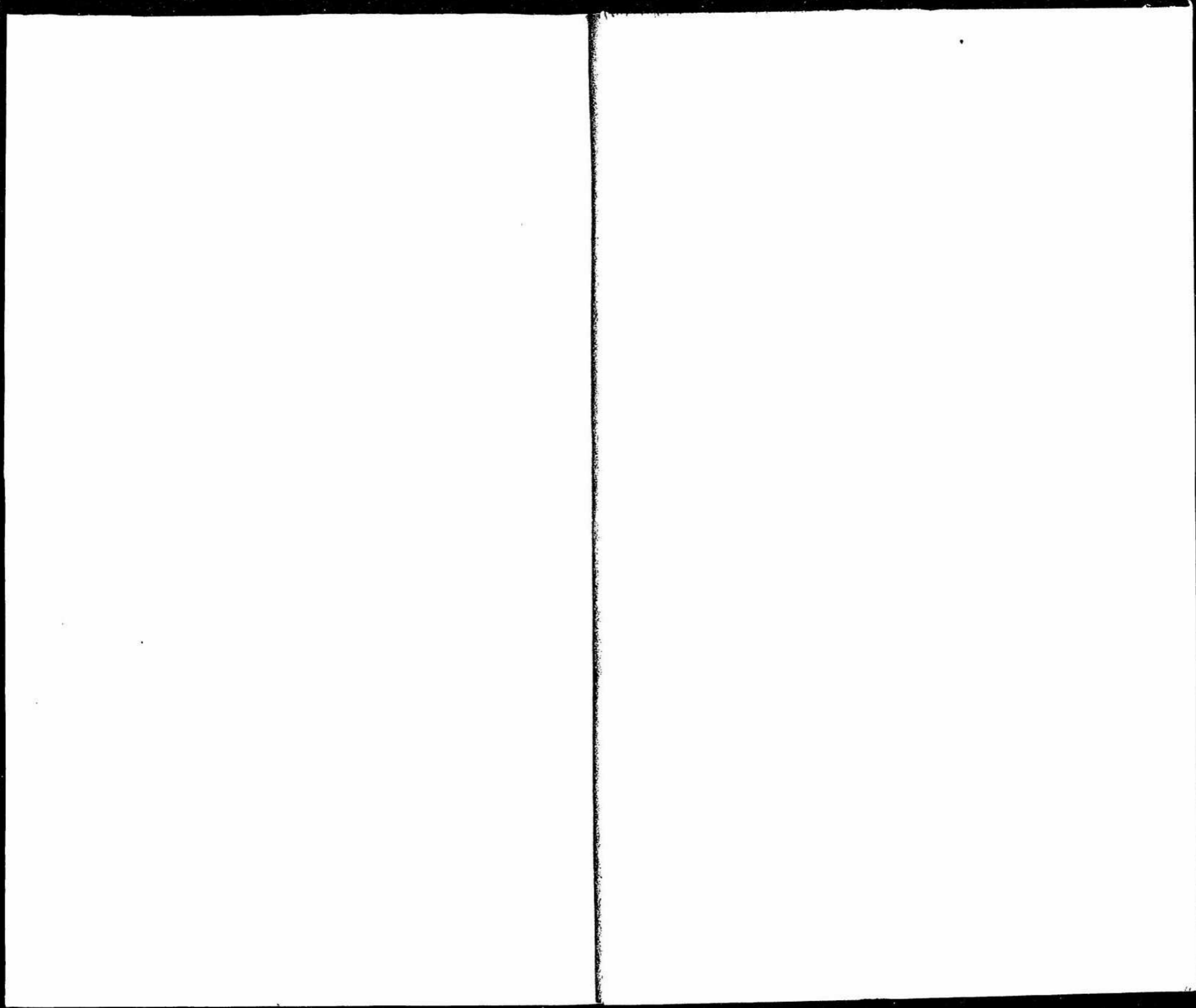


國土計畫執務資料





610  
126  
91158

610  
126

秘

21

農業 條件並ニ農業ノ概要	地域別農業立地	國土計畫執務資料	
	擔當者	整理番號	第 一 部 第 三 課
西 水 調 査 官	作成月日	第 一 一 五 號	
	昭和十七年十月二十六日		

内閣文庫  
九二五八号  
和書

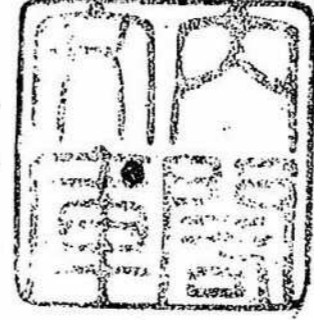
和書の購入を請求する

行爲担当官 殿

請求書

分類及組

号



(一) 内地 目次

1	自然的立地條件	.....	一
(a)	地形	.....	一
(a)	氣候	.....	五
2	經濟的立地條件	.....	一
3	社會的立地條件	.....	一
4	農業の概要	.....	三
イ	耕地の開發狀況並に耕地度	.....	三
ロ	作物立地の概要	.....	三
(1)	米	.....	五
(1)	立地條件	.....	五
	地形、氣温、雨量	.....	九
(ロ)	水稻耕種技術の發展	.....	六
		.....	八

(1)	増産計費	一〇七
(2)	生産の概要	一一九
(3)	麥類其他畑作物	一三五
(4)	普通畑作物	一三五
(5)	小麥、大麥、裸麥、燕麥	一三五
(6)	樹木農業	一四五
(7)	桑、茶、柑橘類、葡萄、苹果	一四五
朝	朝鮮	一七三
1	自然的立地條件	一七三
イ	地形	一七三
ロ	氣候	一七四
2	經濟的社會的條件	一七七
3	農業の概要	一七八

イ	耕地の開発状況並に耕地度	一八八
ロ	作物立地の概況	一九五
(1)	畜(米)	一九五
(2)	畑作物	二〇一
	普通畑作物、棉花	二〇一
臺	臺灣	二一三
1	自然的立地條件	二一三
イ	地形	二一三
ロ	氣候	二一四
2	經濟的社會的立地條件	二一六
3	農業の概要	二一七
イ	耕地の開発状況並に耕地度	二一七
ロ	作物立地の概要	二一九
(1)	米	二一九

(2)

甘蔗

.....

二二五

(一) 内地

1 自然的立地條件

(1) 地形 日本列島は概ね細長い島々から成り、水成岩の隆起と火山の噴出とのため山勝で平坦地に乏しい。地域別に見ると、北海道では脊稜山地と、千島火山脈により、北見のオホーツク海方面、帯廣、釧路、根室の太平洋沿岸方面、石狩流域方面に分けられ各地域に丘陵、沖積低地、段丘等の噴積適地があり、沖積低地に於ては排水不良の濕地、泥炭地等を現はし不適地がある。

奥羽地方では脊稜山地の奥羽山脈により東西に分けられ、東側に於てはこれと平行に北上、阿武隈の高原状山地が発達するが、其間には南流する北上川、北流する阿武隈川があり、各流域には平野、盆地が発達し、耕地の開発が良好である。西側は火山を伴ふ出羽山脈、越後山脈との間に横手、新庄、山形、米澤、

會津等の盆地が形成され、これらの盆地から流出する米代、雄物、最上、阿賀の諸川は前記兩山脈に峡谷を刻み、日本海に注ぐが、河口附近には能代、秋田、庄内、越後の水田地域の發達が見られる。海岸に砂丘の連續してゐるのはこの地域の特色である。關東地方は内地最大の平野を擁し、東北部及び西部山地の山麓には扇狀地が發達し、南部の茨城、千葉、神奈川方面には丘陵の發達が著しい。中央部は利根の水系を中心に概ね臺地低地をなし、利根下流域に於いては排水不良のため、豪雨等の場合には長期の滯水を見、そのため作物被害の甚大なことが屢々である。

中部地方では山梨、長野、岐阜の各縣に屬する部分は内地最高の山岳地域で、山間には信濃、富士、天龍、木曾、各河川の流域に山間盆地が開け、耕地を見るが概ね位置が高く且つ狭少である。そのため從來淺間、立科、八ヶ嶽、富士等の火山麓緩斜

面地域に於ては開墾が行はれて來たが尙今後にも余地がある。北陸は信濃川、荒川、黒部、常願寺、神通、庄川、手取川、九頭龍各川の堆積に成る平野の發達があり、海岸には砂丘の見えるところもある。各川共水量豊富、その流域は水田地域であるが、富山平野は全域扇狀地地形をなし、水利の良好なるため水稻作付率は最大であるが治水に注意すべきものがある。東海地方は木曾、大井、天龍の河口附近に比較的大なる扇狀地、三角洲等の平野があるが一般には北部の急峻な山岳が丘陵となつて海面に迫り、猫額大の低地（主に水田）を中心に丘陵斜面には果樹園、茶畑等の發達がある。岐阜、愛知にかけての濃尾平野は本地方最大の平野で、河口附近は木曾川その他各河川の分流する三角洲低地をなし、堤防に囲まれた輪中の地域は水田一色の景観を現はしてゐる。

近畿地方では中央部に於いて斷層盆地の發達が著しく、盆地底

は古くから開拓された部分で将来耕地増加を求むることは困難である。南部は廣大な紀伊山地で周囲の沿海地域には海岸段丘が発達し、僅かに開拓地をなすのみである。北部は中國山地東端に含まれ、中に福知山、綾部、篠山、等の小盆地がある。盆地附近の山麓斜面は主に桑畑として開かれてゐる。中國は高原狀の中國山脈が北寄りをして東西に走り、北側では鳥取倉吉、松江等の都市を中心に小平野があり、海岸には砂丘が見られる。南側では高原狀山地の中に津山、三次等の盆地のある外は瀬戸内沿岸に下つて、断層による丘陵性山地の間を埋めて沖積低地がある。海岸では沖合まで沖積され干潮時には干潟を現はすので、これを利用して鹽田が発達し、干拓された水田が見られるが、將來この地域に於ける工業の發達は必至でそのため各地に埋立が行はれ、農工相互の關係に調整を要すべきものがある。

四國は北側の瀬戸内沿岸は中國の山陽側と同様の景觀を示す、南側では吉野川流域及び河口の三角洲と、土砂灣に面する高知平野の開墾が等しい。九州は有明海に臨む佐賀、久留米、熊本の平野が最大で水利に恵まれ、内地有数の水田地域である。長野縣地域は多良嶽、雲仙火山地域の外は概ね丘陵地で、水利も悪く三に畑地域である。北部では福岡平野に耕地の發達が著しいが、遠賀川流域に於いては採炭との關係で地盤の低下が現はれてゐる。東側では豊前、大分の平野、南に下れば宮崎平野、都城盆地、川内平野等に耕地が開け、一部には尙開墾適地がある。阿蘇火山麓でも同様である。

(2)

氣候

南北に細長く、島嶼から成り立つたために海洋性の特色を有するが、全域東アジアの季節風帯に屬し、大陸内部に於ける夏冬の



氣壓變化による季節風の影響は甚大である。一方沿海に於いては南方から日本海流（黒潮）系の暖流が沿岸を洗ひ、北方からは千島海流（親潮）の寒流が奥羽、關東南地方の東岸に及んである。

以上の結果一般に氣温の年較差が大であり、夏の南東風の卓越する時期に於ては特に高温、多雨、多湿であり、冬の北東風の時期は低温、寡雨、乾燥である。

この外夏期初頭の梅雨は主に關東以西南部に現はれ、颱風は初秋にかけて同じく關東以西に屢々暴威を以つて人畜作物に甚大な影響を與へるが時々奥羽地方、北海道まで及ぶことがある。これらの氣候的立地條件はそれぞれの作物栽培に大なる關係を與へるが、これによつて現はれる冬の結氷、降雪、降霜、夏の冷涼、乾燥等は直接作物栽培に影響がある。この外春の旋風、夏の颱風等による風害も少くない。

北海道では平均十二月以降三月まで各月氣温は〇度以下で十月末から十一月上旬に初雪があり、四月下旬から五月上旬まで霧き、霧都、札幌、旭川の十二、一、二、三月は殆んど連日降雪がある。初霜は十月初旬に晚霜は五月下旬までである。曇天日數も一般に多く、地域的には季節によつて差違があるが、太平洋岸根室では七月中平均二十二日は曇天である。これは主として西風と海流との關係に原因する海霧の影響である。このためこの地域では防霧林が取擧げられる。又旭川盆地及び山田郡の盆地は夏の高温に恵まれ早くから米作が行はれてゐるが、全北海道共屢々冷害がある。

奥羽地方では脊稜山脈の東側と西側で氣候上の著しい差違がある。東側では親潮寒流の影響が大きく西側では對馬暖流に恵まれる。即ち東側は西側に比較して概ね低温である。特に東側に於いては農作上重要な夏季に曇天日數が多く、降雪は山形、秋

田では十一月中旬から四月上旬まで石巻、宮古では十一月中下旬から四月上旬までであるが、降霜期間は西側は十月下旬から五月上旬東側は十月下旬乃至十一月上旬から四月下旬乃至五月上旬迄である。西側の深雪地を除けば概ね冬作可能であり又夏季に冷害の起ることは北海道と同様である。特に東側は曇天日数が多くこの種の災害が著しい。

關東地方の平野部では降雪は平均十二月中下旬から三月下旬まで、降霜は北部で十月下旬、南部は十一月中旬から北部の四月下旬、南部の四月上旬迄である。冬作は奥羽よりも一層有利で特に麥類、蔬菜等に於て勝つてゐる。

關東の山間部と中部地方の山間部は氣候上奥羽地方南部の延長を示し、松本では降雪は十一月下旬から四月上旬迄であるが、降霜は十月中旬から五月中旬迄である。最晩霜の記録では五月下旬に及び、本地域に卓越する桑の幼芽に屢々打撃を蒙へ、養

蚕に對する影響が少くない。但し一面に於いては東北に見られる卒業櫻桃の栽培が見られる。降雨は一般に少くフエン風の利を得て、例へば甲府盆地に於ける葡萄栽培の如きも見られる。北陸では冬の北西風のため概ね雪が深く、雨も冬に多い。新潟では十一月下旬から四月上旬まで降雪がある。降霜は十一月下旬から四月中旬まで、山間部よりは遙かに短かく、又關東地方に比較しても短期間である。

東海地方では以上の諸地域よりも一層温暖になり降雪は沼津では一月中旬から二月下旬、名古屋では十二月中旬から三月中旬迄である。降霜期間も短く沼津は十一月下旬から三月下旬、名古屋は十一月上旬から四月中旬迄である。冬作には勿論支障無く柑橘、~~茶~~等が可能である。

近畿以西では尙一層温暖になり雪、霜の期間は愈々短縮される。従つて周年に互つて作物が見られる。東北地方、北海道の冷害

に對して西日本では瀬戸内を中心に旱害が現はれるが、これは一つには集水地域の小なることに原因する、このため大阪平野、播磨平野、讃岐平野等には灌漑用水路、溜池の發達が著しい。南四國の高知では降雪期間は平均十二月下旬から三月上旬迄、霜期間は十一月下旬から三月下旬まで、麥類の冬作は元より水稻の二期作も見られる。

九州南部も殆んど同様の現象で屢々三毛作が行はれる。

雨量も概ね多いが、気温が高いので、水利施設の改善は重要である。

### (2) 經濟的立地條件

以上の自然的立地條件の制約を受け乍ら日本農業は目覺しい耕地擴充を行つて來たが、特に主食糧である米作を中心に水田を擴充することに第一の重點を求めたのである。このためには外地、外國米との關係は元より國內農産物自体相互の關係に於いても米價の維持發展に政策の重點が置かれたことは云ふまでも無い。この結果温暖地域に於いては自然流水、湧水の利用し得る限りは元よりのこと、用水、溜池等の水利施設に多額の投資が行はれ、その經濟的に立地可能な地點に於いては山腹斜面に階段狀の水田を開き、瀬戸内の如き沿海、干潟の地域に於いては干拓が行はれたのである。冷涼氣候と冷水灌漑不可避の中部山間部、東北、北海道に於いては米作立地を可能ならしめる前提として先づ、品種の改良により各種の早生種が作り出され、

苗代、灌漑の方法等に關しても技術的改善が熱心に行はれた。今水田開墾に就いての北海道北見地方の例を示せば次の通りである。

この地方は北海道の北東側オホーツク海に面し、氣候寒冷のため一般に開發は遅れたのであるが、明治二十九年に始めて札幌赤毛種を播種した記録があるが、愈々盛に試作するに至つたのは明治三十四年以降である。其後試作時代が續いたが、大正五年に試験場の成績が良好の結果を挙げ、反當一石八斗に達し急に、一般の注意を引き栽培面積を増加した。水利關係は大正九年頃までは自然流水にのみ依存し、大正十一年に土功組合が各地に設けられて改良が進められた。品種では最初北見赤毛坊主六號から次第に自然條件に合致するものに移行し、野付牛の熟田多き地方には坊主五號、一般には坊主六號、改良籾一號、新田又は泥炭地等で寒冷の地域には走坊主、十勝黒毛等の

適品種の配布が行はれた。就中、坊主六號は北見の自然條件に最も良く適應し、廣く分布するものである。播種は一部に補植の目的で苗代の行はれる外直播を行つてゐる。

斯の如く明治大正昭和の初期にかけては米作中心政策の高揚によつて米作の専攻は大いに擧がり、都市の勃興、工業の發達によつて農地の潰廢せらるゝものが非常に大きかつたにも拘らず良く近年迄需給上の均衡を保ち得たのである。

米以外の作物に於いては概ね世界經濟の動きに放任せられたから前大戰前後に於いては作物によつて其の消長が極めて明かである。

綿に就いては明治年間に完全に潰滅して、朝鮮の試験的栽培の外は殆んど全量を外國から輸入し、各種麻纖維も略同様の行き方にあつた。

桑畑は養蠶業の盛衰に左右されてその面積を増減したが、この

養蠶は會つて世界市場に於いて支那の養蠶を壓倒し、その後には於ては最大の市場である米國の經濟事情に全く依存して來た。大豆は北海道を中心に一時好景氣を現出したが、滿洲大豆に押されて國內需給は完全に破られてゐる。小麥も外國小麥に壓倒され、製粉會社は重要貿易港に工場を設けて輸入原料に加工して來た。一方外國市場を目的として、著しい増進を示したものでは前記養蠶の外に柑橘類、茶、~~葡萄~~、蔴草、除虫菊、薄荷等がある。

第二に前大戰后經濟界の不況から支那專賣前途の著しい傾向として都市の發達と、交通の發展によつて現はれた一般蔬菜、高級蔬菜、果實等の特殊農業の發展である。これらのものについては在來の作物と置き換へられたものもあるが、中には立地條件を巧に利用して良好なる條件の下に耕地を造成したものもある。例へば苺、莢豌豆、葡萄、柑橘類等である。又白菜、甘藷、馬鈴薯等は一般農村に侵入した外高原蔬菜として發展の著

しかつたものである。これらの特殊農業の發展は從來の米作重點主義を棄て、多角的經營に移行した結果であるがその原因の大部分は經濟的事情の變化に歸せられる。即ち農村自体としては農村増加人口の負擔に漸く行詰りを生じ、出稼勞働收入等によるもの、外農業自体、一種の資金收入的集約農業經營に移らざるを得なかつたからである。勿論これには零細規模の經營が深い關係を有してゐるのであつて、帝國農會の次の調査に見ると大經營農家稻米作の比率が大きくなつてゐる。この中で米以外の作物に就いても中、小經營では集約的作物への移行が顯著である。

第三の時代は支那專賣以降である。この時代に於いては世界經濟狀勢が漸く轉換の傾向を現はし、廣域經濟圏として一つの自給自足圏を目標としてゐる。この見解は廣域經濟圏として取り得る範圍に限定されるのであるが、大東亞戰以前の我が國とし

ては日滿支自給であり、更に内外地自給であり又内地の自給自足として現はれたのである。又一つには従來の行政機構に因るのであるが、府縣單位の自給自足も一時高揚せられたが、計費統制經濟の發展により改定せられつゝあることは云ふ迄もない。この結果の著しい現象は作物作付の規制となつて現はれたのであるが、自然的傾向をも含む最近の状況を示せば次の通りである。

種目	内		内		内		内		内	
	延反	別付反	水	稻	陸稻	小麥	大稈麥	菜種	大小豆	其他穀類
大經營	一九六六〇	反	一〇七一四	反	一〇八一八	反	一九二六	反	一〇八一八	反
中經營	三〇〇四四	反	一八六三三	反	二〇〇二	反	一七一三	反	一七一三	反
小經營	三六三三	反	一〇七八八	反	一〇一〇	反	一〇一〇	反	一〇一〇	反
肥料	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反
馬鈴薯	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反	三〇〇一六	反

同右割合

種目	内		内		内		内		内	
	延反	別付反	水	稻	陸稻	小麥	大稈麥	菜種	大小豆	其他穀類
大經營	一〇〇〇%		三六%		一〇〇%		六〇%		三六%	
中經營	一〇〇〇		三六		一〇〇		六〇		三六	
小經營	一〇〇〇		三六		一〇〇		六〇		三六	

種目	甘藷	蔬菜	果物	桑樹	其他
大經營	反 〇五〇〇	反 一六二二	反 〇六〇二	反 一三〇〇	反 一六二二
中經營	反 一七一七	反 一六二二	反 一三〇二	反 一三〇〇	反 一六二二

小豆	粟	稗	黍	玉蜀黍	蕎麥	甘藷	馬鈴薯	菜類	胡麻	大麻	苧麻	亞麻	黃麻
101	71	36	27	51	96	285	133	1073336	5204	6276	2581	15991	633
101	60	33	16	57	84	276	166	90101	6561	1135	5807	30250	4755
(-)16.5	(-)9.6	(-)1.2	(-)4.1	(-)1.7	(-)3.5	(-)4.8	(-)8.4	(-)17.9	26	77.4	124.9	89.1	651.1
692	867	536	254	600	744	1000	447	1010	34	211	321	7097	316
620	615	480	142	608	645	943	439	907	43	3387	1325	15215	2875
(-)1.5	(-)3.0	(-)1.1	(-)4.5	(-)1.3	(-)1.4	(-)6.3	(-)2.2	(-)11.8	26.4	60.3	312.7	114.3	809.8

大豆	小麥	標麥	大麥
329	126	689	400
328	124	841	405
(-)1.6	(-)2.4	22	8
2634	2139	8961	5838
2483	1948	13094	6267
(-)6.2	(-)9.9	45.9	7.3

作物別作付反別並ニ收穫高増減

小經營	中經營	大經營
0.1%	0.3%	0.2%
0.8%	0.9%	0.3%
0.8%	0.4%	0.0%
0.4%	0.3%	0.9%

同右割合

小經營	中經營	大經營
0.1%	0.3%	0.2%
0.8%	0.9%	0.3%
0.8%	0.4%	0.0%
0.4%	0.3%	0.9%

除虫菊	二九一九六	二二八一七	(-)二二・一	二九四三	二五三九	(-)一四・二
薄荷	二七二三	一四〇九〇	(-)三六・八	二六一八四	五三七七	(-)八〇・五
藥煙草	三三三五四	三三三七七	二二・九	一六一三一	二二八〇八	四一・三

(Xは昭和十四年)

又食用作物としては、麥類、蕎麥、小豆、菜豆、稗、豌豆等は過剩、又は過不足無しであるが、米を始め、粟、玉蜀黍、黍、大豆、蠶豆、落花生類は外地又は外國からの補給を要するのである。

これらの生産の計畫化は今後一層強化せられるべき傾向にあるが、今後に於いては大東亞國の國土計畫的觀點に於いて生産の地域的配分に移るべきが必至である。

即ち内地に就いては單に耕地の造成のみでなく治山、治水との關係に重點を置き、都市、工業の發展による耕地の潰廢を調節し、水利施設等の土地工作は元より、輸送力、交易との關係に於いて生産需給を計畫的に處理し、耕地利用の適正化を計り、

更に進んでは農村人口四割保有の鉄則の下に農家の經濟的構成を適正ならしめねばならない。

### (3) 社會的立地條件

以上の經濟的條件は即ち社會的條件であるが、こゝでは主として人口及び經營規模的觀點に於いて記し度いと思ふ。

内地總人口の現在數は最初に記した如く七三〇〇万人、密度にして一方軒當り十一・九一人である。今人口増加に就いて見ると、舊幕時代には二五〇〇万人乃至三〇〇〇万人と云はれ、明治維新以後の國家興隆期に於いて人口も亦急増し明治五年の三三〇〇万人から大正九年の第一回國勢調査には五六〇〇万人、昭和十年には六九〇〇万人となつた。

農村と都市との區分では之を最近の市郡別に示しても初期に於いては農村人口の割合が非常に高かつたことは云ふ迄も無い。



市 部 別 人 口

年次	實 数		割 合		合 計		各前調査と比較割合	
	總 数	市 部	總 数	市 部	市 部	郡 部	市 部	郡 部
大正9年	55,963	14,590	41,367	1,000	257	745	%	%
昭和14年	59,737	13,931	45,806	1,000	233	717	17.6	5.0
昭和5年	64,450	19,657	44,793	1,000	505	695	16.2	4.7
昭和10年	69,254	22,666	46,588	1,000	527	673	15.4	4.0
昭和15年	73,114	27,573	45,541	1,000	577	623	21.7	2.3

註 (1) 内閣統計局 「昭和十年國勢調査報告」による

(2) 大正九年乃國勢調査年の市部及郡部の人口は比較の便宜上昭和十年國勢調査年を労田に於ける市部(127村)及郡部の區域に依り換算

これを出生、死亡及び自然増加の點から見るに郡部の増加率は遂かに都市の上にあるので、居住に現はれた數字との比較では農村人口の都市流入の著しいことが見られる。

市 部 別 出 生、死 亡 及 自 然 増 加 (千人)

年次	出 生 数		死 亡 数		自 然 増 加		人 口	
	市	郡	市	郡	市	郡	市	郡
大正9年	238	1,737	245	1,177	43	560	10,097	45,866
昭和14年	385	1,701	248	963	137	733	12,897	46,840
昭和5年	409	1,676	254	917	155	739	15,444	49,008
昭和10年	601	1,590	334	828	267	761	22,066	46,588

同上總数 (100に付)

大正9年	14.2	85.8	17.2	82.8	7.2	92.8	18.0	82.0
昭和14年	18.5	81.5	20.5	79.5	15.7	84.3	21.6	78.4
昭和5年	19.6	80.4	21.7	78.3	17.0	83.0	24.0	76.0
昭和10年	27.4	72.6	28.7	71.3	26.0	74.0	32.7	67.3

註 本表の市部別は調査時の市部別である。

これを更に工業建設の著しく進展しつゝ、ある内地十府縣に就いて人口増加の状況を見ると次の通りである。

全國並ニ主要工業地域府縣の人口

府縣	昭和十年		昭和十五年		増加	
	人口(A)	密度	人口(B)	密度	人口(C)	%
全國	六六,四〇七,三一一	一八一	七三,一四三,〇〇八	一九一	六,七三五,七〇〇	一〇.二
東京	六,三六九,一九一	二九六.九	七,三三三,九七一	三四二.九	九八四,〇二二	一五.五
神奈川	一,八四〇,〇〇三	七八〇	二,一八八,九七四	九三〇	三四八,九六九	一九.〇
千葉	一,五四六,三九四	三〇五.五	一,三三八,八二五	三一七.九	二〇七,五一一	一三.四
埼玉	一,五二八,八三四	四〇七.〇	一,六〇八,〇三九	四二二.九	七九一,八三五	一七.〇
愛知	二,八六二,七〇一	五六一.四	三,一六六,五九二	六三三.二	三〇三,八九一	一〇.六
大阪	四,二九七,一七四	二三六.四	四,七九二,九六六	二六四.七	四九五,七九二	一五.八
京都	一,七〇二,五〇八	三九六.三	一,七五二,九三三	四〇六.〇	五〇,四二五	二.九
兵庫	一,九四三,三九四	三五一.二	二,一四一,一三三	三八七.〇	一九七,七三九	一〇.一

府縣	昭和十年	昭和十五年	増加
山口	一,一九〇,四四四	一,九七五,七	八五,三〇〇
福岡	一,七五五,八〇五	一,九四九,一九二	一九三,三八七
府縣合計	一,七〇一,四一三〇	一,九〇四,〇〇六	二〇二,五九三

即ち昭和十五年に於いて内地人口の四一%が十府縣に居住し昭和十年に比較して一層大きな比率を示し、増加人口の七八%は十府縣内に於いて行はれ、著しい都市集中を現してゐる。又次表に示す産業別人口の比較では農業人口は有業者中の比率に於いても又絶對數に於いても減少の傾向が著しいのである。

大正九年及昭和五年國勢調査産業別人口比較（大分類）

産業	昭和五年 人口	大正九年 人口	有業者一万人中		大正九年=比	
			昭和五年 人口	大正九年 人口	(△、○)	割合
内地人口	64450008	55993053	—	—	8486952	15239
有業者	29619640	27260784	10000	10000	2358956	87
農業	14151025	142886592	4771	5241	△155697	△11
水産業	568453	556602	192	197	51852	59
礦業	515476	447717	107	134	△152241	△295
工業	5875991	5138758	1984	1355	7577535	125
交通業	4905655	3631649	1656	1543	1244006	340
公務自由業	945116	951863	319	349	△6747	△7
教職	2005192	1516765	677	556	489427	322
その他ノ産業	802167	632072	371	243	140095	212
無業者	79582	58764	24	22	11818	201
合計	54830565	28702369	—	—	6126096	214

内閣統計局「産業別人口ノ比較（昭和11）

註大正九年人口は昭和五年産業分類に依り調整したもの

斯くの如き農村人口の減少並にその都市流入は農業経営自体の行きづまりと増加する人口の收容難に原因があり、一方都市の發達並に急速なる工業化、並にそれに伴つて現はれた都市と農村との経済的、社會的不均衡に原因が求められるだろう。これを解決する方策としては耕地面積の増加による收容力の増加、経営の集約化、農産物價格の維持高揚等が取擧げられたが、これらの内容共に工業化には進進し得なかつた。今米栽培の發展に就いて見るに次表の通りである。

農村人口の著しい都市への流動は農村の人口構成を著しく不安定ならしめてゐる。即ち都市に於いては青年層の比重が大きく、農村に於いては小さく、換言すれば生産勞力として優良なる年齢層は農村から排除されて老幼の手に農業生産を託した結果を生じてゐる。又これを農業の發展性から考察すれば日本農業は人口、勞力的見地に於いて完全に行詰りの状態を示してゐることも云はれる。

次にこの人口現象を經營規模の觀點から考察すれば日本農業の本質的性格が一層明瞭に解る。この觀點に於いては日本農業は面積的に極端な零細規模である。これは一應封建的土地制度に歸せられるが、別の原因は我が國土の自然的條件が耕地増加を制約するのみならず、農作業の機械化を特に農業の主体である水田農業に於いて妨げてゐるからである。又一つの原因は過剰人口を農村自体の中で收容しなければならなかつたし、近年に於いて

人口、稻栽培面積、米産額及反當收量

年次	人口	稻栽培面積	米産額	反當收量
	千人	千町	千石	石
明治 11	56,166	2,490	25,283	1,015
(1880)13	56,649	2,570	31,434	1,223
(1890)23	59,902	2,748	43,038	1,566
(1900)33	43,847	2,828	41,466	1,466
(1910)43	49,184	2,949	46,633	1,581
大正 4	52,752	3,057	55,924	1,830
(1920)9	55,964	3,127	63,209	2,022
(1925)14	59,737	3,154	59,704	1,893
昭和 5	64,450	3,239	66,876	2,064
(1935)10	69,254	3,204	57,457	1,793
(1940)15	73,114	3,178	60,374	1,915

大正四年以前は所謂推計人口

内閣統計局、「明治五年以降我國ノ人口」(昭5)3頁「米穀要覽」(昭10)20頁

耕地面積ト戸口

年次	耕地面積		總人口	農家戸數	耕地一町歩當人口		農家一戸當耕地面積	
	計	町			計	町		
明治四十三年	五七一五	千町	五〇、七一七	五、四九八	八、八七	〇、三九		
同 四十四年	五七六〇		五二、一六七	五、五〇〇	八、九三	〇、四七		
大正元年	五八二〇		五三、九一二	五、五二一	八、九六	〇、五四		
同 二年	五八五六		五三、六六九	五、五三九	九、〇三	〇、五九		
同 三年	五八七八		五三、四四八	五、五三九	九、〇三	〇、六二		
同 四年	五九二二		五三、三三三	五、五三九	九、〇三	〇、七〇		
同 五年	五九五九		五三、三三三	五、五三九	九、〇三	〇、七〇		
同 六年	六〇一八		五六、〇三五	五、五三九	九、〇三	〇、七〇		
同 七年	六〇八一		五六、八五一	五、五六一	九、〇三	〇、七〇		
同 八年	六一三五		五六、二三五	五、五六六	九、〇三	〇、七〇		
同 九年	六一四八		五六、九六三	五、五七三	九、〇三	〇、七〇		
同 十年	六一六二		五七、六八七	五、五七三	九、〇三	〇、七〇		
同 十一年	六一五四		五七、六八七	五、五七三	九、〇三	〇、七〇		
同 十二年	六一〇三		五八、四八二	五、五二五	九、〇三	〇、七〇		
同 十三年	六〇六五		五九、一三九	五、五三二	九、〇三	〇、七〇		

てはその解決策として多角的勞働集約經營に移行し、然して勞働集約化すればする程益々零細規模になつたのである。滿洲專變以降に於いてはこの難問に漸く解決の道が開けて來た。即ち滿洲に對する開拓民の移住で、主として農村過剩等力を分村その他の形式で行つてゐる。戦争と建設とを兩立せしめるための策は國家的に又個人的に大きいのが、農業經營の適正化を期するには最も都合の良い時期と云ふべきである。過去に於ける一戸當經營面積の推移は次表の通りである。

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭	同
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	元	十
五	四	三	二	一	九	八	七	六	五	四	三	二	四
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
六〇七八	六〇七五	六〇七二	六〇六九	六〇六六	六〇六三	六〇六〇	六〇五七	六〇五四	六〇五一	六〇四八	六〇四五	六〇四二	六〇三九
七二二二	七二一五	七二〇八	七二〇一	七一九四	七一八七	七一八〇	七一七三	七一六六	七一五九	七一五二	七一四五	七一三八	七一三一
五五九二	五五八五	五五七八	五五七一	五五六四	五五五七	五五五〇	五五四三	五五三六	五五二九	五五二二	五五一五	五五〇八	五五〇一
九八	九一	八四	七七	七〇	六三	五六	四九	四二	三五	二八	二一	一四	〇七
〇七	〇〇	〇七	一四	二一	二八	三五	四二	四九	五六	六三	七〇	七七	八四
〇〇	〇七	一四	二一	二八	三五	四二	四九	五六	六三	七〇	七七	八四	九一
七	〇	七	一四	二一	二八	三五	四二	四九	五六	六三	七〇	七七	八四

(備考) 一、耕地面積及農家戸数ハ「農事統計表」ニ依ル但シ大正十二年迄ハ其ノ農事統計表ニ沖繩縣ノ分ヲ加ヘタモノデアラル  
 二、總人口ハ「日本帝國統計年鑑」ニ依リ大正八年以前ハ

乙種現住人口、大正九年、同十四年、昭和五年及昭和十年ハ各同年十月一日ノ國勢調査ノ現在人口、大正十年以降十三年迄及昭和元年以降同四年迄並昭和六年以降ハ推計人口デアアル。  
 卯チ耕地面積、農家戸数の増加は總人口の増加に對して遅れてゐるので、耕地面積當り人口は著しく増加してゐるが農家一戸當り耕地面積は一・一町歩に固定してゐる状態である。  
 現在農家一戸當り經營面積の地域的分布は次表に示す如く、東北日本が一般に面積が大きく、西南日本が小である。

北海道	農家戸數	經營面積	一戸當り經營面積
奥羽地方	一四七〇三	二八五七七五	一九・四
關東地方	一七四九九	二六二八八〇	一五・〇
北海道	三六三二	一六二九三四	四四・九

北 青 岩 宮 秋 山 福 茨 栃 群 埼 千 東 神  
海 道 森 手 城 田 形 島 城 木 馬 玉 鐵 京 川  
奈

山 反  
八 五 三 四 四 四 三 三 三 二 二 一 一 一 一 一 一 一 一  
九 八 二 〇 〇 三 二 四 四 五 四 三 三 二 二 一 一 一 一

新 富 石 福 山 長 岐 靜 愛 滋 京 大 兵 奈 和  
歌

山 川 井 梨 野 山 岡 知 重 賀 都 阪 厚 良 山

一 一  
二 九 九 九 九 八 八 七 八 六 九 九 二 二  
六 七 七 七 八 九 九 九 八 七 八 六 九 九 二

全國平均

鳥 島 岡 廣 山 德 香 愛 高 福 佐 長 熊 大 宮 鹿 沖  
兒

取 根 山 島 口 島 川 媛 知 岡 賀 崎 本 崎 分 崎 島 總

一 一  
一 九 八 一 八 一 八 一 〇 九 七 六 七 九 六 八 八 九  
〇 〇 一 〇 一 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

計	沖 州 地方	四 國 地方	中 國 地方	近 畿 地方	中 部 地方		北 陸
					東 海	東 山	
一 三 一 八 四 一	三 〇 五 四 九	一 〇 〇 八 三	一 一 〇 二 九	一 三 一 〇 〇	九 〇 八 一	六 一 〇 九	九 二 一 八
一 七 七 九 六 六 五	三 六 七 三 二 八	九 七 四 一 八	一 二 六 九 四 二	一 二 五 九 九 八	一 〇 二 五 九 三	七 三 六 一 四	一 三 九 九 一 八
一 三 ・ 五	一 二 ・ 〇	九 ・ 六	一 一 ・ 四	九 ・ 六 (三重ヲ含マズ)	一 一 ・ 三 (三重ヲ含ム)	一 二 ・ 一	一 五 ・ 二

尙この表は東京府を除き全道府縣に就き各々五ヶの純農村を取り  
 その中の耕作を行はない農家を除いたものの集計で、平均的には經  
 營状態の良好なるものを選んだ結果になる。第一二次農林統計から  
 算出すると次の通りである。

即ち東北日本に於いては氣候條件の制約に依り、概ね一毛作で僅かに二毛作を見る程度であるが、西日本では濕暖の故に周年農作業が可能で、米、麥類を中心に二三毛作が行はれるからである。この場合耕地の利用度は經營面積の廣狹に直接の關係を有するが、今それについて示せば次の通りである。

大 中 小	經營	耕地面積			作付面積			利用度		
		反	反	反	反	反	反	反	反	反
東北區	(岩手、秋田、山形)	三二、一〇九	四四、三一七	一、三八						
關東區	(茨城、栃木、千葉)	二九、五〇三	四四、一二二	一、六〇						
北陸區	(富山、石川、福井)	二九、五二二	四二、七二五	一、四五						
東海區	(岐阜、愛知、三重)	三〇、二二七	四四、三一七	一、四六						
近畿區	(京都、大阪、兵庫)	二六、七一三	四三、五二九	一、六三						
中國區	(鳥取、島根、岡山、山口)	二三、〇二六	四三、四〇二	一、八四						
平均	均	三〇、〇〇七	四六、五二二	一、六五						

大 中 小	經營	耕地面積			作付面積			利用度		
		反	反	反	反	反	反	反	反	反
東北區	(徳島、香川、愛媛)	一七、七二二	二五、四一八	一、四三						
關東區	(佐賀、長崎、宮崎)	一五、五二〇	二三、一〇二	一、四六						
北陸區		一六、九〇三	二七、六〇八	一、六三						
東海區		一五、五二七	二七、一二三	一、七四						
近畿區		一四、六一四	二五、一〇〇	一、七一						
中國區		一六、八二〇	二八、八二九	一、七一						
四國區		一三、九〇八	二六、二一一	一、八八						
九州區		一五、四二三	三二、二〇五	二、〇八						
平均	均	一五、七二二	二六、七一二	一、七〇						

尚この計數中には綠肥作物、永年作物が含まれるための妥當でない



點があるが、一般の傾向を知るときは出来るのである。即ち小經營に於ける利用度は概ね高率で、地區別では九州の調査農家が最高率で、東北が最低率であることは各種の條件から見ても當然である。經營規模の廣狹は以上の如き地域的差違を示すが、この面積が經營上妥當であるか否かはその時代の經濟事情によるし、又家族人口數並に勞力の過不足等に關係がある。前記耕地利用度を示した小經營農家は内地の平均經營面積から見れば遙かに高く先づ中庸の經營を示してゐる。然し、それだけの經營面積を必要とするかに就いては、純經濟的農家收支の觀點に於いて黒字を出す程度の面積を取擧げる場合があるが、これには勿論前提として經營内容の検討を要する。今参考として農林省調査に成る安定農家適正規模に關する調査資料によつて地域別適正規模面積を示せば次の通りである。

農家一戸當の標準面積と現在に於ける耕地面積との關係

道別	農業經營上標準耕地面積(A)		農家一戸當耕地面積(B)		滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	島根	岡山	廣島	山口	徳島	香川	愛媛	
	町反	町反計	町反	町反計															
北海道	一・八	四・七六・五	一・一	三・七	九	九	九	九	九	八	三	五	四	三	二	一	一	一	九
青森	一・四	一・一	七	一・五	八	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	七
岩手	一・一	一・〇	六	一・三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	六
宮城	一・六	一・七	〇	一・四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	八
秋田	二・〇	二・五	〇	一・五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	八
山形	二・〇	二・七	〇	一・四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	六
福島	一・二	一・七	〇	一・三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	六
茨城	一・〇	一・〇	〇	一・四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	六
栃木	一・三	一・八	〇	一・二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	六
群馬	一・三	一・五	〇	一・〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	六

三	愛	靜	岐	長	山	福	石	宮	新	神	東	千	埼
重	知	岡	阜	野	梨	井	川	山	潟	奈	京	葉	玉
一・〇	八	七	八	六	五	一・三	一・二	一・七	一・五	四	五	一・一	一・三
三	五	六	四	五	六	四	七	三	四	一・〇	一・〇	七	一・二
一・三	一・三	一・三	一・二	一・一	一・二	一・六	一・九	二・〇	一・八	一・五	一・五	一・八	二・五
六	五	四	五	三	二	七	七	一・一	九	三	二	七	四
三	三	四	三	五	四	二	二	一	三	六	七	五	六
九	九	八	七	八	六	九	九	二	二	九	八	一・二	一・〇
四	四	五	五	三	六	七	一・〇	八	六	六	七	六	一・五
註	全	全	沖	鹿	宮	大	熊	長	佐	福	高		
	均	國	繩	兒	崎	分	本	崎	賀	岡	知		
	縣	平均	島	島									
農	農	農	農	農	農	農	農	農	農	農	農	農	農
家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
六	六	六	八	九	八	四	七	六	四	三	四	四	四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	六	六	一	三	六	五	六	三	八	八	五	五	五
四	五	六	六	六	六	三	五	五	三	二	四	四	四
九	一	一	七	八	一	八	一	八	一	〇	九	九	九
七	六	四	六	六	六	四	六	二	六	六	五	五	五

これに依つても自然的條件の制約は地域的に大差があり、増加を要する面積も同様であるが平均的には現在の約五割増加を以つて黒字と成り得ることが示されてゐる。

又別の観點からは經營自体の多角化を計るのであるが、若し、面積増加が容易に行はれないとすればこの方途を選ぶより致し方が無い。

經營面積の再編成が將來行はれても理想的には勞働力との關係から役畜の保有、或る程度の農業機械化、耕地の交換分合、土地制度の改良等が勢ひ取擧げられねばならない。

次に土地制度に關する問題としては少數の大地主と多數の小規模經營小作農家によつて構成されてゐるのが内地農業の特色である。昭和十四年の農林統計によると次の通りである。

農家 専業 兼業	耕地		%	自作地	%	自小作地	%	小作地	%
	畑	田							
一八〇六	二八七〇	六〇七九	一〇〇	三二九七	三三・二			二七八一	四三・八
三六八六	三二〇九	三二〇九	100	一五四八				一六六一	
五四九二			%	一七〇〇	三二・〇	自小作者	%	一四六一	%
三六八六			六七・四		二・三三		四六・七		三三・二
一八〇六			三二・八						

耕作耕地廣決別

五反未滿	五反一〇反	一〇反一三〇反	一三〇反一三〇〇反	一三〇〇反以上
一八五四	三三・七	一八〇〇	三三・八	一三二六
千戸	%	千戸	%	千戸
三〇反一五〇反	五〇反以上			
一二二	二・二	七六	一・四	
	%		%	

耕地所有者戸數

五反未滿	五反一〇反	一〇反一三〇反	一三〇反一三〇〇反	計
二四四〇	一三三九	九三七	八四	三三二
千戸	千戸	千戸	千戸	千戸
五〇反一〇〇反	一〇〇反以上			
一〇八千戸	二・二	四三	〇六	三
	%	千戸	%	千戸

即ち耕地の四六％は小作地で農家二二％は小作者耕作農家の三四％は五反未滿ノ耕作者一〇反未滿の總計では六五・五％になる。耕地所有關係では四八％の戸數が五反未滿の所有者一〇反未滿では七四％の多數になる。若し適正規模をこの中で解決しやうとすればこの中の零細土地所有、零細耕地耕作を大面積所有、大耕地耕作との關係に於いて再編成が要望される。然らずんば土地の國家監理を強化して耕地の能率的利用を計らねばならぬだらう。

4 農業の概要

(1) 耕地の開發狀況並に耕地度



地域別耕地増減比較 (単位町歩)

地域	昭和九年末	昭和十四年末	比較増減	増減率
北海道	九四一、九五八	九七八、四七〇	三六五、二	三九%
東羽地方	八九九、四四四	九〇九、八五五	一〇〇、四一一	一一%
關東地方	九三三、三三三	九三三、三三三	〇	〇%
中部地方	一〇九〇、七四五	一〇九〇、三〇〇	四五五	〇・四%
近畿地方	三三三、五八九	五一六、九九一	八九、九八	二七%
中國地方	四七一、九一三	四七〇、六八八	一、二二五	〇・三%
四國地方	二六二、七五五	二六四、六六六	一九一	〇・七%
九州地方	八九三、〇三五	八九三、五五一	二二六	〇・三%
合計	六〇三、七六五〇	六〇七、九四九三	四、一八四三	〇・七%

この表によれば中部以西では中國まで減少し、四國、九州に於いて僅かの増加が見られるに過ぎない。増加の重點は東北日本特に北海道に現はれてゐるのである。

耕地の増減の原因は種々あるが昭和十四年の結果は次の通りである。  
耕地の擴張、潰廢

項目	擴張		潰廢	
	數	率	數	率
開墾	三一、七二一	〇・五%	三〇、九五二	〇・五%
埋立及干拓	二一、七五一	〇・四%	九、七二三	〇・二%
荒地復舊	七三、四六六	一・二%	三、八六二	〇・〇六%
地目變換	二一、〇八	〇・〇三%	四、八四六	〇・〇八%
合計	七四、二八二	一・二%	四四、二五二	〇・七%

即ち擴張では開墾が最も多く潰廢では地類及地目變換に次いで宅地工場建物敷地としての耕地潰廢が著しいのである。我々は以上の耕地増減の比較で面積は現状維持的であると解釋するが潰廢して行く面積を開墾によつて漸く維持してゐるのが現状である。即ち潰廢が若し工業並に都市の發達上不可缺であること

特生産量維持見地カラ  
 るならばこれを補ふたれば相當廣面積の開發可能地を必要とする。

この可耕地に就いての農林省の調査によると次表の如く總計一六二七千町歩、北海道以外では一〇二七千町歩になる。  
 耕地擴張見込總地積(昭和十三年八月末日調)

田	開墾		地目變換	計
	埋立干拓	計		
全	二六〇三七四町歩	三三三三三三町歩	二五八〇八三町歩	四七三〇三九町歩
府縣(北海道ヲ除ク)	一八一四三九	五四二五	一一一九四〇	三三七八三〇
全	一一三〇三九	六五四二	一六九八九	一一五三七〇
府縣(北海道ヲ除ク)	六七〇三七	六四五六	三三八九	六七九〇六二
合計	一三九〇五九三	六一一五	一七五〇七一	一六三六七七九
府縣(北海道ヲ除ク)	八五二七五	六〇七〇七	一一四二二九	一〇二六六九二

これによる可開墾適地は北海道に壓倒的に多く、種類別では開墾が最高率である。田畑の區分では畑が多いが埋立、干拓の中では田が大部分である。この中山林原野に屬するものは三五七二三〇

町歩で適地中の九七・六%である。これも大部分は北海道に在り内地府縣には八三万町歩を有するのである。尙この山林、原野の開墾は當然林業牧畜等との關係が大きいから國土計畫的處理を要するは云ふ迄もない

山林原野開墾見込地積

(單位町歩)

全	山		原野		計
	田	畑	田	畑	
全	一〇三八五〇	六三一七	一四三八六〇	四七八三三三	六三三三〇三
府縣	九四七二五	四九六〇三	七〇二八一六八	二二九三七九	一六九九三三
北海道					六六五二五四
計					一三五七二三〇
計					八三五二三七

次に北海道以外の各府縣に就いて開墾可能地域並に五ヶ年計畫として現在農林當局で開墾豫定割當面積を地方別に計上するに次の通りである。

開田豫定面積並に開墾割當

(單位町步)

地域	五〇町步以上		五〇町步以下		合
	計	割當	計	割當	
奥羽地方	六八六〇六	三二〇六〇	三二七四一	二七八二五	〇六三三三
關東地方	四四七三三	二二二六四	一四五九九	〇八五〇	五九三三二
北陸四縣	六三九五五	三〇九二	七四〇五	五五一五	一四〇〇〇
山梨長野岐阜	一九七〇八	九三三三	一六三三七	二〇七五	三五九四五
東海三縣	〇四七三	四九一二	四八〇五	三六二五	一五二七八
近畿地方	二八七〇	一四〇一	三九七〇	二九五〇	六八四〇
(除兵庫)	二一七	一四〇一	三九七〇	二九五〇	六八四〇
山陰二縣	二二七	一四〇一	三九七〇	二九五〇	六八四〇
山口兵庫香川	二〇三四二	九六三五	二一八二七	一六二三〇	四二三五九
四國地方	二六九九	一三〇五	四八八一	三六三〇	七五八〇
福岡佐賀	六〇四七	二八三六	三〇九六	二二〇〇	九四三
長崎	三五七六	一六七八	四二〇九	三三〇	七七八七
大分熊本	三六九三	六四二二	五九九七	四四五五	一九九九〇
計	二二三三	一〇〇〇〇	一三四九九	一〇〇〇〇	三四七六三〇

開田豫定面積並に開墾割當

宮崎鹿兒島	五六一九	三九八四	六〇二三	四四八〇	一一八四二	八四六四
沖繩	六二八	二二一九	五八二	四三五	七〇〇	二九五〇
計	二二三三	一〇〇〇〇	一三四九九	一〇〇〇〇	三四七六三〇	二〇〇〇〇

地域	五〇町步以上		五〇町步以下		合
	計	割當	計	割當	
奥羽地方	三〇四九〇	五六九三	八二九九	三三三〇	二〇一七八九
關東地方	七六〇一	三六〇九	一〇五六	四三六三	一八二〇三
北陸四縣	一〇六六九	五三八	一四三六	六五〇	二五五〇七
山梨長野岐阜	二四四八	一一二〇	一四七一	六九三五	四二七五
東海三縣	一七五三	八二九	一七三五	七二〇〇	三四九〇八
近畿地方	二五五三	一〇九一	九〇四〇	三七五五	一一五九三
(除兵庫)	七六二八	三三〇三	八七三四	三六二五	一六三六二
山陰二縣	一五五五	七三四	二四九三	一四三〇	五〇五三八
山口兵庫香川	五五〇七	二八九七	一四八八〇	六七〇	二〇三八七
四國地方	二八九七	二八九七	一四八八〇	六七〇	二〇三八七
計	二二三三	一〇〇〇〇	一三四九九	一〇〇〇〇	三四七六三〇

福岡佐賀	5053	2312	15795	635	19877	8447
長崎	2684	1068	406	1705	6790	2773
大分	8609	4062	16668	6955	2577	11027
宮崎	649	3658	19306	810	2555	11868
鹿児島	1321	362	3081	280	1735	4542
沖繩	1321	362	3081	280	1735	4542
計	37533	17700	36150	15000	67962	29750

これからも地籍の餘裕は概ね東北日本にあり、西南日本では九州の南半を除けば既に限界近いことを示してある。

即ち耕地開墾の面から見た農業の立地は氣候的條件の比較的悪い地域に移行しつつある。若し従来通り水稻作りを日本農業の主流として見、これに品種技術の改良が伴はない場合に於ては特に然りである。もつとも北海道、東北に於いては畑地の占める割合が水田よりは遙かに大きいので、氣候的條件に適した畑農業の發達が期待せられるのは云ふ迄も無い。

以上によつて耕地面積の現状維持的性格を述べたが、現状に於ける耕地分布は各種の條件の制約に依り、以て西の温暖地域に於いては平坦部は殆ど完全に開發されてゐるのみでなく、山間の河岸段丘、山地、丘陵の斜面等比較的急傾斜の部分に於いても開發されてゐる狀況で、急斜地に於ける階段狀耕地の發達は日本農業の一特質を示すものに外ならない。



耕地總計は約六百万町歩、全面積の一五・八%の既耕地を有するがこの中三二〇・九万町歩全面積の八・四%、耕地の五三%は水田である。

府縣別に見た耕地面積並にその比率は関東地方の埼玉が四二・六%（内諺水田一七・九%畑六・四%）千葉が三八・一%（内諺水田二一・七%畑一六・四%）で高率を示し、愛知、富山、滋賀、大阪、福岡、佐賀等何れも高率である。尚府縣別には次の通りである。

府縣別土地利用面積並ニ比率

府縣名	總面積 方町	田 方町	%	畑 方町	%	山林 方町	%	原野 方町	%
北海道	八七五	一〇三〇	三三	一七三	八	一八四	二一	一七〇	二一
青森	九六三	七二五	七五	六二七	六五	五五二	五七	九四一	九八
岩手	四〇三	六六五	四四	七八四	五二	八九五	五八	八三五	五五
宮城	七三三	一〇〇〇	一三八	四九三	六二	八四四	五二	三六〇	七七
秋田	一六六	一〇〇	六〇	二六一	三二	六七六	五二	三〇三	三六
山形	九三六	一〇〇六	一〇八	四〇四	四二	七二〇	六三	五〇一	五八
福島	三七八	一〇〇九	七五	八七七	六四	九三〇	六八	六〇〇	四〇
茨城	六〇二	九三九	一五七	一〇九〇	一〇九	二一七	三三	一三三	二二
栃木	六四三	七七八	一二一	六六一	一〇三	三八一	五九	三〇七	四八
群馬	六三三	五三〇	四四	一〇一	一六	三〇〇	四八	三三三	五二
埼玉	三八〇	六七九	一七九	九三九	二四七	一〇八六	二八	一一三	三〇
千葉	四〇六	一〇〇〇	一七九	八三三	一六四	一三三七	三〇	一三三	三六

大	兵	奈	和	鳥	鳥	岡	慶	山	德	香	愛	高	關
兵	庫	良	歌	取	想	山	島	口	島	川	燧	知	關
一八二四	八三三三	四六九四	四七一九	四四八九	六六三三	七〇四六	八〇三九	六〇八〇	四一四三	一八三七	四六六七	七二〇四	四九四四
一〇六八	三二八	三〇三	三〇三	三三〇	五三〇	八七七	七六〇	八二一	二八〇	三九一	四五一	三四二	一三二二
一三三八	八九	六三	六三	六六	八〇	一三三	九〇	一三三	六八	二一一	八〇	四八	二五三
一〇三	二一九	一一三	一八七	一七一	二五八	三三三	三三三	二四三	二四六	一一四	四五九	三二六	四〇九
四七	二六	三二	四〇	四九	五九	五〇	五九	四〇	五九	六六	八一	四六	六三
三三七	四〇三	一七二六	四九六二	一六二二	四九一七	三二一四	四一五二	三八一七	四〇五五	八九一	三七八五	四〇八四	一七八四
一八六	四八四	四六七	六三八	四六三	五三一	四八五	四九二	四六三	七三七	四八〇	四九一	五七三	三六〇
一五	四四七	四九	一三四	四三七	六〇三	七二九	八〇九	四九一	二〇六	四四	二九五	四九六	三三七
〇八	無四	一三	三八	一三一	六一	一〇三	九六	八一	三〇	三四	三二	四二	六八

京	滋	三	愛	靜	岐	長	山	藤	石	宮	新	神	東
都	賀	重	知	岡	阜	野	梨	井	川	山	湯	奈	京
四六二	四〇三	四七六三	四〇八四	七七七〇	一〇四九三	三六二六	四四六六	四四六六	四一九三	四二五七	一五七八	三三六一	三二四三
四二二	六七〇	七九八	九七八	六〇五	六〇三	七三〇	一八三	五〇〇	五三三	八〇七	一八二二	四〇五	九七
九二	一六六	一三三	一三三	七八	六一	四四	四一	一七七	一三〇	一九〇	一四三	八七	四三
一七〇	一〇三	三二一	六二六	七二二	三七七	九九〇	三四七	一一三	一六六	九七	六〇六	四六九	三八〇
四八	三三	三六	一七九	六二	三六	七三	七八	二七	四〇	三三	四八	二六九	二七八
三九三	一三〇	四〇二〇	三三三七	四〇一六	六八〇三	八七五三	一三三三	一七三一	一〇七一	一九七三	六三三七	九九九	七四〇
六四九	四七一	五三四	四六〇	五七七	六四八	六四二	七〇三	四〇三	三三一	四六三	三〇〇	四三三	二四七
二五三	一〇七	二〇三	二七一	五八二	八一三	一四三七	一八五	一五五	一一七	一四七	七二一	一七三	五三
四三	二六	四三	四三	七三	七三	一〇七	四一	四六	三八	四三	四七	四四	三三

佐賀	三〇四九	三三〇	三三五	一六七	六八	七八一	三一九	二〇八	一〇一
長峰	三〇七	三三〇	八三	三〇〇	三三〇	二二八	三三三	一八七	四六
熊本	七〇三三	七九八	一〇七	七七五	三〇四	三三八四	四三三	六九八	一〇九
大分	六三三〇	五八二	九四	三三三	三三三	三二九七	三三一	一〇九四	一七三
宮崎	七三三九	四七九	六二	四六〇	三九	三〇八七	六三七	四七〇	六一
鹿兒島	六二〇四	六三二	六九	一一三〇	三三	四一一	四三二	四九四	六三
沖繩	三三八六	六三	三七	三三六	三三	一〇〇	四三〇	二六三	一七〇

(四) 作物種類別立地の概況

(1) 米

(1) 立地條件

地形

地形は水田耕作を主とするのど灌漑の用水との關係に依り、用水の自然流下を行はしめる程度の平坦地を最も適當とする。急斜地に於いては階段狀に斜面を切り得る程度、即ち傾斜約三〇度が限界である。扇狀地、段丘、臺地、沖積低地、三角洲等は立地上の適地である。

氣温

氣温は可及的に高温を適當とするが少くも四月から十月に至る栽培期間平均二〇度以上を必要とする。従つて西  
南日本から朝鮮、臺灣支那及び南方諸地域は良好な生産地  
域である。東北、北海道では品種に早生種を選んで立地

してゐる。然し、冷涼に過ぎれば冷害を受け、危険が非常に大である。尙東北、北海道の気温分布は次の通りである。

	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	平均
山形	八七	一四三	一九〇	二二三	二四三	一九三	二二五	一七三
秋田	八一	一三二	一八一	二二五	二四一	一九一	一二八	一六八
石巻	八六	一三〇	一七一	二一四	二三五	一九七	一三八	一六七
青森	六八	一一八	一六三	二〇九	二二九	一八五	一一一	一五六
札幌	五二	一〇四	一五〇	一九五	二一二	一六五	一〇〇	一四〇
旭川	三八	一〇三	一五七	二〇〇	二〇八	一五一	八二	一三四
根室	二八	六三	一〇〇	一四二	一七二	一五三	一〇八	一〇九

昭和九年に於ける東北の冷害に當つては平年に比較して次の如き増減を示したのである。

	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	平均
山形	(-) 一、七	〇、七	〇、九	(-) 一、四	(-) 一、七	〇、六	(-) 一、六	〇、八
秋田	(-) 一、三	〇、〇	〇、五	(-) 一、二	(-) 二、一	〇、三	(-) 一、三	〇、八
石巻	(-) 一、七	〇、四	一、五	(-) 一、五	(-) 一、三	〇、九	(-) 一、五	〇、七
青森	(-) 一、四	〇、一	一、二	(-) 一、七	(-) 一、七	〇、八	(-) 二、〇	〇、九

即ち気温に於いては四月は平年よりも低かつたが、五、六月は何れも高温を示し、七月になると気温は低下し、十月迄これが續いたのである。これに關聯して雨量は四月から六月迄は縣により平年に比べて多少の多寡があつたが、七月から九月迄は青森以外は總て多雨、日照もこれと同程く七月から十月に至る四ヶ月間は青森の七月、山形の十月以外平年に比べて何れも不足を示した。この結果調査月日には縣により差違があるが、平年雨量に比べて岩手が五八%減、青森は四七%、宮城は四六%、山形

は四〇%、福島三七%、秋田二四%の減で、總計では平  
年收量一〇一二万石、全年減收量四〇五万石、四〇%減  
を示した。

凶作の原因は元より氣温のみではなく、この外に融雪期  
の遅延したところ、夏半年の氣象異變と品種との關係等、  
各種の要素の錯綜した結果として現れたものである。然  
し關東以西の氣温の高い地域に於いては山間等の外この  
種の凶作は現れ難いことから見て、東北、北海道に於け  
る米作立地は尙不安定である。中部地方の山間部では一  
〇〇〇米前後の地域に米作の限界があるが、この限界地  
域に於いては全じく冷害の危険がある。

### 雨量

氣温<sup>の</sup>高い地域に於いては雨量多く豊富に灌溉用水を得ら  
れることが必要である。低温の地域に於いては灌溉は主

として河川流水に依存し、雨量が多ければ日照不足の危  
険がある。

用水の量は耕地土壌の物理的、化學的性質に關係し、腐  
敗地、砂丘等の砂礫質土壌の地域では漏水が激しいので  
多量の水量を必要とする。斯る地域は床締、容土を行つ  
て漏水を少くする。

海岸、干拓地等の鹽分を含む地域では逆に多量の水を費  
給して鹽分を除去しなければならぬ。

沖積低地又は粘土質土壌或は其他地下水面が高く排水不  
良の地域では暗渠を設けて、漏水を良くしたり地下水  
を低下する要がある。

今用水量の觀測例を示せば次の通りである。

水田に對スル灌溉用水量（昭和十二年）

水系	用水	灌溉面積	最大水量	最小水量
町歩	每	每	每	每
			秒立方尺	秒立方尺
			每	每
			秒立方尺	秒立方尺

河川系		英作川系		庄内川系	
A	用水	五四二七	一、四八(七月二十四日)	〇、〇三八	〇、四三(六月二十日)
B	用水	二、九七四	〇、四九(七月十日)	〇、〇一四	〇、〇五(七月二十七日)
〇	用水	一、四六一	〇、七五(八月二十六日)	〇、〇二一	〇、〇二(八月四日)
技下	用水	一、七五九	一、一三(七月二十日)	〇、〇三一	〇、七三(八月十九日)
鴨	用水	八、二五三	一、三三(七月二十一日)	〇、〇三七	〇、六三(七月十六日)
高	用水	四五〇	一、五六(八月二十三日)	〇、〇四三	〇、〇二(八月二日)
高	用水	三四〇	一、六二(七月八日)	〇、〇四五	〇、〇九(七月十六日)
將	用水	六五七	一、一〇(全)	〇、〇三〇	〇、一一(七月二十五日)
古	用水	一、二五五	〇、八〇(八月三十一日)	〇、〇二二	〇、一〇(七月二十一日)
吉	用水	五二〇	一、一五(七月八日)	〇、〇三二	〇、一九(七月三十一日)
上	用水	二二三	二、一五(八月十八日)	〇、〇五〇	〇、〇〇(八月十八日)
八	用水	二五〇	一、六四(七月十五日)	〇、〇四五	〇、三二(八月八日)
庄	用水	二、九六七	〇、六二(八月二十八日)	〇、〇一七	〇、〇九(七月十五日)

用水量の最大、最小にはこの如く著しい隔りがあるので  
 地域的土地條件に立脚して水量を求める以外に方法はな  
 い。  
 灌溉用水は直接天水によるもの河川水、地下水の引揚等  
 によるもの及びこれらを一處貯水して適宜利用するもの  
 等があるが、これらを中心にした飲料用、灌漑用、工業  
 等の用水統制は各種水利權とも錯綜して極めて重要で  
 ある。  
 各種用水不足は雨量不足に結局原因する。このため河川  
 の流水、地下水水面低下等により折角の用水施設を無効  
 ならしめるが、この程度の雨量不足によるかは用水施設  
 とも關聯して必ずしも明瞭でない。その一つの例として  
 昭和十四年瀬戸内沿岸地域の旱害に就て記せば次の通り  
 である。

昭和十四年は北陸、近畿、中國、四國、北九州、南鮮を通じて測候所開設以來最少の降水記録を現はし、山口、香川、長崎の被害が最も甚大で、其他瀬戸内全域に亘りそれと相當の旱害が齎された。

然し、北陸、鳥取、京都、大阪は用水施設が比較的良好であつたために結果的に見て却つて増收となつてゐる。これを地形上の位置との關係に就いて見ると、中國側では山陰及び山陽に分けると、各河川の沿岸又は沖積低地北四國でも松山平野の一部、今治平野、中山川下流、三豊平野、丸龜平野南部等に於いては用水の便があるので増收を示したのである。前五ヶ年平均収量に比較して四〇%以下の収量と云ふ最悪の旱害を受けたのは島根半島山口縣南部、廣島縣太田川下流から東部、廣島、岡山の諸地域、香川の大部分、幡磨平野の丘陵地域等である。

用水温度に就いては平均三〇度前後を必要とする。このため東北、北海道中部以西の山間部等に於いては冷水灌溉のため、生育不良を來す場合が多いので、特に水温を高からしめるために導水溝の「ヌルメ」「ヨケ」等の施設があり、又低水温に耐へられる品種を選んだり、或は稗を水口に植へたりする。

社會的經濟的條件に就いては省略するが、耕地に對し農家戸數及び人口が多く經營規模が小になれば集約的多角經營の必要から米作に利用し得る耕地の比率は小になり余剩販賣數量は減少する。戸數及び人口が減り、經營規模が或る程度大になれば反當収量も増しその他全てが増加する。

勞働力の側からすれば水田米作農業の特殊の性格のために經營面積が或る限度以上になれば經營は粗放になり、

反當收量は減退する。

この最高能率の經營規模は農業者の能力、技術等の個人的差違に原因する部分が大である。

(四) 水稻耕種技術の發展

この項は日滿農政研究會編、「内外地農業生産力に関する基礎資料」中「耕種技術の發展」を轉記したものである。

その原資料は農商務省、農林省の資料により、取り擧げた府縣は成るべく地域的に日本農業を代表するものさされてゐる。吟味すべき内容が複雑であり、全國道府縣に互つての記載は寧ろ繁雜の傾があるので、一應前記の如く整理されたものを記した。

この中で注意すべきことは上段の指標、反當收量の各地域に於ける増加が下段の各項目の發展によつて著しく増

加したところである。然も自然的立地條件の不良なる東北北海道に於ける發展は西南日本に比較して特に著しいことである。この點は自然的災害を受け易い米作農業を將來尙發展せしめ、且つより安定せしめるために大きな示唆をなすものである。



日本内地 水稻耕種技術ノ發展

地方指標	項目	大正二年	昭和八年
(A) 明治十六年	(4) 種穀ノ稼措 (A) 品種	早生種 (二二%) 早生神力 中生種 (三四%) 中生神力 晚生種 (五四%) 神力渡船 鹽水撰 (九六%)	一三% 愛國 四二% 慈賀早神二一號 慈賀中生旭二九號 四五% 慈賀旭二〇號 唐箕撰鹽水撰併用六〇% 内外 苗代一坪當四合一反步作 付三苗代四一六坪
	(D) 播種量 (B) 撰種	1	

賀	平均反當 收量二八八石	乃至昭和十二年 年平均反當 收量二六五〇 石	(B)昭和八年 收量二二五〇	(H)苗代	共同苗代ヲ一般トス但共 同作業ノ完備セルモノ約 四〇%	殆ト全部個人苗代
	(A)正條植	(C)適期植付	(D)株數本數	(I)植付方法	早生種一坪當五本植五六 株	片正條九〇% 普通一坪當五〇株三本 植 最多シ
	(E)除草	(F)草	(G)五月下旬一六月中旬 普通四回雁爪又ハ太一車 ヲ利用ス但シ第三回以后 ハ手取	(J)中正種 四本植四九株 晚生種 四本植四二株	五月下旬一六月中旬 普通三、四回第一回廻轉除 草器第二回廻轉除草器又 ハ手取第三回以后ハ手取 ヲ普通トス	

(K)肥	元肥ニ厩肥紫雲英 厩等ヲ用ヒ追肥ニ大豆粕 過磷酸石灰等ヲ用フ	厩肥(三〇〇%) 紫雲英 (二〇〇%) 大豆粕(一 〇%) 過磷酸石灰銅線等 多ク用ヒラル。	販賣肥料反當五圓内外	(L)所要勞力	元肥ニ厩肥紫雲英銅線厩 等ヲ用ヒ追肥ニ大豆粕 過磷酸石灰等ヲ用フ
(M)深耕地	二貫	磷酸一、三一六一、三五二 加里一、四〇五、一、七三〇 (本田反當施肥分量)	反當二三、四七人(男)	(N)牛馬耕面積	四一六寸
(O)種籾ノ檢措	六〇%				

	2 佐		
	雙		
	B/A	(B)	(A)
	1152	2602	1714
		(B) 株數本數	(A) 正條植
(B) 肥料	(C) 適期植付	(D) 除草	
平埴部ニテハ紫雲英(反 200ㄟ) 青刈大豆(一 00ㄟ) 蚕豆(300ㄟ	五月下旬ー七月上旬 普通一回第一回雁爪打第 二回雁爪直二回手取ヲナ ス	早生種一坪當五〇乃至六 〇株七八本 晚生種 五〇乃至六〇株 一株四・五本	早生種(三五%) 白紅屋 早神力 中生種(一五%) 雄町米 ノ山白玉萬作
	六月下旬ー七月上旬 普通四 一五回第一回一第 二回雁爪打又ハ爪長キ田 打車第三回以后ハ八反取 第五回ハ手取	正條植七〇%片正條三〇 % 四八一ー〇〇株三一七本 四八一ー〇〇株三一七本	五% 儀坊主(〇、二%) 七% 中生神力(〇、六%) 米ノ山(〇、四%) 雄町 (一、九%) 八八% 神徳(三一%) 神山(三四%) 旭(二四 %)

(A) 品	(B) 撰種	(C) 播種量	(D) 苗代
早生種(三五%) 白紅屋 早神力 中生種(一五%) 雄町米 ノ山白玉萬作	鹽水撰、全部普及	一坪ニ付五合ー一升一反 歩ノ植付ニハ苗代四坪乃 至二〇坪	全般的ニハ個人苗代多シ
五% 儀坊主(〇、二%)	鹽水撰大部分行ハル	一坪ニ付三合ー七合一反 歩當苗代坪數五坪ー一〇 坪	殆ト全部個人苗代
七% 中生神力(〇、六%) 米ノ山(〇、四%) 雄町 (一、九%)			
八八% 神徳(三一%) 神山(三四%) 旭(二四 %)			

8 大 分	(B)	(A)					
$\frac{B}{A}$ 一六〇	二二七一	一四一八					
(B) 株數本數	(A) 正條植	(C) 植付方法	(D) 正條植	(E) 播種量	(F) 播種	(G) 播種	(H) 播種
早生種六〇一七〇株一畝		普通個人苗代		廣水撰五〇一六〇%唐 廣撰三〇一四〇%	晚生種(四〇%) 神力 可	中生種(四〇%) 渡船雄 穀良都	
七〇一九〇株七一〇本		正條植六五片正條三二		一坪當四一五合一反當苗 代七一五坪	七七%大分三井二〇 旭	一三%	
		%		共同苗代三%集合苗代四			

(A) 品種	(B) 深耕度	(C) 牛馬耕面積	(D) 種親ノ豫措	(E) 所要勞力
早生種(二〇%) 辨慶、				
一〇%	四一五寸	九〇%		
	動力三、五〇一四、五〇馬力			
	畜力一、三八一、三五頭			
	勞力一、六四四、二〇、二〇			
	加里 一〇三六			
	磷酸 一、四四六			
	望素 二、四一六貫			
	表的ノモノナリ			
	販賣肥料反當三圓乃至五圓			
	等ノ深肥ヲ多ク用フ			



(O) 適期植付	七・八本 中生種五〇、一七〇一株六 七本 晚生種四〇、一五〇一株四 五本 六月上旬、七月上旬 四回乃至五回雁爪除草草 八段摺等使用	四〇、一八〇株三、九本 四〇、一七〇株三、七本 五月下旬、七月上旬 二回乃至四回雁爪又ハ中 耕除草器ハ反取手取ノ順 ニ行フ 堆肥青刈大豆硫酸安過燐酸 石灰等最モ多シ 本田肥料反當 窒素二、〇〇〇貫、一、二、八八
(ニ) 除草	堆肥野草青刈大豆紫雲英 稻藁ノ稗最モ多ク大豆粕 油粕干魚 硫酸安過燐酸草木灰石灰等 之ニ次グ	
(ホ) 肥料		

(イ) 所要勞力	販賣肥料多キ地方ハ三圓 乃至七・八圓其ノ他ハ一 圓乃至三圓 勞力一七五〇、一、二、一、五〇 人(男) 畜力〇、六五、一、〇五頭 動力一、八〇馬力時 三、一四寸 九八%	〇貫 燐酸一、五八五、一、二、〇〇〇 加里〇、六〇〇、一、九七〇
(ロ) 深耕度		
(ハ) 牛馬耕面積		
(ニ) 種親ノ豫措	早生種(二〇%) 出雲早 生道明 中生種(三五%) 福山雄	二七% 八反一〇號 二七% 銀坊主龜治
(A) 品 種		



4 廣  
島 (A) 一、三、八、三  
B/A 一、九、六、一  
一、四、八

(B) 播種	(C) 播種量	(D) 苗代	(E) 植付方法	(A) 生條	(B) 株數本數	(C) 適期植付	(D) 除草
町八段草 晚生種(四五%) 神力	鹽水糞八〇% 一坪當三丁五合一反步當 一〇坪内外	共同苗代五〇%	早生種一坪當七八本五六株 中生種、五六本四二株 晚生種、三四本三六株 六月中旬一七月上旬 五回最初二回太一車後二回	四六%雄町八號小天狗八號	正條植一〇〇% 三一八本五〇一三二五株 二一八本四五一二二五株 二一八本三六一二二五株 五月上旬七月上旬 三一四回第一回第二回、		

(F) 所要勞力	(G) 肥料
手取 三回第四回手取 堆肥紫雲英過燐酸石灰硫 安大豆油粕煉ノ油等	堆肥山草乾餾大豆粕過燐 酸石灰最モ多ク泊粕硫安 調合肥料 之ニ次グ 販賣肥料 反當二丁七圓
畜力 二、〇〇一三、二〇頭	壘素 二、四〇〇貫一、三、九 八一貫 燐酸 一、六四二一、三、三〇 加里 二、一九六一、三、九五 三 勞力 二〇、四〇一、二、一、五 〇人(男子)

靜岡		(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)
D/A		石	二二九八	二四七四	二四七四	二四七四	二四七四	二四七四	二四七四
(A) 正條植	(B) 株數本數	(C) 適期植付	(D) 除草	(E) 肥料	(F) 植付方法	(G) 播種量	(H) 選種	(I) 品種ノ豫措	(J) 牛馬耕面積
早生種一坪當七八本六〇株内外	早生種一坪當七八本六〇株内外	六月上旬一六月下旬	三四回雁爪雁爪直其ノ後 手取トス	堆厩肥青刈大豆大豆粕 過燐酸石灰最モ多ク紫雲 英蚕豆刈草雜粕菜種粕米 粕燐耐粕蚕糞等之ニ次グ	正條植六〇%片正條二五%	一坪五六合一反當苗代一〇坪内外	鹽水換五〇%	早生種(三一%) 美濃撰、 愛國	動力 一、〇〇馬力時 九二%
中生種 六七本五〇株内外	中生種 六七本五〇株内外	六月中旬一六月下旬	三四回	堆厩肥配合肥料硫酸安過燐 酸石灰等最モ多シ		一坪三十四合一反當苗代八坪		中生種(四九%) 神力雄 町大和錦黃笹竹成竹芳	
晚生種 四五本四〇株内外	晚生種 四五本四〇株内外	六月中旬一六月下旬		蜜素 一九八〇貫一三、八〇〇貫		集合苗代五%共同苗代無		晚生種(三〇%) 晚白笹 笹二本晚千本曙	

(A) 品	(B) 深耕度	(C) 牛馬耕面積	(D) 播種量	(E) 選種	(F) 品種ノ豫措	(G) 苗代
早生種(三一%) 美濃撰、 愛國	動力 一、〇〇馬力時 九二%		一坪五六合一反當苗代一〇坪内外	鹽水換五〇%	早生種(三一%) 美濃撰、 愛國	個人苗代ヲ一般トス
中生種(四九%) 神力雄 町大和錦黃笹竹成竹芳			一坪三十四合一反當苗代八坪		中生種(四九%) 神力雄 町大和錦黃笹竹成竹芳	集合苗代五%共同苗代無
晚生種(三〇%) 晚白笹 笹二本晚千本曙					晚生種(三〇%) 晚白笹 笹二本晚千本曙	



販賣肥料三、四圓程度

燐酸 一、〇七〇—一、五〇

五

加里 一、〇三一—一、三三九

五

勞力 一七六〇人(男)

勞力 〇、五〇頭

動力 〇、八〇馬力時

三寸

四五%

八%早生愛蘭三〇號

七六%陽取新三四號愛蘭

早生種 (三〇%) 信州早生  
中生種 (六〇%) 愛蘭

(A) 所要勞力  
(B) 深 耕 度  
(C) 牛馬耕面積  
(D) 種 類ノ豫措  
(E) 品 種

6 群

馬

(B) 一、二一四

B/A 一、一五七

(A) 一、三六〇

石

(B) 播 種

晚生種 (二〇%) 夕張

六號

一六%撰一二七號

(D) 播 種 量

鹽水撰七五%  
一坪當三、四合一反當苗

代一五坪内外

一坪當一、五—三合一反當

個人苗代チ一級トス

一五坪内外  
共同苗代七%集合苗代二

〇%

(C) 植付方法

(A) 正 條 幅

正條幅一五%片正條八五

(B) 株數本數

早生種一坪當六本植五六

五—七本 六〇—八〇株

中生種、五本植五〇株

四—六本 四五—七二株

晚生種、四本植四二株

三—五本 四二—六〇株



(二) 除 草	(內) 肥 料	(イ) 所要勞力	(ロ) 深 耕 度	(ハ) 牛馬耕面積	
四回第一回万能雁爪田打車第二回雁爪直第三回以後手取	線地大豆堆肥大豆粕多ク 過燐酸石灰硫酸完全肥料 蚕蛹類石灰之二次グ	二一三回第一回田打車第二回以後手取	二、四〇〇貫一、七〇〇貫	二、〇二〇—二、五四〇 加里一、八四〇—二、一四〇 勞力二〇人(男子) 畜力二〇頭	四寸 八五%

(イ) 種 類	(ロ) 播 種 法	(ハ) 播 種 量	(ニ) 播 種 代	(ホ) 播 種 方法	7 福 井
(A) 品 種	(B) 播 種 法	(C) 播 種 量	(D) 播 種 代	(E) 播 種 方法	B/A 一 一 三 七
早生種(二六%) 美後、大場	鹽水攪五〇%	一坪當四一八合一反當苗代八一〇坪	一、〇坪	一般二個人苗代	二、一五〇
中生種(三六%) 妙見信州 巾着	他國	一坪當四一八合一反當苗代八一〇坪	三、一〇合一反當苗代八一〇坪	一般二個人苗代集合苗代七〇%ニ及ブ	一、五五八
晚生種(三八%) 白珍子、八幡一本加賀巾着赤小珍		二五%白珍子			
三二%福井銀坊主福井大場一號		四三%中生一本早生神力			

(A) 正條植	(B) 株數本數	(C) 適期植付	(D) 除草	(E) 肥料
正條植八〇%片正條二〇%	早生種一坪當五、六本五〇一六〇株 中生種一坪當四、五本五〇一六〇株	晚生種、三、四本四〇株 五月下旬一六月中旬五〇株	三回第二回ハ中耕鋤第三回ハ手取	堆肥人糞尿大豆粕野草、 胸線紫雲英最モ多ク 籾ノ粕草木灰桐油粕菜種
	三一六本 五〇一七七株	二一四本 五〇一七四株	五月月中旬一六月上旬	大豆粕紫雲英又ハ石灰窒素ヲ主トナスモノ多シ 窒素一九七五—三一三〇
	三一五本 五〇一七四株	三一回第一回手取又ハ平鋤第二回中耕除草器第三回以後手取		

(F) 所要勞力	(G) 深耕度	(H) 牛馬耕面積
勞力二七八六 (晚植田) 一三三二〇 (早植田) (男子)	蓄力 (晚植田) 一、五四頭 動力 ( ) 三、三〇馬力時	四寸 四五%
加里、五〇〇—二、七五〇		
籾之ニ次グ 販賣肥料反當口一〇〇圓		



(1) 種籾ノ選措	(A) 品 種
早生種(三〇%) 高田早生早坊主越前早高屋越中坊主	三〇% 陸羽二〇號籾ノ尾一號
中生種(五〇%) 石白、愛國久助、毛石白、銀葉三升成	五〇% 銀坊主巾生改良愛國陸羽一三二號
晚生種二本三晚高官雲雀萬七等	二〇% 愛國七〇〇號新石白
(B) 撰 種	
鹽水撰九九%	
(C) 播 種 量	
一坪當口一六合一反當苗代一〇坪	一坪當二合一反當苗代七
(D) 苗 代	一〇坪
	共同苗代一% 集合苗代一〇%

B 新 潟	
(A) 一石	(B) 二石
D/A	一四七
(A) 正 條 植	(B) 植付方法
早生種一坪當七八本四八株	正條植九五% 片正條五%
中生種 六七本四二株	一三本 四二一六〇株
晚生種 五六本三六株	一三本 四二一六〇株
五月下旬一六月下旬	六月上旬一六月下旬
(C) 適期植付	三一回第一一第二回ハ
(D) 除 草	除草器第三回以后手取ト
千行ハレルノミ	ス
(E) 肥 料	堆肥大豆粕紫雲英硫酸安邁
販賣肥料、反當三一四圓	燐酸石灰石灰窒素等取モ多シ
	窒素三一五五一二九七五

9 茨	(A) 一三九七	(B) 撥種	鹽水撥六七%	一三%
減 (B) 一八八九	(A) 正條植	(C) 播種量	一坪當四合一反當苗代一五坪	一坪當三一四合一反當一〇一二〇坪
$B/A$ 一四六	(D) 植付方法	(E) 苗代	個人苗代通苗代ハ眞壁地方ニ行ハル	個人苗代ヲ一級トス集合苗代九%
	(F) 株數本數		早生種一坪當七八本六〇 一七〇株	正條植一三%片正條三四%
			中生種 六七本五〇 一六〇株	二一九本 五〇一八〇株
				二一九本 五〇一八〇株

(A) 品種	(B) 所要勞力	機酸一六七〇一三、八五五
(C) 種源ノ取措	(D) 深 耕 度	加里一、九二〇一三、七〇〇
(E) 牛馬耕面積	(F) 勞力	勞力 二一、四二人(男)
	(G) 畜力	畜力 二、〇五頭
	(H) 動力	動力 五、一〇馬力時
	(I) 深 耕 度	四一五寸
	(J) 勞力	三五%
	(K) 畜力	一二%
	(L) 動力	七五%愛國茨城二號無芒
		愛國國益茨城一號



(D) 適期植付

五月下旬 - 六月下旬

六月上旬 - 六月下旬

(E) 除草

三回鋤テ手取トス

二 - 三回手取ヲ主トス、  
但シ正條片正條ノトコロ

(F) 肥料

堆肥 青草 大豆 粕 糞 / 粕 糞  
ノ他 魚肥 過燐酸石灰 最モ  
多ク調合

堆肥 大豆 粕 過燐酸石灰 硫酸  
安硫酸 加里等ヲ主タルモ  
トス

肥料 硫酸安大豆之ニ次グ

鹽素 二、三五〇 - 二、七五

販賣肥料一反當四圓

〇貫  
燐酸 二、二〇三 - 二、四九

加里 二、五七五 - 三、二〇

勞力 二、三、二〇 - 二、四、五

勞力 二、三、二〇 - 二、四、五

(H) 所要勞力

(I) 深 耕 度

(J) 牛馬耕面積

(K) 種 類

(L) 品 種

〇人(男)

畜力 二、七〇 - 四、〇〇

頭

動力 〇、六六 - 〇、七五馬

力時

四 - 五寸

三六%

(大島地方ヲ除ク)

一三%

一四%

早生種 (五%)

甲生種 (三五%) 薩摩白

玉雄町石割

晚生種 (六〇%) 神力金

時糶

七三% 鹿兒島旭一號三井

神力高農三五號

10 鹿兒島  
(A) 一、二四二  
(B) 一、七六八  
B/A 11442

(D) 換種	(C) 播種量	(B) 代	(A) 植付方法	(A) 正條種	(B) 標本數	(C) 適期植付	(D) 除草
鹽水換八〇%	一坪當三〇合一反當苗 代一五坪	一般二個人苗代ナリ	早生種一坪八九本六四株 中生種一七八本五六株 晚生種一三四本四九株 六月上旬一七月初旬 四回第一回雁爪、太一車 第二回以後手取ヲナス	正條種一〇〇%	四一〇本四九一七〇株 四一〇本四九一七〇株 四一〇本四九一七〇株 六月中旬一七月上旬 三回第一回太一車第二回 太一車又ハ手取第三回手 取	一坪當一〇五合一反當七 一五坪 共同苗代一〇% 集合苗代九 %	

(F) 肥料	(H) 所要勞力	(I) 深耕度	(J) 牛馬耕面積	(K) 稻糞ノ豫措
堆肥青刈大豆獸骨粉等最 モ多ク大豆粕菜種粕等之 ニ次グ 販賣肥料反當二圓内外	青刈大豆骨粉配合肥料最 モ多シ 窒素 一、四八〇一、六六 〇貫 磷酸 一、一六〇一、七六 九貫 加里 一、四〇〇一、二五一 七貫 勞力 一八、九五(男) 畜力 一、七頭 四寸 九五%			

II 岩手		(A)	(B)	(C)	(D)	(A) 品
		一〇石	一六六九			早生種(三五%) 白稻、若松二十日
						中生種(四七%) 赤稻、岡山女夫秋田白稻短穗元
						録
						晚生種(二八%) 豊後、目黒種
						藍水糞四〇% 其ノ他ハ糞又ハ厩糞撰チナシ水糞チナス
						一坪當五一反當一〇一二坪
						個人苗代
						三〇% 岩手早生大野一號 早生大野
						六〇% 陸羽一三二號(四七%) 岩手龜ノ尾
						一〇% 鶴ノ橋
						一坪當三合一反當一二一三坪(普通)
						個人苗代

		B/A				
		F		一五四		
(A) 正條植	(B) 株數本數	(C) 適期植付	(D) 除草	(E) 肥料		
早生種一坪當六七本五五株	早生種一坪當六本五七株	六月上旬一六月下旬	三回多クハ手取トス	厩肥、刈敷肥料、人糞尿		
中生種一坪當五本五七株	中生種一坪當六〇一三〇株	五月下旬一六月中旬	三回第一回ハ除草器、第二回除草器少ク手取第三回手取	最多ク大豆粕魚粕菜粕粕之ニ次グ		
晚生種一坪當四本九株	三一一〇本六〇一三〇株					
片正條八〇%						







(C) 深 耕 度  
 (D) 牛馬耕面積  
 (E) 種 類ノ豫措  
 (F) 品 種  
 (G) 換 種  
 (H) 播 種 量  
 (I) 播 種 方 法

〇貫  
 三一四寸  
 九七%  
 早生種(三五%) 坊主六  
 號 走坊主  
 中生種(六五%) 坊主二  
 號チンコ坊主一號、坊主  
 五號  
 鹽水換五〇%  
 反當 一二〇合(普通)  
 直播ノ時期ハ五月中旬  
 一六月上旬直播器ヲ用フ

(O) 適期植付  
 (P) 除 草  
 (Q) 肥 料

六月上旬一六月下旬  
 三回 手取ヲ主トス  
 肥料ヲ施スモノ少ク開墾  
 後稍々久シキ地方ニテハ  
 厩肥ニ三百貫及人糞尿ヲ  
 用フ

四一五本 六四一〇  
 〇株  
 四一五本 六四一八一  
 株  
 二一三回第一回除草器  
 第二回以后手取  
 堆肥煉粕過燐酸石灰等ヲ  
 元肥トシテ用フ  
 窒素 一、五九〇一、七二  
 〇貫  
 燐酸 一、六一〇一、二四  
 〇貫  
 加里 一、一九〇一、三四

北海道  
直轄地方

(ハ) 除 草

(ニ) 肥 料

正條播ノ割合三〇%

片正條播七〇%位ナリ

三回何レモ除草器ニヨリ

後手取ヲナス

堆肥礫柏大豆粕燐酸石

灰硫酸加里等ヲ主トス

窒素 一、三九〇一、七二

〇質

燐酸 一、六一〇一、七四

〇質

加里 一、一九〇一、二四

〇質

勞力 一三、八八一—一四、三

四人(男)

(樹) 所要勞力

畜力 一、二〇頭

(ハ) 深 耕 履

動力 四、八〇馬力時

(ケ) 牛馬耕面積

四寸  
一〇〇%

註 1, 本表ハ農商務省「日本主要農作物耕種要綱」(大正二年)及農林

省「水稻及陸稻耕種要綱」(昭和八年)ニヨリ作成

註 2, 1 滋賀ヨリ 12 北海道マデノ地方群ハ水稻生産力ノ段階ヲ基準トシ

テ選ンダモノデアリ、日滿農政研究報告第六輯「米の生産構造に關す

る研究」(大谷省三委員提出)ノ區分ニ從ヒ特ニ明治十六年乃至大正

元年ノ平均反當收量(A)ニ對スル昭和八年乃至昭和十二年平均反當

收量(B)ノ割合ノ顯著ナル地方ヲ選ンダモノデアアル

註 3, 北海道ハ移植地方ト直轄地方トノ區別アルモ大正二年ノモノニ付

テハソノ區分明瞭ナラザル爲比較シ得ズ昭和八年ニ於ケル移植作付面

積ハ三五三二五町、直積作付面積ハ一六三三二七町デア

註 4、耕種技術ノ發展ハ先ツ最モ普遍的ニハ品種ノ改良ト肥料ノ有機質

肥料カラ化學肥料ヘノ變化トシテ認メラレル。

ソノ他播種量ガ一般ニ減少シテ來テキル點、正條植ノ普及並ニ除草ニ於ケル廻輕除草器ノ普及ガ遅レタ地方ニ於テ特ニ目立ツテ來テ居ル點ガ觀取セラレル

生産過程ニ於ケル労働ノ節約ハ極メテ徐々トシテデハアルガ發展シテキルコトヲ知り得ル。

同様ノ傾向ハ朝鮮、臺灣ニ於ケル場合ニモ觀取セラルルトコロデアアルガ朝鮮、臺灣ニ於テハ品種改良、施肥改善ノ力ガ、ヨリ一層ニ強ク作用シテキル様ニ思ハレル。

朝鮮ニ於ケル本田耕起ノ深耕度が大正十五年ノ二寸程度ヨリ現在三寸程度ニ深化シタコトハ注目スベキコトデアアル。

内地ニ於テハ滋賀ノ四一六寸等ヲ最高トシテ、三一四寸ノモノヲ普通トスル現状デアアル。

#### (ハ) 増産計

農林當局の計畫を簡單に記すが、要するに先づ耕地を廣く求めることと、基礎條件である土地の改良及び耕種の改善に重點がある。

其の概要は昭和十六年度以降十ヶ年を期間として第一期計畫を樹て第七六議會の協賛を経て實行に着手したのである。即ち米に就いては昭和十七年乃至昭和二十七年を第一期とし、その増産目標を一一七一万八千石、總計八二八七千石に麥類(大麥、裸麥)は昭和十八年乃至二十八年を第一期とし、一二三一一千石(裸麥として)の増産、總計二五四〇一千石を期するのである。この内米に就いては全増産量の七五%、麥類に就いては同じく八〇%を農地の造成及び改良に依つて求める。畑地の造成、改良に於いては大豆五八五千石、雜穀五七五千石根菜類二五五〇〇万貫の生産

事業別米増産数量

増加を圖らんとするのである。今その區分を示せば次の通りである。

事業別	區分			
	開内	開畑	農改	計
米	二〇〇,〇〇〇町	四〇〇,〇〇〇町	七〇〇,〇〇〇町	九一〇,〇〇〇町
増産数量	一	一	一	一
計	二〇〇,〇〇〇	一,一七五,〇〇〇	二,〇八〇,〇〇〇	一,三〇〇,〇〇〇
増産数量	一	一	一	一
計	一,九二〇,〇〇〇	一,一七五,〇〇〇	二,〇八〇,〇〇〇	八四八九
備考			大規模用水改修 水改修用水 水改修用水 農用公共施設 設才含ム	

年度別竣工面積

年度別	開田	開畑	農地改良	計
昭和十六年度	四二〇〇町	一一〇〇〇町	一〇六二〇〇町	二二二,四〇〇町
昭和十七年度	一五五〇〇	三九五〇〇	二一五三二五	二七〇,三二五
昭和十八年度	二六九〇〇	六〇,五〇〇	二六七八二五	三五五,二二五
昭和十九年度	三四〇〇〇	六三,〇〇〇	三〇,三二五	四〇〇,三二五
昭和二十年度	三八〇〇〇	六三,〇〇〇	三三九八二五	四〇〇,八二五
昭和二十一年度	三四一〇〇	四二,〇〇〇	一七三,五〇〇	二四九,六〇〇

開田、畑、土地改良の中、開田、畑は昭和十六年度乃至、二十年度の五ヶ年間に着手し、二十五年に完了、自作農創設移住施設として六万余戸の家屋建築を含んである。改良事業は耕地整理以外は昭和十七年度乃至二十年の四ヶ年間に着手し、昭和二十六年に完成せしめる計畫である。その年度別竣工面積は次の通りである。

年度	昭和二十二年	昭和二十三年	昭和二十四年	昭和二十五年	昭和二十六年	計
米	23,300	21,000	12,900	17,300	17,200	92,700
麥	1,200	1,000	8,900	10,100	10,100	31,300
開田	1	1	1	1	1	5
麥畑	1	1	1	1	1	5
農地改良	1	1	1	1	1	5
米設計	1	1	1	1	1	5
麥設計	1	1	1	1	1	5
計	200,000	300,000	172,000	222,000	222,000	1,144,890

耕種改善施設は、適良品種の普及、病虫害懸際、豫防、農業技術の改善、普及に重點が置かれる。向この外に農業試験場の擴充も基礎的試験、研究として重視されるのである。尙經費は開田、畑、土地改良で、一三四四五一八千圓、耕

年度別米麥増産數量  
 種改善、試験研究で一〇四三八四千圓、合計一四四八九〇二千圓の巨額になる。  
 耕種改善を除く増産の年次豫定數量は次の通りである。

年度	昭和十六年度	昭和十七年度	昭和十八年度	昭和十九年度	昭和二十年度	昭和二十一年	昭和二十二年
米	84	310	538	680	760	682	682
麥	1	19	71	122	155	173	173
開田	1	1	1	1	1	1	1
麥畑	1	1	1	1	1	1	1
農地改良	1	1	1	1	1	1	1
米設計	1	1	1	1	1	1	1
麥設計	1	1	1	1	1	1	1
計	1	1	1	1	1	1	1



東 京	神 奈 川	新 潟	富 山	石 川	福 井	山 梨	長 野	岐 阜	靜 岡	愛 知	三 重	滋 賀	京 都
四八 千	六八 千	二四〇 千	九 千	七三 千	六三 千	五三 千	一七三 千	一〇三 千	一三三 千	一六一 千	一〇四 千	七八 千	六〇 千
一三三 千町步	二七 千町步	一八〇 千町步	八〇 千町步	五四 千町步	四八 千町步	一八 千町步	六九 千町步	六三 千町步	六三 千町步	九五 千町步	七二 千町步	六四 千町步	二〇 千町步
三七・一 千町步	三九・七 千町步	七三・八 千町步	八七・九 千町步	七五・〇 千町步	七七・四 千町步	三四・〇 千町步	三九・九 千町步	六一・三 千町步	四六・六 千町步	五九・〇 千町步	六八・三 千町步	八二・一 千町步	六六・七 千町步
一〇 千町步	二 千町步	一八四 千町步	八一 千町步	五五 千町步	五 千町步	一九 千町步	七四 千町步	六五 千町步	六一 千町步	九九 千町步	七二 千町步	六八 千町步	四三 千町步
九 千町步	二〇 千町步	一七九 千町步	八〇 千町步	五四 千町步	四八 千町步	一八 千町步	六八 千町步	六三 千町步	五八 千町步	九四 千町步	七一 千町步	六四 千町步	四〇 千町步
八九・五 %	九四・七 %	九七・三 %	九七・九 %	九六・六 %	九五・八 %	九三・六 %	九三・一 %	九六・六 %	九五・九 %	九五・八 %	九八・六 %	九三・七 %	九三・六 %
二二七 千石	五二九 千石	三九八 千石	一七五 千石	二二四 千石	二〇六 千石	四三六 千石	一五四 千石	三六七 千石	二三四 千石	二二〇 千石	二四五 千石	二五〇 千石	八七 千石
一七三 千石	四五 千石	三九六 千石	二五 千石	二四三 千石	二〇六 千石	四三三 千石	二五三 千石	三三八 千石	二二九 千石	三〇九 千石	二四四 千石	一五〇 千石	八七 千石
七六・二 %	八五・三 %	九九・三 %	九九・九 %	九九・〇 %	一〇〇・〇 %	九九・三 %	九九・四 %	九九・三 %	九九・五 %	九九・五 %	九九・七 %	一〇〇・〇 %	一〇〇・〇 %

千 葉	埼 玉	群 馬	栃 木	茨 城	福 島	山 形	秋 田	宮 城	岩 手	青 森	北 海 道	府 縣 別
一九四 千	一六三 千	一一五 千	一四五 千	三三一 千	一三二 千	一四三 千	一四四 千	一四六 千	一四五 千	一三五 千	六八 千	耕 地 總 面積
一一四 千	七八 千	四四 千	九四 千	一三三 千	一〇二 千	九五 千	一〇七 千	九七 千	六二 千	六九 千	一八七 千	米 作 付 面積
五七・八 %	四七・九 %	三八・三 %	六四・八 %	五九・七 %	五九・三 %	六六・九 %	七四・三 %	六六・三 %	四三・八 %	五二・四 %	一九・五 %	作 付 率
一一一 千	六九 千	三五 千	七八 千	九六 千	一〇四 千	一〇一 千	一一五 千	一〇二 千	六七 千	七三 千	二〇六 千	水 田 總 面積
一〇六 千	六七 千	三四 千	七五 千	九五 千	一〇一 千	九四 千	一〇七 千	九七 千	六二 千	六九 千	一八七 千	水 稻 作 付 面積
九五・六 %	九九・四 %	九八・八 %	九六・四 %	九八・五 %	九七・一 %	九三・一 %	九三・六 %	九五・七 %	九二・一 %	九五・一 %	九〇・四 %	作 付 率
二二五 千石	一五二 千石	九二 千石	一五七 千石	二一八 千石	二〇七 千石	二一九 千石	二二〇 千石	一九八 千石	二六七 千石	二二八 千石	二九三 千石	總 收 量
二二 千石	一三七 千石	八〇 千石	一三六 千石	二七三 千石	二〇四 千石	二二八 千石	二二〇 千石	一九七 千石	二六六 千石	二二八 千石	二九三 千石	高 收 率
九五・九 %	九〇・八 %	八六・四 %	八六・九 %	八一・一 %	九九・四 %	九九・六 %	一〇〇・〇 %	九九・九 %	九九・九 %	一〇〇・〇 %	一〇〇・〇 %	水 稻 收 率

大	兵	奈	和	鳥	鳥	岡	廣	山	德	香	愛	高	福
阪	庫	良	歌	取	根	山	島	口	島	川	媛	知	岡
五七	一二九	四五	三〇	三〇	八二	一二四	一一〇	一〇六	三三	三三	九	六七	一四三
四〇	一〇一	三〇	二九	三三	三三	八五	七三	七四	二八	二八	三三	三九	一〇五
七〇・二	七八・三	六六・七	五八・〇	六六・〇	六六・六	六八・五	六六・四	六九・八	五二・八	七三・一	二八・〇	五八・二	七三・四
四六	一〇七	三三	三二	三四	五六	八九	七七	八一	二八	三九	四三	三四	一一二
四〇	一〇〇	三〇	二九	三三	三三	五三	八四	七三	二八	三八	四四	三九	一〇五
八八・二	九三・六	八九・七	九四・一	九三・五	九四・〇	九三・〇	九三・四	九三・三	九七・五	九三・二	九六・〇	一一二・八	九三・七
九四四	三三三	七三七	六三五	六九九	二〇一九	一八〇七	一三六〇	一三七〇	五四〇	八三二	九二六	六四四	三三九六
九九四	三二二九	七三六	六三五	六九三	二〇一八	一八〇三	一三三九	一三七〇	五三七	八三二	九二〇	六四二	三三九〇
一〇〇・〇	九九・七	九九・九	一〇〇・〇	九九・一	九九・九	九九・八	九九・九	一〇〇・〇	九九・四	一〇〇・〇	九九・〇	九九・七	九九・七

佐	長	惠	天	宮	鹿	沖	全
賀	崎	本	分	崎	尾	尾	國
七二	八九	一五八	九二	九四	一八五	六〇	六〇三
千	千	千	千	千	千	千	千
五五	三三	八四	五八	五三	八一	九	三〇六
七六・四	三七・一	五三・二	六三・〇	五六・四	四三・八	一〇〇・〇	三三〇・八
五五	三四	八〇	五九	四八	六三	七	三二一
千	千	千	千	千	千	千	千
五五	三三	七八	五八	四八	六二	九	三〇六
千	千	千	千	千	千	千	千
九八・四	九六・八	九六・五	九四・五	九八・八	九八・六	一三〇・八	九五・三
一三九三石	六一七	一八四六	一三二六	九六一	一三三五	一二六	六五五九
一三九三石	六一五	一七九二	一二九	八九二	一一四	一二〇	六三九九
九九・九	九九・七	九七・一	九八・一	九二・八	八四・一	九六・四	九七・六

〔註〕 括弧内ノ数字ハ沖繩縣ノ第二期作ノ分ヲ含マザルモノトス



(二) 生産の概要

最近の耕地面積に對する米の作付状況は次の通である。

即ち耕地六〇〇万町步中、水田は三二〇万町步、畑は二八〇町步であるが、水田の九五%、三〇五万町步と、畑の五%、一五万町步計三二〇万町步は米の作付面積である。道府縣別にこれを見ると、昭和十一年乃至十五年平均では作付面積の最大は北海道の一八万町步、これに次いで新潟の一八万町步、茨城の一三万町步、福島、福岡、山形、宮城、秋田、兵庫等の一〇万町步前後等が著しい。

耕地反別は近年殆んど變化がないが、米の作付状況では例へば水田に於いては近畿、中國、四國、北九州以外の主要生産地域では作付率が増加してゐる。作付率は前記の如く平均九五%であるが、地方的には多少の差が認められ、最近五ヶ年平均(前表)で見ると關東では茨城の九八、五%

から御奈川が九四、九%（東京は八九、五%であるが都市化の傾向が強い）位の間にあり、東北では概ね低く、腰高の九七、七%を最高に青森の九五、一%がこれに次ぎ、若手九二、一%が最も低い。

中部地方は關東、東北の中間位、西日本も概ね同様であるが、高知、沖縄等では二期作のある關係から比率は高く、高知は一一三%、沖縄は一三一%である。

米の收穫高は昭和十年乃至十四年の五ヶ年平均では六五一九万石で反當平均約二石、東亞に於ては最高の<sup>反當收量</sup>を挙げている。

この高收の<sup>反當收量</sup>は品種の改良、栽培、技術の發達に依つて齎されたのであるが、極度に開拓された結果と氣象條件との關係によつて屢々東北日本の冷害と、西南日本の旱害或は夏秋の候の風水害等によつて、その生産に甚大の被害

を來たす。今、最近十ヶ年の生産とその平均、並にその間の最低、最高の收量を示せば次の通りである。

昭和六年	五五二一五千石	昭和十一年	六七三三九千石	
七	六〇三九〇	十二	六六三一九	
八	七〇八二九	十三	六五八六九	
九	五一八四〇	十四	六八九六三	
十	五七四五六	十五	六〇八七四	
十ヶ年平均	最高昭和八年	一、一三、三%	最低昭和九年	一、一七、一%
六二五一〇千石	七〇八二九千石	一三、三%	五、一八四〇千石	(一)一七、一%

即ち平均收穫高に對し、最高は一三、三%の増、最低は一七、一%の減で、最高最低の差は一八九八、九万石三〇、四%といふ大きな差になる。これは言ふ迄もなく、日本の稻作りが特別氣候の影響を受け易く、氣象上の限界地域に近接することを物語るものである。同この地方別生産の状

況は作付面積及び気候的條件の<sup>ト</sup>變化と生産との關係を示す年次別反當收量の變化に就いて最も良く知ることが出来るが、今昭和十年から同十四年に至る五ヶ年間の反當收量を示せば次の通りである。

	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	合計	平均
北海道	CR2	TR2	TR1	TR2	CR2	TR2	TR2
青森	CR2	TR2	TR2	TR1	CR2	TR2	TR2
岩手	TR1	TR1	TR1	TR2	TR2	TR2	TR1
宮城	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
秋田	TR1	TR2	TR1	TR2	TR1	TR2	TR2
山形	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
福島	TR2	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
茨城	TR2	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2	TR1
栃木	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2

群	同	TR2	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2
群馬	TR2	TR2	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2
埼玉	TR2	TR2	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2
千葉	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
東京	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
神奈川	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
新潟	反當收量	TR1	TR1	TR2	TR2	TR2	TR2
富山	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
石川	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
福井	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
山梨	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
長野	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
岐阜	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2
静岡	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2	TR2

愛知	同	1101	1106	1100	1109	1101	1108	1108	1109	1109
三重	同	1102	1104	1100	1101	1103	1103	1103	1103	1103
滋賀	同	1102	1103	1102	1103	1102	1102	1102	1102	1102
京都	同	1102	1102	1102	1101	1102	1102	1102	1102	1102
大阪	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
兵庫	同	1103	1103	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
		昭和十年	昭和十一年	昭和十一年	昭和十三年	昭和十四年	合計	平均		
奈良	反當收量	1102	1100	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
和歌山	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
鳥取	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
島根	同	1102	1101	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
岡山	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
廣島	同	1102	1100	1101	1102	1102	1102	1102	1102	1102
山口	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102

徳島	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
香川	同	1102	1102	1101	1102	1102	1102	1102	1102	1102
愛媛	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
高知	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
福岡	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
佐賀	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
長崎	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
		昭和十年	昭和十一年	昭和十一年	昭和十三年	昭和十四年	合計	平均		
熊本	反當收量	1101	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
大分	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
宮崎	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
鹿兒島	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102
沖縄	同	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102	1102

これに依ると冷害を受け易い東北、北海道は昭和十年には

最少の生産を擧げたが、その前年には近年未曾有の冷害を経験した。關東、中部以西ではこの點は著しく有利であるから昭和十年に於いても著しい減産を示さなかつたが、昭和十四年には瀬戸内北九州に於いて近年稀な旱害を受けて減産を示してゐる。

中には例へば滋賀、京都、福岡、熊本、大分等の府縣に於いては水利施設が良好であるから、平年に於いても反當收量は一般に高いが、その上尙且、完全に安定して、生産の上下の限界が比較的近接してゐる。

従つて内地の米作としては、作付反別の増加は全波としては困難であるから、少くともこれを安定せしめるために研究が重ねられねばならない。このためには第一に耕地、水利改良施設、品種、耕種の整備により、反當收量の低い地域を早急に改善し、頻發する氣候上の惡條件に對處する

ことである。

第二には肥料の合理的施用並に、販賣肥料に就いては生産の確保を行はねばならない。特に豊作はそれに續く生産に對して地力の消耗を意味することに鑑みれば特に肥料の確保が必要である。

最後に内地米作農業の地域（府縣）別性格を概括して見る。と次の通りである。

この方法としては第一に昭和十四年現在の水田面積の集團性を求めて、水田度（總面積に對する水田面積の比率）を求め、第二に水田面積の増減を取り、第二に收穫の狀況を研究したもので各々を次の如く五階級に區分し、各下段の結核を與へたものである。

(1) 水田面積

總面積に對し二〇%以上

五結

府縣別	水田面積	面積増減	收穫	合計	
北海道	一	二	一	四	D
青森	二	五	一	八	0
岩手	一	五	三	九	0
宮城	三	五	三	一	B

この区分によつて各府縣の水作<sup>縮</sup>狀況を見たのが次の表である  
 水稲栽培ノ地域性

4 同 五回以上反當二石以下になりたるもの  
 5 同 反當二石以下を示せるもの  
 以上三つ、得點を合計すると滿點は一五點であるが、この合計點を次の五階級に區分する。  
 一三點以上 A 一二點一〇點 B  
 九點一七點 〇 六點下 四點 D  
 四點以下 E

- (ii) 水田増減
- 昭和六年以降十年間に水田の漸増せるもの
  - 一時減少せるも昭和六年よりは増加せるもの
  - 略現状を維持するもの
  - 昭和六年以降水田の漸減せるもの
  - 特に昭和十四、五年に急減せるもの
- (v) 收穫
- 十ヶ年間逐年反當二石（全國平均）以上のもの
  - 逐年反當二石以上なるも二ヶ年は以下になりたるもの
  - 同 三回乃至四回反當二石以下になりたるもの

山 長 岐 靜 愛 三 滋 京 大 兵 祭 和 鳥 島  
野 阜 岡 知 倉 賀 都 阪 庫 良 山 歌 取 根  
梨 野 阜 岡 知 倉 賀 都 阪 庫 良 山 歌 取 根

一 二 二 二 三 五 二 四 三 四 二 二 二 一

二 三 二 三 二 二 三 四 二 二 二 三 五 二

一 三 四 三 三 三 三 三 三 四 三 一

四 〇 九 七 九 八 三 九 二 九 〇 七 九 六

D O O B O B O A O O O O B D

秋 山 福 茨 沔 群 埼 千 東 神 新 富 石 福  
田 形 島 城 木 馬 玉 葉 京 川 湯 山 川 井

二 三 二 四 三 二 一 五 四 二 三 四 二 三 二

三 三 二 三 二 二 一 三 五 二 四 五 三 三

二 四 三 三 二 二 二 二 三 一 一 三 四 二

七 〇 〇 九 六 九 〇 八 五 六 九 九 九 九

O O O O D D O O B D O B B O

岡山	廣山	山口	山	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島
三	二	三	二	五	二	一	五	二	五	二	三	二	二	二
二	二	二	二	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	三
四	三	三	二	四	四	二	四	二	五	二	三	三	一	一
九	七	八	七	一	九	一	五	二	六	八	七	七	五	六
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

沖繩

一

五

一

七

〇

第一の水田度では千葉、大阪、香川、福岡、佐賀が最高で茨城、埼玉、富山、愛知、滋賀の各縣がこれに次ぐ。水田面積の最大である北海道は、水田度に於いては最も悪く、新潟は第三の群に屬する。

第二の水田面積の増減では第一群には、青森、岩手、宮城、福島の東北地方群が優れて、將來の餘裕を明示し、この外では群馬、長野、沖繩である。

この中で、最も不良のものは水田度の大きな千葉で、昭和十四、五年に急減し、且つ昭和六年當時よりも減少してゐる。水田増減と、耕地度は屢々逆の關係にあるので、將來性と云ふ點からは水田度の低い地域が優れてゐる。

第三の反當収獲高では逐年全國平均以上の第一群には滋賀、大阪、奈良、佐賀の各府縣が屬する。



第二群には山形、石川、福井、岐阜、京都、兵庫、鳥取、岡山、香川、愛媛、福岡が屬し西兩日本が比較的上位にあることを示してゐる。北海道、青森、茨城、栃木、山梨、宮崎、鹿児島、沖縄は最も不良の成績である。これらは有害の地域又は畑地域、二毛作地域等、水稻作りに條件の最良ならざる地域である。

以上の三點を總括した區分では最良のA群に屬するものは滋賀縣だけ、第二のB群には宮城、山形、福島、群馬、長野、大坂、奈良、香川、福岡、佐賀が屬する。山梨、北海道は各合計四點で成績は不良である。

要するに出來れば、反當收量の點で良好な地域に於いて、水田度は一層高くなつて欲しいのであるが、實狀はこれと合致して居らない。この點からも内地の米作は土地、水利等の改良への強化と技術的基礎付が先決條件になる。

## (2) 麥類其他畑作物

### (1) 麥類

畑作物には種類が多いので個々の作物をこゝに取擧げることには困難である。個人の作物の配分を取つては自然的立地條件が重要であるが内地農業では食糧需給上米作が主であり、畑作物は従である。従つて其の生産は寧ろ社會的經濟的立地條件に制約される部分が大である。蔬菜類はその種類も特に多いし自然的立地條件に順應して種類を變へれば殆ど全地域に立地し得るので特に記するまでもない。特用作物では桑・茶・果樹類があり、これらは數量も多く内地は元より會つては外國への供給上重要な位置を占めたものである。従つて以下には麥類とそれ以外では桑・茶・果樹等の重要な二、三の作物に就いて記す。麥類では大麥小麥と燕麥裸麥がある。内地府縣に於いては一部の外自然的に冬麥の立地が可能であるから大部分は水田の裏作として栽培される。作付率の大きな府縣では水田總面積の六〇%以上に及ぶことも少

くない。北陸東北地方では水田裏藪作は著しく減少し専ら畑作に  
なるが、關東では台地と扇狀地の畑に作付が多いので水田の利用は多  
くない。

北海道は北に偏して夏は冷涼であり降雨が比較的少ないので春麥とし  
て燕麥、小麥の栽培が多いが冬麥も行はれる。

今北海道に於ける最近の小麥栽培に就いて春蒔、冬蒔の關係を見るに次  
の通りである。

昭和十年 十一年 十二年 十三年 十四年 十五年 平均	春蒔		冬蒔		合計	
	作付面積 町歩	%	作付面積 町歩	%	作付面積 町歩	%
昭和十年	九八一八	三三	一九六九三	六七	二九五二	一〇〇
十一年	一三七七二	三九	二二二一八	六一	三四九九〇	一〇〇
十二年	九八四六	三一	二一四九〇	六九	三一三三六	一〇〇
十三年	九二六六	三〇	二一三八九	七〇	三〇六五五	一〇〇
十四年	一〇二二八	二九	二四七八四	七一	三五〇一二	一〇〇
十五年	一〇五八六	三三	二一七一五	六七	三二三四一	一〇〇
平均	九八一八	三三	一九六九三	六七	二九五二	一〇〇

本州では春蒔地域は東北地方から中部の山岳高冷地域に及んでいるが  
生産は僅かである。

畑作麥類は普通一毛作ではなく、純農村地域では大豆、粟、黍、陸稻、  
蕎麥等と結合した二、三毛作であり都市近郊地域では各種蔬菜類と  
結合した二、三毛作以上の集約經營の中に存在する。冬には他の作物  
が減少するので麥類に重點の移るのは當然である。麥類の内地に於け

る生産概況は次表の通りで、大麥、裸麥の作付反別はそれぞれ減少し、最近十箇年間麥類果年表

年次	作付反別		小麥	大麥	裸麥	高小麥
	大麥	裸麥				
昭和五年	三、八〇	三、八〇	七〇	六〇	六、一五	
六年	三、八〇	三、七五	五〇	六、五二	六、四〇	
七年	三、八〇	三、八〇	五〇	六、五五	六、四九	
八年	三、四七	三、三八	六一	六、九一	八、〇一	
九年	三、三二	三、二四	六四	六、七九	九、四一	
十年	三、四二	三、四〇	六六	六、六一	九、九三	
十一年	三、四一	三、四〇	六八	六、三五	八、九六	
十二年	三、三〇	三、二九	七二	六、八七	九、九六	
十三年	三、五八	三、五五	七二	六、三二	八、九七	
十四年	三、五四	三、一〇	七四	六、七六	一、二一	
十五年	三、四一	三、〇五	八四	七、五一	一、三〇	

小麥は増加してある。收量では大麥は消々増加、裸麥は略現狀に變化なく小麥は十箇年間に約二倍に急増してある。

小麥

熱帯地域は殆どない。寒冷に對しては稻よりも遙かに強いが一般には温暖乾燥の地域に作られる。裸麥は一層寒冷に強く地力の瘠薄にも堪へ得るので歐州では北緯七〇度にも及んでゐる。燕麥も小麥よりは寒冷に強いが栽培期間中の最高温度は二四度(最低月平均は四度)以上が望ましい。水濕に就いては穂孕期、開花期に稍々多濕を好む。

従つて一般には温帯北部の冷涼濕潤の地域に分布する。

ライ麥と同様寒冷に強く歐州では全じく北緯七〇度まで及んでゐる。然し大麥は高温に對しても順應性が大きいので亞熱帯地域に於ても生産が見られる。

内地の冬は麥類栽培上以上の條件に支障をあたへない。今麥類の内地に於ける分布の概要を記せば次の通りである。

小麥は關東地方の冬期温暖乾燥の地域に最も廣く分布し東北地方には  
 小く、濃美平野北部、瀬戸内では播磨、岡山、讃岐の諸平野、九州では  
 筑紫平野から熊本平野にかけて作付が多い。  
 最も作付の多い關東平野では大麥と競作關係に在り、瀬戸内海沿岸地域  
 でも裸麥同様の關係にある。

小麥の生産分布（昭和十五年）

地域	作付段別	收穫高	反當收穫高
北海道	三四四四四歩	二九〇、九四六	〇、八四石
青森岩手 宮城福島	四八一三〇	五六二、〇三二	一、一七
秋田山形	三七六三	二五八一九	〇、六九
關東地方	二三六六六	四三三七〇三〇	一、八三
北陸四縣	八二四六	七四〇三三	〇、九〇
東山三縣	四三、三三五	六一八、八八九	一、四三
東海三縣 三重各々	七、〇五七	一、〇五七、五四九	一、四九

近畿地方  
 三重兵庫和歌山

山陰二縣	三一、五〇一	五一、九四六六	一、六五
山陽四縣	九二、二六	一、四五八八〇	一、五八
四國地方	一〇三、三五五	一、八七九一六六	一、八二
九州地方	三八、三七六	六九、四四七七	一、八一
合計	二一三、一二四	二、八八八、二五七	一、三六
合計	八四一、一六三	一、三〇、九三、五二四	一、五六

大麥は

關東平野に集中し西方では甲府、長野盆地、東海地方、近江盆地、岡山平  
 野等に多く生産され、東北地方では東側の阿武隈、北上川の低地に中  
 心がある。冬の氣温の高、南九州と四國、並に水田が多く且つ冬には根  
 雪があり出穂期に降雨の多い北陸から奥羽の西側では生産は少量であ  
 る。

大麥の生産分布（昭和十五年）

地域	作付段別	收穫高	反當收穫高
北海道	三三二二町歩	二八九三三石	〇、八七
青森岩手 宮城福島	四六四一〇	九九六一八九	二、一五
秋田山形	一、九〇八	一八九四三	〇、九九
関東地方	一四三、〇一五	三、九四九、三四四	二、七六
北陸四縣	九六六一	一一〇、九四五	一、一五
京山三縣	三二、六九七	五八七、九一九	一、八〇
近畿地方 (三縣各々)	三三、四五一	六、四四九、八二	一、八四
近畿地方 (三縣各々)	一六五四〇	三〇〇、〇三九	一、八一
山陽四縣	九、九一二	一、四八七、〇六	一、八一
山陽四縣	二七、七三一	五、一八六、七二	一、八七
四國地方	九一八	一、四一、二三	一、五四
九州地方	一五、二六七	二二、九二七、一	一、五〇
合計	三四〇、六五七	七五、一八〇、六六	二、二一

裸麥は東海、關東 地方に少量の作付のある外本州の東北部には殆ど作付を缺いてゐる。東海道から内地の西南部には多く特に瀬戸内沿岸西九州に作付が多い。

裸麥の生産分布（昭和十五年）

地域	作付段別	收穫高	反當收穫高
北海道	一一、七四五町歩	一一、二七三、五	〇、九六
青森岩手 宮城福島	一、五八八	二七、七九六	一、七五
秋田山形	一九	一〇一	〇、五三
關東地方	六、九四七	一二六、八八〇	一、八三
北陸四縣	一、七一	一、七二七	一、〇一
東山三縣	一、三二四	一、八九九、八	一、四三
東海三縣 (三縣各々)	二、四八八一	三、六四一、八二	一、四六

(近畿地方 三重、兵庫、除く)		
山陰二縣	二六六三六	一、五六
山陽四縣	五五七二	一、四四
四國地方	七八二八一	一、七二
九州地方	八五四一八	一、八一
合計	一六二、三三三	一、三七
合計	四〇四、九三五	一、五五
一四四五〇		
八〇、一〇八		
一、三三五六二七		
一、五四五五一八		
二、二二八、二八八		
六二六六、五一〇		

四 桑、茶、果樹等

平地地に乏しい内地では現在は勿論特に將來の耕地擴充は勢ひ山地丘陵の傾斜地に重點が置かれねばならない。此の除ごの程度の傾斜角度の斜面まで開墾し得るか、問題になるが、これは斜面を構成する土壤の性質、氣候と作物の種類との關係で決まる。然して實際問題として斜面が開かれてゐるか否かは此の上に經濟的、社會的條件の制約があるのである。

傾斜の角度の限界に就いては例へば並に森林立地學の立場からは傾斜二十度以上の斜面は絕對林地とされる。これは開墾の現状がこれ以上の傾斜地に及んでゐることから判断して農作上に絕對不可能を意味するのではない。若し耕地として利用する場合に於ては風雨に暴露して土壤を流出し遂には土地を荒廢に歸せしめる懼れのあることを意味する。即ち若し開拓しやうとすれば、それだけの配慮を持ち、具體的施設をなすことが要請せらるゝのである。絕對林地とは

森林として保持する方が、土地を保護するのに最も便宜であること一  
應解釋して差支へ無いと思ふ。

從來我々の承知してゐる東亞的原始粗放農業の特色は焼畑、切替畑、  
或は朝鮮の火田等に示される如く、山林を焼いて地方を養ひ、無肥  
料農業で、麥類雜穀を栽培するにある。この農法が比較的平坦地で  
行はれて来た間は土地荒療の憂は少く、地方は輪作等により可及的  
に保持され若しそれが減退して來れば或る期間放置して森林化せし  
めて、耕地は他に之を求めたのである。然るに次第に人口が増し、  
平坦地が農民定住のために飽和して來れば勢ひ山地に進入し、相當  
の急斜地も開墾の目標になるのは當然である。即ち現在内地の焼畑、  
切替畑等は何れ谷を最も深く上つた地域に於いて發見される。  
土地の荒廢は元より單に農耕にのみ歸せられない。

森林資源の伐採が植林と平行しない際即ち亂伐が行はれる際にはよ  
り直接的な影響がある。然してそれだからと言つて農耕の面から斜

面を無計畫に開拓して差支へないと言ふ論は成立たない。桑、茶、  
果樹等の樹木農業はこの斜面開拓に一つの基準をあたへるものであ  
る。即ち普通畑として開くよりは樹木畑として開くことの方が遙か  
に土地を保護し得るを解釋するのである。勿論その前提として石垣  
又はコンクリート垣を築き、可及的に斜面土壤の流出を防ぐことが  
考慮せらるべきは言ふ迄もない。

樹木農業は前記の如く山地、丘陵斜面の保護の目的に一應取擧げた  
が、この外海岸の砂丘や、火山麓の砂質土壤、或は風の強い畑地域  
等では防風の見地に於いても重要な意義を有する。  
次に傾斜地利用に就いての他の一つの條件は斜面の方位と日射、日  
照との關係である。常識的には北半球では緯度と傾斜角度との關係  
で、全く日蔭となり普通の農業を行ふには不適當となる場合が屢々  
である。

科學的に各方位の地表下七〇厘米の地温を研究したものでは同じく森

林立地學の立場から歐州アルプスで明にされたものがある。それによらば年中他の方位の斜面より低温であるのは北向斜面である。西向の斜面は地温の年變化が緩慢で且つ非常に温暖である。東向の斜面は温暖であるが、秋から冬を経て春に至る迄は西向斜面よりも低温である。

南向斜面は最も温暖であるが、西向斜面よりは年變化が著しい。即ち、これによる概ね北向斜面以外は耕地の發達に適するが、地温分布の狀況と作物種類の選擇を適正ならしめれば合理的利用が可能である。

然らば樹木農業とは何かと言ふと、我が國では例へば柑橘類、梨、苹果、葡萄等の果樹と茶、桑、或は三極、楮の製紙原料、採實用の栗、クルミ等の従來の森林經營よりは遙かに集約化した農業的經營形態の下に行はれるものを言ふのである。然してこれらの立地は種類別に見て明瞭な如く個々に自然的經濟的社會的立地條件の制約を

受ける。自然的立地條件としてこれらに共通した點は他の普通畑作物に比較しても遙かに水利不十分に對抗し得ることである。以下その主なるものに就いて記したいと思ふ。



我が國の養蠶業の發達は安政六年の開港と共に絹糸輸出の途が開かれ、蠶糸業が急速に勃興したのに因る。

蠶糸業の發達には先づ第一に養蠶業系そのもの、發達を擧げることが出来るが、直接土地利用に於ては桑畑の累年の増加によつて示される。

桑は世界の温帯、亞熱帯の廣大な地域に分布するが我が國と支那とは世界中で最も著しい集中を示す地域である。

桑畑の分布は必然的に山麓急斜面の集約的利用を促してゐる。その急斜面の利用に至るころにこれを見ること出来るが、長野地域では第三期層に廣く存在し傾斜三〇度以上に及ぶことも珍しくない。尙最も顯著に現はれてゐる地域は明科から川中島平に至る犀川の沿岸で、第三期層の若返つた地形に刻まれた深い谷の斜面が利用されてゐる、この地帯では平地の桑畑は村の十%にも達

せず、六〇―七〇%は三〇度に近い急斜面に立地するのである。

桑畑の分布は桑樹と水との關係に於て顯著な關係を有する。水田は言ふに及ばず普通畑の作物は土壌水分との關係に制約されるが桑畑は桑樹本來の性質によつて利用地域の範圍が著しく廣められる。即ち砂礫の堆積する山麓扇状地、火山麓の酸性、砂質土壌の地域、洪積層の臺地、丘陵、砂丘、海岸、河岸の段丘等用水に不便で普通作物の立地上にも困難な地域への立地に特色を示す。然してこれらの地域は全日本に互つて分布するが、就中、中部山岳地域、關東北部、西部山岳地域を始め愛知、福島等に卓越する。氣候條件と、地形條件の類似した地域に於ては屢々土壌の性質の變化が作物立地上に變つた性質をあたへる。千曲川沿岸に於ける洪積層と沖積層とでは前者は後者に較べて酸度が高く収量量は少くなる。善光寺平と、松本平では標高の差違が少いが桑畑の多い松本平の扇状地は礫の發達のために肥料の亡流干魃等の被害が大き

く桑園能率が著しく低下してゐる。

日本農業に於いては火山麓の利用が従来から問題になり又それは將來へも残されてゐるが、土地の物理的、化學的性質から桑畑として利用される部分が少い。即ち關東北部では赤城、榛名の山麓に瘠がり、淺間八ヶ嶽富士等の山麓にも決して少くない。

気温と桑との關係に就いては温帯北部まで生育するのであるが養蠶との關係に於いては少くとも約一ヶ月は採葉し得ることが必要である。即ちこの關係から温暖地域では桑の生育が良く養蠶期が長くなるので春蠶夏秋蠶を行ふことが出来るが、氣候的限界の地域では發芽期がおくれ秋冷期が早くなるので、養蠶は盛夏にかけ一回に止まる。この現象は桑畑町歩當りの掃立數量、收購量に見ることが出来る。何れも關東以西に於いて勝れ、北陸、東北は劣る。賦中、掃立數量では徳島、山梨、愛知、群馬、長崎、埼玉、愛媛等收購量では大分、徳島、和歌山、愛媛、山梨、愛知等は代

表的な地域である。

北陸、東北に少いのは気温の外に冬の積雪被害の大きいことにもよる。即ち積雪が多い場合は屢々胴枯病に侵され收購量の減少が著しい。高さの限界では長野縣下の桑畑の立地に就いての報告がある。それによると縣下では千曲川下流新潟縣境の八ヶ嶽、赤石の山麓で一四〇〇米までに及んでゐる。然し一〇〇〇米以上は氣候上の著しい制限を受けるので縣下全桑畑の僅かに三%にすぎない。

一〇〇〇米及至五〇〇米の間には七%を包含してゐる。其他は五〇〇米以下である。この一〇〇〇米乃至五〇〇米地域への桑畑の集中は長野地域が全般的に標高の著しいことにも因るが食糧生産地域に乏しく五〇〇米以下は専らその生産に向けられてゐることを示すのである。

内地に於ける桑畑の分布では北は北海道から南は九州沖繩までに



高知	愛媛	香川	徳島	山口	廣島	岡山	高根	島取	和歌山	奈良	兵庫	大阪	京都
六〇	三六	三五	四一	六七	五三	四二	四三	三〇	六二	三九	三〇	四六	三〇
五九	三六	三五	四〇	六〇	五二	四一	四二	二七	五七	四三	三七	四一	二八
五七	三五	四〇	三八	六一	五一	三〇	四一	二八	五五	四六	三五	四三	二九
二六九	三一七	二五五	三三七	一八三	二六三	二二八	二〇四	二五二	四八三	三〇九	一九〇	二二六	二二三
一三二	一六七	一一九	一五二	九二	一三〇	一〇九	一一五	一〇六	一四三	一三〇	一一三	一三六	一一六
一三七	一六八	一四六	二二五	九一	一三二	一一八	一一九	一四三	一四三	一七八	七六	一三〇	一一六
四三	八三	四八	九〇	二七	四七	七〇	五三	八一	四六	七八	四八	五五	七三
二二	四三	二二	三七	一五	二五	二六	二七	三八	二四	三七	三〇	三〇	四〇
二三	四三	二八	五五	一五	四三	四八	三三	五二	二四	五一	五〇	三一	四〇
一七五	一八六	一六七	二二二	一六八	一六八	一五七	一六二	一六七	一九七	一八五	一四八	一八四	一八〇
九四	九二	八六	一〇六	六八	九一	八六	八三	八二	一〇八	八六	九九	一〇四	一〇二
八一	九四	八一	一〇六	三九	七六	七〇	七六	八五	八九	一〇一	四九	八〇	七八
二八	四八	三〇	五〇	一八	三〇	三六	三三	五四	三二	四七	三九	三九	五八
一五	二五	一六	二六	一一	一七	二一	二一	三〇	一八	二四	二六	二五	三三
一三	二五	一五	二六	七	一五	一七	一八	三〇	一五	二九	一三	一九	二七

滋賀	三重	愛知	靜岡	岐阜	長野	山梨	關井	石川	富山	新潟	神奈川	東京	千葉
四〇	三二	二九	三三	三三	二二	二六	四二	四三	三三	四〇	二四	二二	二〇
二八	三二	二八	三三	三三	一一	二四	三三	三六	四七	三三	二二	一九	二二
三五	三一	二七	三〇	三三	一一	二四	三三	三六	四七	三三	二二	一九	二二
一八八	二七〇	三三六	二六二	二九九	二七三	三七二	一六二	七九	一七一	一七四	二六一	二八一	二七六
八八	一一五	一三二	一一一	一四〇	一〇五	一七七	八四	九二	九六	九四	一三三	一四四	一三五
九九	一四五	二〇三	一五一	一五六	一六六	一九四	七七	一〇二	七五	七九	一三六	一三八	一五〇
四六	八四	一一三	七三	八〇	一三四	一四二	三九	一八	三三	四三	一〇八	一一八	一一二
三一	四〇	四六	三八	四二	五八	七一	二四	二五	二〇	二四	三三	六一	五三
三五	四六	七四	三九	四三	九二	七八	二二	二八	一五	二一	三九	八〇	六四
一七五	一七五	一八三	一五〇	一六九	一三三	一八六	一〇三	一一七	八八	九三	一三八	一四七	一四三
六〇	九三	八九	八二	九一	五八	九九	五九	六二	三三	三三	七七	七四	七三
五五	八二	九四	六七	七七	七四	八七	四四	五三	三三	三九	六〇	七二	七〇
二八	五三	六二	四二	四三	六〇	七一	二四	二六	一六	二二	五七	六六	五八
二一	二九	三一	二四	二六	三三	四〇	一六	一七	一一	一四	三三	三七	三三
一九	二六	三三	二〇	二二	四一	五五	一一	一五	八	一〇	二六	三六	三〇

縣	沖繩	鹿兒島	宮崎	大分	熊本	長崎	佐賀	福岡
總計	三〇・二	二七・三	二四・五	二四・七	二四・六	二四・三	二四・二	二四・一
	二・九	七・六	四・四	四・五	三・四	六・一	七・八	四・一
	三・〇	七・六	四・三	四・六	三・五	五・八	七・四	四・二
	四三・一	二二・一	二二・五	二二・一	二二・八	三三・五	二七・六	二六・六
	七六・二	一〇七	九八	一一六	九七	一五〇	一三〇	一一九
	一四二	一一二	一一七	一三四	一四〇	一八五	一四三	一五六
	一三三	二五	四九	五二	六三	三三	三三	六三
	四〇	一四	二二	二五	二七	二四	一六	二八
	四七	一四	二八	二九	四〇	三〇	一八	三七
	一四七	一四二	一五六	二三九	一五五	一九〇	一九一	一六八
	七七	四三	七五	八七	七三	九一	一〇二	八二
	七〇	六八	八〇	七九	八一	九九	八八	八六
	四五	一〇	三四	三四	四二	三〇	三三	三八
	二五	六	一六	一九	二一	一五	一三	一九
	二三	六	一八	一七	二三	一六	一一	二〇

自然的條件の制約を受け、<sup>て</sup>の經營上の問題は如何にして有利な作物を得るかにあるが、この點に就いては例へばこの長野縣は最も良くその關係を示してゐる。

長野縣の土地利用の特色は桑畑が最も廣く、果樹園は殆んど無く、普通畑作面積水田面積は僅少を占める。

この事實は長野の土地氣候上の制約から來る單一栽培への偏奇を示すものである。春蠶と夏秋蠶との關係に於いても西側日本より劣ることが明かである。

桑畑ノ分布 (單位百町村、昭和十四年)

地方	面積	%	地方	面積	%
北海道	一	〇・〇	内長野	六四八	一一・一
吳羽地方	八六二	一六・二	山梨	二二三	四・二
内山形	二三一	四・三	東海三縣	五三〇	九・九
福島	三四三	六・四	内夢知	二四八	四・六
關東地方	一、三四三	二五・二	近畿地方	二五〇	四・七
内茨城	二三四	四・四	中國地方	二九六	五・五
群馬	四〇〇	七・五	四國地方	二六六	五・〇
埼玉	三二六	六・一	九州地方	五〇四	九・四

北陸四縣	二二五	四二	合 計	五三三四	1000
東山三縣	一〇五六	一九八			

茶

茶はアジヤの季節風帯の特産物で、その原産地もこの地方とせられる。高温多雨の土地には良く生育するが、排水の良好な山地丘陵の斜面は特に優れた生産地域になる。氣候は溫度が年平均三五度乃至一二、三度の間にあり、雨量は二五〇〇耗乃至三〇〇〇耗で年中均等に降る地域を最適とする。内地でこの最良の立地条件になつた地域は西南部に限定される。降雨では三〇〇〇耗以上の地域を西南日本の太平洋岸に求めることが出来るが、氣温は關東、東海、北陸等の山麓線に沿つて一二度等温線が連り中部の山岳地域と奥羽は不適地である。特に冬の降雪と凍結、春の發芽期に於ける降霜は被害が多いので、生産地域外である。内地の主な生産地域は古く織豊時代から開墾され今尙盛なのは山城の宇治、近江の信樂、伊勢の薦野、駿河の安倍、武藏の川越の五地域である。東海では山麓、丘陵の斜面、牧ノ原臺地、三方ヶ原の扇狀地等排水

關東地方	四一	一〇・一
内茨城	一一	二・七
埼玉	一四	三・五
北陸四縣	一〇	二・五
東山三縣	八	二・〇
東海三縣	一八二	四五・〇
内静岡	一六四	四〇・六
三重	一五	三・七
近畿地方	四〇	九・九
内京都	一五	三・七
中國地方	一三	三・二
四國地方	一七	四・二
九州地方	九一	二二・五
内福岡	一二	三・〇

さ、日照に恵まれた地域である。伊勢では鈴鹿山脈の山麓に、山城、近江、奈良の盆地では平垣地に栽培されるが、古い傳統の支配するところである。紀伊の南海岸、南四國、南九州等もそれぞれ生産上重要な地域である。静岡は全國中でも生産の多い地域である。この地方の茶の發達は起源は詳で無いが、製法を宇治に則り徳川時代には安部、志太、榛原の各郡に最も盛であつた。其後、横濱開港と共に輸出市場が開かれて、自然的に恵まれた東海地域は経済的にも最も有利に發達の途が開かれた。丁度當時士族に授産の目的で明治二年に牧野原、翌年に三方ヶ原が茶園として開拓されたのである。

茶畑の分布 (單位百町歩)

地方	面積	%
北海道	一	一
奥羽地方	一	〇・二

熊本	一五	三・七
宮崎	一三	三・二
鹿兒島	三一	七・七
合計	四〇四	一〇〇・〇

其後擴充がすぎて價格の暴落があり、紅茶に乗り出して一時好潮に乗り、粗悪不良の品を作つて失敗したりしたが、組合組織が出来又試験場を通しての茶業の指導が行はれるに至り、漸く良品を出すに至つた。その間手工業的製茶から機械製茶に變り、栽培法も次第に變つた。現在では牧野原、大井川上流の川根を中心とする地域、三方ヶ原、志太郡の桂島、静岡市附近の安倍新山園、富士山麓の大宮附近小笠郡、榛原郡等に生産が多い。これらの地域では丘陵、山麓斜面への進出が著しく、南面した日照の良好な斜面に畦間無排水溝にしたり畦を等高線に沿つて作つたり、變化のある栽培量を見ることが出来る。

柑橋類

内地の柑橋類には蜜柑、夏蜜柑を主とし、外にネーブル、オレンジ、レモン、文旦等がある。柑橋類の立地は主に氣温と、日照、風によつて示される氣候條件によつて分布の大きな限界が、部分的には其の生産地域の地形、並に經濟的條件の制約を受ける。柑橋類は亞熱帶、乾燥地の原産で高温と乾燥の地域に良く生育して良品を生産するが、涼源地域では果皮が厚く、甘味と香氣に乏しい傾向がある。内地の蜜柑は温州と紀州の兩種であるが温州は大きく果皮も厚く、無核で商品的價値が大きい。紀州は甘味であるが核があり形が小さいので商品としては温州に劣る。内地に於ける柑橋類の分布の限界は關東北部から東海地方の山麓線を連ねて北陸の西半、能登半島以西にある。關東南部から西兩日本の太平洋岸地域は黒潮の影響に惹かれ、瀬戸内は周りを山地に包まれた温暖寡雨の氣候



を有し、北陸以西 日本海岸は対馬海流の影響の著しい地域である。この北限は年平均気温、約十二・五度線に一致するが、一月等温線では略二度を示す地域である。

然しこの限界地域の生産は必ずしも良好でなく、果皮は厚く酸味が強いのであつて、良品は稀に、瀬戸内海沿岸も太平洋岸の地域に生産され、東部よりは西部に甘味の優れた、果皮の薄い良品が得られる。然し、果皮が厚く、酸味の強いものは輸送に堪へらるるで輸出物としては伊豆方面の生産品が良好である。この東西の關係は温暖な西南地域では標高の差によつて示され、例へば紀伊の有田川流域と紀ノ川流域との關係、或は伊豫の低地と山地の生産との間にも見られる。

蜜柑の分布

(單位千本)

地方	樹數	%
北海道	○	○・○
奥羽地方	○	○・○
關京地方	一、四九三	五・二
内陸奈良川	一、二〇九	四・二
北陸西縣	二九	〇・一
東山三縣	一四一	〇・五
東海三縣	六、二五五	二一・九
内陸静岡	四、九八四	一七・五
近畿地方	七、九三〇	二七・八
内陸歌山	五、五一二	一九・三
内陸大阪	一、九五二	六・八
中國地方	二、五九一	九・一

地方 家 %

内 壹岐	一、五六〇	五・五
内 四國地方	四、〇一〇	一四・一
内 愛媛	二、三八三	八・四
九州地方	六、〇五八	二一・三
合 計	二八、五〇六	一〇〇・〇

柑橘類は風風のあたらない南面した温暖な海洋に面する山麓丘陵の  
 斜面に栽培されるが丹念に石垣で築いた段畑の景観は特に我々の  
 興味を引くものである。

葡萄

内地の葡萄は在來種と、山菜種に分けられ、在來種の中には歐洲  
 葡萄と、米國葡萄がある。米國葡萄と、在來種は最も廣く栽培さ  
 れ山菜、大阪が主であるが、分布の範圍は福島以南、關東から九  
 州までに及んでゐる。

日照時數の多いこと、開花成熟期に降雨の少いこと、排水の良好  
 であることが栽培上有利であるから、雨の多い内地では氣温と降  
 雨の季節的配分並に地形とが立地上の自然的條件になる。  
 例へば西日本の中心である大阪府下では東部生駒山地西側の傾斜  
 面に葡萄畑が發達し、甲府盆地では生育時期に乾燥したフェン風  
 が葡萄作りに有利に働いてゐる。  
 甲府では長い研究と經驗を積み現在では北東部と勝沼を中心にし  
 た盆地東部の山麓斜面と扇狀地に集中してゐる。  
 歐洲葡萄は氣温高く、日照の良好な奥羽、西側の盆地に多い。米  
 澤盆地の北部を南端に山形から秋田、津輕の方面まで栽培される  
 が、南部では四ヶ月、北部では五ヶ月程で成熟する。葡萄生産の  
 狀況は次の通りである。

葡萄の分布

(單位千本)

地方	樹數	%
北海道	四四七	七・九
奥羽地方	九八五	一七・四
關東地方	三一九	五・六
北陸四縣	二六七	四・七
東山三縣	七一六	一三・七
内山梨	三九三	七・〇
東海三縣	一四八	二・六
近畿地方	九八四	一七・四
内大阪	六八二	一二・一
中國地方	一一〇	一九・六
内岡山	六〇七	一〇・七
廣島	四二八	七・六
合計	五、六五一	一〇〇・〇

四國地方	一八八	三・三
九州地方	四八七	八・六
合計	五、六五一	一〇〇・〇

苹果は夏期に冷涼、降雨の少い氣候の地域に良い結果を遂げる。青森北海道の高緯度地方では、<sup>低</sup>地から丘陵、段丘、山麓斜面に分布するが、青森以南の奥羽の各適地に又長野盆地等にも多い。北海道の苹果は、半島鄂北端の小嶺、余市附近が主である。明治五年に米國から苗木を輸入して後に發達したもので秋の收穫時期が乾燥期に相當しないが、夏期の低温は有利である。津輕の苹果は同じく明治初年に米國から移植したもので平野周縁の洪積層丘陵に、又岩木川の段丘海岸の砂丘上にも分布する。中部では善光寺平に明治二〇年頃から栽培が始まり、山麓斜面に立地するが、近年は八ヶ岳山麓約一〇〇〇米の高原にも栽培を見つゝある。苹果の生産の傾向は柑橘と殆んど變りが無い。

地方	樹数	%
北海道	六七二	一四・八
奥羽地方	三、三三六	七三・三
内青森	二、九四三	六四・六
關東地方	五	〇・一
北陸四縣	三八	〇・八
東山三縣	三四四	七・六
内長野	三三二	七・三
東海三縣	六	〇・一
近畿地方	一五	〇・三
中國地方	一八	〇・四
四國地方	一一五	二・五
九州地方	五	〇・一
合計	四、五五三	一〇〇・〇

(三) 朝鮮

1 自然的立地條件

1 地形

内地、大陸間の陸橋的性格を持つ朝鮮半島は北から南に突出し、脊稜山脈は東に偏在して、支脈を西南方向に分岐し其間大小の河川を西流せしめ、黄海沿岸には丘陵と其間を埋積した廣大な沖積低地を形成してゐる。

山麓の地形は概ね緩斜面を持ち、開墾を可能ならしめるが、朝鮮特有の火田民の耕作は山地、高原に深く侵入して耕地度を高からしめてゐる。勿論耕地の大部分は前記西側の沖積地に集中するが南部は絡東江流域の大邱、盆地、榮山江流域から縮江流域の全南、全北の低地、中鮮では漢江、臨津江、西鮮では大同江、清川江流域に集中する。東側では山地が日本海岸に迫り、ために耕地の開墾を著しく阻害してゐるが、元山、咸興の低地

は主要部分をなし、その他沿海の小地域に分散してゐる。鴨綠江上流に當る長津江、赴戰江、盧川江の流域には約八〇〇米乃至一〇〇〇米の蓋馬高原が發達するが、火田民による開墾が少くない。尙朝鮮の土地に開墾した開墾の一つの特色は西海岸干潟地域に鹽田と並んで發達する干拓農地の存在である。

大陸的氣候で寒暑共に酷烈、雨量少く、且つ季節的に偏在する爲に乾燥が著しい。年平均氣温は南緯で一三。〇中緯で一〇。〇北緯では四乃至八。〇である。夏冬氣温較差は著しいが、晝夜に於ても著しく時には二五。〇に及ぶ。

地名	區分	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
釜山	氣温	一七	三〇	七〇	一二三	一六四	二〇〇	二二九	二五七	二七	一六三	一〇三	三	一三五
釜山	降水	四三	三八	六九	一四〇	一三八	二〇三	二八四	一七五	一七五	七四	四三	三一	一四一三
木浦	氣温	〇八	一六	五五	一一三	一六四	二〇六	二四七	二六	二七	一六〇	九六	三六	一三
木浦	降水	三七	三八	四三	九四	九三	一三九	二〇五	一六九	一一八	一五六	四三	三九	一〇七二
仁川	氣温	(一〇)	(一〇)	二六	九六	一四九	一九六	二三五	二四九	二〇三	一四	六	(二)	一〇七
仁川	降水	二〇	一〇	三三	六九	八一	九九	二七七	二二九	二〇七	四一	四〇	二七	一〇三一
江陵	氣温	(一四)	〇〇	四三	一一三	一六三	二〇三	二四四	二四九	一九七	一四四	八	一八	一三〇
江陵	降水	五五	六七	六四	八一	七六	一〇〇	二三五	二二九	一七七	七四	六六	六〇	一三三
元山	氣温	(一九)	(一四)	二四	九三	一四九	一九	二二七	二三五	一八六	一三	五	(一)	一〇三
元山	降水	三三	三七	五〇	七	八九	一二四	二七〇	三三	一七二	七六	六九	二九	一三三

雨量は年八〇〇耗乃至一、〇〇〇耗、南東岸で最も多く北西方向に漸減して釜山、元山地方は一、四〇〇耗、京城仁川地方は一、〇〇〇耗平壤、龍

岩浦地方は九〇〇耗で、北部内陸、豆滿江上流地方は五〇〇耗以下である。

降雨は季節的に著しい偏在を示し、六一八月は雨季で十月―五月は乾季である。

降雪は寡少、降霜の初は

北部は 九月下旬 他は十月上旬乃至十一月下旬

全終りは

北部は 五月上中旬 他は三月下旬

降雪の初は

北部は 十月下旬 南部は十一月

全終りは

北部は 四月下旬 南部は三月上旬

でこれら氣候條件の朝鮮農業に及ぼす影響は決して少くない。

## 2 經濟的社會的條件

産米を中心にした農業政策の採られたことは内地と同様である。施政當時に於いては半島農村は人心が著しく荒怠、萎縮し、耕地の荒廢が甚しかつたので稲作も極めて粗放に經營され衰えたのである。然して土地的、自然的條件の米作に好適するためには先づ米作の擴充、改良に着手されたのは當然で、延いては農家食糧米の充實に、又近年に於いては内地の需給上に益するところ非常に大なるものがあつたのである。

このためには先づ基本的條件の整備が急速に實施せらるべきで、土地改良、品種改良、販賣並に自給肥料の増産増進、技術の改善等が着々行はれ來つたが、例へば水利施設に於いては從來共未發達の状態に置かれたが、現在尙低位にあり、水田の過半は水利不安全の状況にある。畑作に就いてはそれが由來半島大衆の主要食糧としての重要度高く殆んど全農家に栽培されるが、この方面の

技術的方面の發達は未だ不充分であり、今後は食糧政策上、社會政策的見地に於いても緊急の對策が要望される。總戸數に對する農家戸數の割合は近來著しく低下しつつあるが、尙三〇〇万戸以上、七〇%以上を占めて居る。

年次	總戸數	農家戸數	總戸數に對する農家戸數割合
明治四十三年	二、八〇四、一〇三	二、三二六、三三〇	八三・三
昭和十一年	四、一四二、九七六	三、〇六六、四八九	七四・〇
十二年	四、一七八、九二九	三、〇五九、五〇三	七三・二
十三年	四、二二七、一一七	三、〇五八、七五五	七二・四
十四年	四、二七一、三〇八	三、〇五二、三九二	七一・五
十五年	四、二九六、五二四	三、〇二二、一三三	七〇・四

專業、兼業別に於いては專業農家の割合が増加し、兼業農家が減少しつつあるが、自、小作、純火田民、被備關係に於いては自作及び自小作の割合は減じ、小作者と被備者の割合は著しく増加しつ

年次	專業農家	兼業農家	合計	農家總戸數に對する割合
昭和十年	二、九〇九、六四九	一、五六八、四〇〇	三、〇六六、四八九	九・四九
十一年	二、九〇四、四六七	一、五五〇、三六六	三、〇五九、五〇三	九・四九
十二年	二、九一二、一七五	一、四六五、七九	三、〇五八、七五五	九・五二
十三年	二、九〇九、八九七	一、四六四、九五	三、〇五二、三九二	九・五二
十四年	二、八八〇、九九五	一、四一、一三八	三、〇二二、一三三	九・五三

年次	自作	小作	純火田民	被備者	計
大正三年	一、四六七、五五	一、〇六六、七〇	—	—	二、五三四、二五
八年	一、六二七、四	一、〇四三、八三〇	—	—	二、六七一、二三
十三年	一、八六六、三	九、〇三三、四〇八	—	—	二、七九九、七〇
昭和四年	一、一三二、六	八、八五五、九四	—	—	二、八八八、五四

年次	地主	自作	小作	純火 田民	被傭者	計
九	1	1	1	1	1	1
十	1	1	1	1	1	1
十一	1	1	1	1	1	1
十二	1	1	1	1	1	1
十三	1	1	1	1	1	1
十四	1	1	1	1	1	1
十五	1	1	1	1	1	1

千分比例

年次	地主	自作	小作	純火 田民	被傭者	計
大正三年	18230	411	351	1	1	4000
八	34197	393	376	1	1	
九	38195	345	422	1	1	
十	37180	315	456	1	1	
十一	1180	240	519	27	34	
十二	1179	241	519	25	36	

昭和七	八	九	十
1175	1180	1181	1179
241	251	239	237
518	517	519	524
24	24	22	23
38	38	38	37

朝鮮に於ては又半島人以外に内地人、満人、支那人による農業經營を見る。内地人の農業は主として南鮮に於いて米作經營に見られ、又各地の果樹園經營にも當つてゐる。満人、支那人は少數ではあるが、都市近郊の蔬菜農業に特殊の立地を占めてゐる。今道別に自作小作別民族別、農家戸数の分布を示せば次の通りである。



	自 作	自作器小作	小	合 計		
				号	兼 亦	計
1. 寧 畿 道	18.7	52.6	1	236.3	10.3	246.6
2. 忠清北道	16.7	30.1		110.3	5.5	136.0
3. 忠清南道	18.5	52.5	1	219.3	15.2	224.5
4. 全羅北道	10.8	40.6	1	220.7	14.6	235.4
5. 全羅南道	76.0	97.3	2	389.0	15.5	404.5
6. 慶尚北道	70.0	106.7	1	342.3	6.5	349.0
7. 慶尚南道	43.4	86.8	1	268.8	23.0	292.0
8. 黃海道	37.5	56.0	1	235.5	11.3	246.8
9. 平安南道	43.4	38.9		173.8	4.0	177.8
10. 平安北道	51.4	30.4	1	200.5	8.1	209.0
11. 江原道	51.8	60.2	1	235.7	16.5	242.1
12. 咸鏡南道	60.7	48.0		175.6	7.8	183.4
13. 咸鏡北道	40.7	19.1		73.0	3.9	76.9
計	540.0	719.2	13	2886.0	142.1	3023.1

P18201

朝鮮總督府昭和十四年農業統計

# 農 家 戶 數 表

(單位千戶)

	自 作	自作兼小作	小 作	無火田限	被傭者	合 計	專 業 兼 業 別 農 家 戶 數										
							內 地 人		朝鮮 人		滿 洲 人		蒙 古 人		合 計		
							專 業	兼 業	專 業	兼 業	專 業	兼 業	專 業	兼 業	專 業	兼 業	
1. 京畿道	18.7	52.6	169.6	0.2	5.4	246.6	1.0	0.1	226.0	10.3	0.1	0.0			226.3	10.4	246.6
2. 忠清北道	16.7	50.1	82.3	1.0	5.6	135.8	0.1	0.0	150.2	6.0	0.0	0.0			150.3	5.5	136.0
3. 忠清南道	18.5	52.5	144.0	0.1	9.4	224.5	0.4	0.1	208.9	15.1	0.0	0.0			212.3	15.2	224.5
4. 全羅北道	10.8	40.6	160.4	1.0	22.6	235.4	1.1	0.2	219.7	14.3	0.0	0.0			220.7	14.6	235.4
5. 全羅南道	76.0	97.3	204.1	0.0	27.1	404.5	1.1	0.1	387.8	15.4	0.0				389.0	15.5	404.5
6. 慶尚北道	70.0	106.7	157.4	2.2	10.4	348.8	0.6	0.0	341.7	6.5	0.0				342.3	6.5	349.0
7. 慶尚南道	43.4	86.8	149.7		12.1	292.0	1.0	0.2	267.8	22.9					268.8	23.0	292.0
8. 黃海道	37.5	56.0	145.9	2.1	5.2	246.8	0.4	0.1	235.0	11.1	0.2	0.0	0.0		235.5	11.3	246.8
9. 平安南道	43.4	38.9	90.0	4.8	0.7	177.8	0.2	0.0	173.4	4.0	0.3	0.0			173.8	4.0	177.8
10. 平安北道	51.4	30.4	111.8	14.2	1.0	209.0	0.0	0.0	199.5	8.1	1.1	0.0			200.5	8.1	209.0
11. 江原道	57.8	60.2	101.2	21.2	7.3	242.1	0.2	0.0	225.5	16.4	0.0	0.0			225.7	16.5	242.1
12. 咸鏡南道	60.7	48.0	50.9	19.3	4.4	183.4	0.1	0.0	175.1	7.0	0.4				175.6	7.8	183.4
13. 咸鏡北道	40.7	17.1	14.1	3.0	0.4	70.9	0.1	0.0	72.5	4.0	0.5	0.0			72.0	3.9	76.9
計	540.0	719.2	1583.4	69.3	111.6	3023.1	5.9	1.0	2872.5	141.1	2.6	0.1	0.0		2881.0	142.1	3023.1

● 朝鮮總督府昭和十四年農業統計表=依ル

P.18201

裏面白紙

民族的に見た半島農業は、各民族の有する素質に重大な關係がある。然して人口問題研究所の「國土計畫として人口配置計畫案要綱」(昭和十五年十月)の示す所によると、朝鮮は内地に最も接近し、滿洲國と境を接する重要地域なる點、並に朝鮮人の素質劣悪なるにも拘らず増殖力の極めて旺盛なる點を考慮し、近き將來に於いて朝鮮總人口の少くとも一割以上を内地人口を以つて占むるの要あり」として最低内地人口を二二〇万人としてゐる。即ちこの見解をそのまま承認することすれば朝鮮農業の質的向上は半島人自體に期待することは困難である。然して一方内地の食糧需給上に於いて朝鮮の占むる位置は極めて重要であるから、現在は兎も角として將來の對策としては半島人農業の向上を指導すること共に保有を必要とせらるゝ内地人を農村に誘致して健全農村の建設を圖らねばならない。

現在に至る内地人農業移民に就いて述べれば次の通りである。

併合以前に於いては、日本依存が濃化すると共に農業經營の有利なるに着目して渡來するものが次第に多かつたが、併合後明治四十三年末には二一三二戸に及んでゐる。其後は東洋拓植の移民誘致（明治四十四年から昭和三年迄）、大正十三年以降、昭和九年迄の移住奨励金交付等により遂年内地人農業者の數を増加し、昭和十二年末に七六三七戸に達した。その分布は特に南洋に多いがこれは氣候、土地等の條件が米作に適したからに外ならない。初期の移民は一戸當耕地二丁歩以内、土地代金に年六分の利子、四ヶ年据置、二十五ヶ年々賦償還後土地所有とする第一種移民であり、（大正十年迄）次いで第二種として割當十丁歩以内、土地代金の四分の一以上拂込、殘金年七分利息、二十五ヶ年以内償還、土地を所有し自作並に一部小作に付したが、この兩者共に僻農生活と利害の相對立する非難があり、第二種も昭和二年に募集を中止してゐる。

この他、主なるものとしては西岸干拓地開拓のため不二農村産業組合（不二興業の業務繼承）が移民三二五戸の收容計畫を持ち、昭和九年三月に完了、江原道では高原地帯五〇〇町歩に移民一〇〇戸の招致を計畫し、昭和八年四月に完了してゐる。○ 僻内移住奨励として干拓地並に、南洋の耕地狭少なる地域より西北僻の余裕のある地域への移住奨励策を取擧げ、又滿洲開拓民としては昭和九年以降計畫的に行はれ、昭和十一年以後は十五ヶ年第一期計畫として約十五万戸、七十五万人の移住計畫がある。○ 僻内農業は内地、食糧需給上に占むる位置が重要であるが、内地向供給の大宗をなす米に就いては僻内に於いても従來の低位にあつた消費が次の如く急激に増加しつゝあり、このための内地への供給に就いては將來大なる期待を持つことは危険であるものと云はれるのである。

年次

人口

消費額

一人當

指數

昭和元年	五	十	十五	二十	二十五	三十	三十五	四十
一、〇、〇、四、五、八	一、九、六、四、〇	二、一、三、八、一	二、一、九、四、三	二、二、一、五、〇	二、二、四、〇、八	二、二、七、三、七	一、七、六、四、六	〇、五、三、〇、〇
一〇、一、四、二、千石	八、八、五、四	八、一、三、四	八、五、〇、八	一、二、五、七、九	一、五、七、八、四	一、七、六、四、六	〇、七、八	一〇〇
〇、五、三、〇、〇	〇、四、五、〇	〇、三、八、〇	〇、三、九、〇	〇、五、七、〇	〇、七、〇、〇	〇、七、八、〇		

麥類、雜穀の消費は次の通りである。

朝鮮ニ於ケル主要穀類ノ消費額

年次	人口	消費額								
		小麥(小麥粉)	大麥、裸麥、燕麥	粟	稗					
昭和元年	一、九、〇、四、五、八	二、四、三、五	八、二、九、三	六、六、二	六、九、二、四	七、八、七	七、七、〇	五、四、一、一	五、五、五	六、四、二
五	一、九、六、四、〇	二、〇、六、六	七、七、〇、〇	八、〇、六	六、九、六、二	六、七、三	七、三、一	六、三、四	一、六、八	六、四、六
十	二、一、三、八、一	二、六、九、〇	九、七、〇、〇	四、五、五	四、八、六、三	四、〇、八	五、〇、〇	六、五、七	一、三、四	五、四、九
十一	二、一、九、四、三	二、一、一、一	一、〇、九、六、〇	四、〇、二	六、一、八、七	五、一、〇	五、六、八	九、一、八	一、六、〇	七、三、五
十二	二、二、一、五、〇	二、三、一、二	八、九、三、九	五、〇、三	五、九、一、五	五、二、二	五、七、〇	九、二、三	一、三、九	六、二、六
十三	二、二、四、〇、八	二、一、八、〇	一、三、三、七、三	五、五、三	六、五、一、一	五、二、四	六、〇、一	八、五、九	一、三、七	七、〇、三
十四	二、二、七、三、七	二、八、七、八	六、六、五、一	五、〇、二	六、一、〇、九	四、〇、一	五、五、六	八、七、四	一、六、八	七、〇、五

(單位千石)

即ち小麥(小麥粉を含む)に就いては昭和十一、十二、十三年には昭和元年、五年に比較して消費減を現はしたが、十四年には著しい増加を示した。大麥、裸麥に就いては著しい増加が現はれ

燕麥、粟、稗、蜀黍は減少、玉蜀黍、蕎麥は増加してゐる。要するに鮮内農産食糧の消費は内地と異らず經濟、文化の發達に伴行して食味の佳良なるものに急激に移行しつつあるものであつて、この大勢は動かし難いものである。

農業の概要

イ 耕地の開發狀況並に耕地度

全朝鮮の耕地狀況は次の通りである。

項目	千町歩	對總面積比%	備考
總面積	二二、二六三	一〇〇	昭和十四年
耕地面積	四九五九	二二・三	
畚	一、七六三	七・九	
田	三、一九六	一四・三	
林野面積	一五、八八一	七一・三	
雜地	一、四二三	六・四	

總面積に對する耕地面積の割合は内地に比較して良好である（内

地（昭和十四年）耕地面積は六〇七九千町歩、内田は三二、九千町歩、畑は二八七〇千町歩、總面積比は田八、四%畑卅、四%計一五、八%である。然し畚、田の關係では内地に劣る。即ち耕地面積中の比率は次の通りである。

項目	朝鮮		内地	
	千町歩	比率%	千町歩	比率%
耕地面積	四九五九	一〇〇	六〇七九	一〇〇
内畚	一七六三	三五五	三二〇九	五二・八
田	三一九六	六四五	二八七〇	四七・二

畚の比較的狭少なるは主として氣候の乾燥と水利施設の不完全に因る。これを地方別に見ると次の通りである。即ちこれに依るに南鮮では氣候的立地條件が良好であるから開拓も進み耕地度は高く、西北鮮は立地條件不良のため概して低度である。

土地利用別面積調

地名	總面積 方杆	田 方杆	%	畑 方杆	%	山林 地方杆	%	原野 地方杆	%
京畿道	一二九三〇八	二二四〇二	一六・六	一八一〇五	一四・〇	五六八〇四	三六・二	三六〇四	二・八
忠清北道	七四八〇〇	七三〇四	九・八	八八〇六	一・八	三九九九六	五三・四	二五九	三・五
忠清南道	八一七〇四	一六九〇二	二〇・七	八三三三	一〇・二	三四九〇一	四二・七	三三〇七	四・〇
全羅北道	八六二三四	一七五〇五	二〇・三	七〇〇二	八・一	四四四〇七	五一・六	一六〇九	二・〇
全羅南道	一四〇〇〇三	二七〇〇	二・〇	二一三九	一・五	六九一〇二	四九・四	四四九	三・二
慶尙北道	一九一四〇七	二〇〇〇四	一〇・五	一八五九	九・七	二四七〇六	五九・九	七〇〇三	三・七
慶尙南道	一二四〇〇七	一八二〇三	一四・七	九四〇八	七・六	六〇七〇八	四九・〇	四二〇二	三・三
黃海道	一六八八〇四	一四九〇二	八・八	四三二七	二・五	七三八九	四三・八	四三〇八	二・六
平安南道	一五〇六〇	九〇〇八	六・〇	三七〇二	二・四	七八八五	五二・三	四三〇九	二・八
平安北道	二八六七〇八	九七〇五	三・四	四四九九	一・五	一四九四〇八	五二・一	一五〇七	五・四
江原道	二六四八〇二	九三九八	三・五	三三七九	一・二	二六七八	四七・九	二九一一	一・〇



威遠南道	三三三・五	六六・二	二・一	三八一・三	三一五・二	一七五八・六	五〇・五	二七二・六	八・四
威遠北道	二〇五二・六	二〇・六	一一・〇	三三〇・六	六一〇・八	二五五・一	六一・二	九四・三	四・六

天水沓の存在は朝鮮に於ける水田農業の一特色であるが、沓一七五万町歩中、水利安全沓は八六・八万町歩（四九％）不安全沓は三六・七万町歩（二一％）残りの三〇％は天水沓である。その内訳は次の通りである。

區分	水利安全沓		水利不安全沓		計
	箇所数	面積	箇所数	面積	
威遠南道	四七三	三三九〇・五	九四三	八四六〇・三	一四一六
威遠北道	二二六	三九二・六	七二六	九二・四	九五二
揚水	一六七	三三九・一	八三二	五五三・〇	一〇〇九
其他	七六	二九〇・九	三六六	四六六・二	四四二
計	一〇八〇	四一八〇	一八八六	一八三九〇・六	二九〇五〇・六

これを地方別に示せば次の通りである。  
朝鮮ニ於ケル沓状況一覽表（昭和十四年末現在）

道名	水利安全ナルモノ		水利不安全ナルモノ		合計
	箇所数	面積	箇所数	面積	
京畿	七九	八千町歩	三三七	五五・一	四一六
忠北	三六	五	五〇〇	一九・〇	五三六
忠南	六〇	七	三六二	三九・二	四二七
全北	一〇	一・四	五六六	二五・五	五七六
全南	九三	〇	四三〇	四九・八	五二三
慶北	八四	二	四一三	六三・〇	四九七
慶南	一〇	一・四	五五九	二八・七	五七〇
黄海	八五	〇	五五二	二七・二	六三二
平南	三六	九	三九五	一六・二	三九一
平北	六〇	一	六一一	一八・五	六七二
江原	六三	八	六七四	一一・六	七五二





が急降下するので時には晩稻の生育を阻害する。雨量が少ないのと水利施設不完全の爲に天水畚の部分が多半分以上になる。従つて移植の時期を失し、旱魃の被害が概ね大である。

秋は晴天で刈取乾燥には極めて便利である。品種の分布は略々緯度に平行し、地帯の區分を行ふことが出来る。畚の裏作は麥類と緑肥で、朝鮮では畚の五〇%以上に行はれるが、全鮮では約二七%である。(内地は約四〇%)  
その理由は冬の寒冷と水利不安な畚の多いことによる。最近十ヶ年間の年次別米の作付反別收穫高、反畝收穫高は次の通りである。

年次	作付段別			收穫高			一段歩收穫高		
	總數	水稻總數	陸稻總數	總數	水稻玄米	陸稻玄米	水稻玄米平均	陸稻玄米平均	總平均
昭和六	一六七四	一六三三	三九	一五八三	一五六三	二二〇	〇・九五五	〇・六五五	〇・九四
七	一六四三	一六〇五	三七	一六三四五	一六〇八一	二六四	一・〇〇一	〇・七〇三	〇・九九五
八	一六九七	一六五九	三八	一八一九二	一七九三四	二五八	一・〇八一	〇・六七九	一・〇三
九	一七一	一六七四	三七	一六七二七	一六四七一	二四六	〇・九八四	〇・六五五	〇・九七七
十	一六九四	一六五六	三八	一七八八四	一七六一	二七二	一・〇六三	〇・七二〇	一・〇五五
十一	一六〇一	一五六八	三三	一九四一〇	一九一七四	二五六	一・二二三	〇・七二三	一・二二
十二	一六三九	一六〇四	三五	二六七九六	二六四五三	三三三	一・六四八	一・〇〇〇	一・六三五
十三	一六五九	一六二四	三五	二四一三八	二三八五三	二八六	一・四六九	〇・八〇四	一・四五四
十四	一三三四	一三〇一	三二	一四三五五	一四二七四	八一	一・二八八	〇・二四九	一・一六三

朝鮮では昭和十四年に旱害が著しく、作付反別、收穫高共に大きな影響を受けたが、その他の年では作付反別には大差が

ないが、收穫高、反當收穫高には著しい変化がある。十ヶ年間の平均收穫高は一九一二四千石、最高は昭和十二年の二六七九六千石、最低は一四三五五千石である。最高は十ヶ年平均に對し、四〇・一％の増、最低は二四・九％の減で、最高の差は一二四四一千石、六五・〇％である。この新内地の米作よりは一層收穫の収差が大である。然し最大の原因は旱魃にあるからこの施設の整備が急務になる。若し水利改善が困難であれば朝鮮の米作は將來共不安定な状態を持續することになる。地域別には南鮮を主とし北、西鮮では次第に減少して来る。

反當收穫高も未だ著しく低位にあるが、安定して来れば、向上するし又品種の改良、技術の進歩に期待することも出来る。こゝに朝鮮産米増産手段の一方がある。地域では全羅、慶尙、嶺北道、平安北道が良く其他では不良である。

道別米生産概況（昭和十四年）

道別	作付段別		收穫高		一段歩收穫高	
	水稲	陸稲	水稲	陸稲	水稲	陸稲
京畿道	一六四三六	二一七	一四二四〇	一八	一四二四〇	〇八
忠清北道	三六三三	六五	三三〇一	〇二	三三〇一	〇九
忠清南道	九九三三	一四四	七二八四	一〇	七二八四	〇九
全羅北道	九〇六二	二四四	七〇一一	七	七〇一一	〇九
全羅南道	一三六三二	三六一	一五四六七	二〇三	一五四六七	一〇
慶尙北道	六五四一	一五	七四〇四	五	七四〇四	〇九
慶尙南道	一三三三八	四三五	一三七八	八	一三七八	一〇
黄海道	一四二九四	七七一	一五〇四四	一八	一五〇四四	一四
平安南道	七九四四	七九八	九五九三	一四六	九五九三	一〇
平安北道	九四九五	七〇	一七七八	四六	一七七八	一〇
江原道	八三九九	四四	一三三七	一四	一三三七	一〇
咸鏡南道	六六六九	四三	一一九八	三	一一九八	一〇
合計	一六六四三	一六六	一四二四〇	一八	一四二四〇	〇八

年度	増米計	増産分
昭和二十五年	1,801	1
昭和二十六年	1,201	3,284
昭和二十七年	1,234	1,234
昭和二十八年	1,234	1,234
昭和二十九年	1,234	1,234
昭和三十年	1,234	1,234
昭和三十一年	1,234	1,234
昭和三十二年	1,234	1,234
昭和三十三年	1,234	1,234
昭和三十四年	1,234	1,234
昭和三十五年	1,234	1,234
昭和三十六年	1,234	1,234
昭和三十七年	1,234	1,234
昭和三十八年	1,234	1,234
昭和三十九年	1,234	1,234
昭和四十年	1,234	1,234
昭和四十一年	1,234	1,234
昭和四十二年	1,234	1,234
昭和四十三年	1,234	1,234
昭和四十四年	1,234	1,234
昭和四十五年	1,234	1,234
昭和四十六年	1,234	1,234
昭和四十七年	1,234	1,234
昭和四十八年	1,234	1,234
昭和四十九年	1,234	1,234
昭和五十年	1,234	1,234
昭和五十一年	1,234	1,234
昭和五十二年	1,234	1,234
昭和五十三年	1,234	1,234
昭和五十四年	1,234	1,234
昭和五十五年	1,234	1,234
昭和五十六年	1,234	1,234
昭和五十七年	1,234	1,234
昭和五十八年	1,234	1,234
昭和五十九年	1,234	1,234
昭和六十年	1,234	1,234
昭和六十一年	1,234	1,234
昭和六十二年	1,234	1,234
昭和六十三年	1,234	1,234
昭和六十四年	1,234	1,234
昭和六十五年	1,234	1,234
昭和六十六年	1,234	1,234
昭和六十七年	1,234	1,234
昭和六十八年	1,234	1,234
昭和六十九年	1,234	1,234
昭和七十年	1,234	1,234
昭和七十一年	1,234	1,234
昭和七十二年	1,234	1,234
昭和七十三年	1,234	1,234
昭和七十四年	1,234	1,234
昭和七十五年	1,234	1,234
昭和七十六年	1,234	1,234
昭和七十七年	1,234	1,234
昭和七十八年	1,234	1,234
昭和七十九年	1,234	1,234
昭和八十年	1,234	1,234
昭和八十一年	1,234	1,234
昭和八十二年	1,234	1,234
昭和八十三年	1,234	1,234
昭和八十四年	1,234	1,234
昭和八十五年	1,234	1,234
昭和八十六年	1,234	1,234
昭和八十七年	1,234	1,234
昭和八十八年	1,234	1,234
昭和八十九年	1,234	1,234
昭和九十年	1,234	1,234
昭和九十一年	1,234	1,234
昭和九十二年	1,234	1,234
昭和九十三年	1,234	1,234
昭和九十四年	1,234	1,234
昭和九十五年	1,234	1,234
昭和九十六年	1,234	1,234
昭和九十七年	1,234	1,234
昭和九十八年	1,234	1,234
昭和九十九年	1,234	1,234
昭和百年	1,234	1,234

増産計畫の一例を示せば次の通りであるが、昭和二十五年迄は  
 耕種法改善による増産が多し其後は土地改良による増産分が著  
 しく増加して来ることになる。

年度	増米計	増産分
昭和二十五年	1,801	1
昭和二十六年	1,201	3,284
昭和二十七年	1,234	1,234
昭和二十八年	1,234	1,234
昭和二十九年	1,234	1,234
昭和三十年	1,234	1,234
昭和三十一年	1,234	1,234
昭和三十二年	1,234	1,234
昭和三十三年	1,234	1,234
昭和三十四年	1,234	1,234
昭和三十五年	1,234	1,234
昭和三十六年	1,234	1,234
昭和三十七年	1,234	1,234
昭和三十八年	1,234	1,234
昭和三十九年	1,234	1,234
昭和四十年	1,234	1,234
昭和四十一年	1,234	1,234
昭和四十二年	1,234	1,234
昭和四十三年	1,234	1,234
昭和四十四年	1,234	1,234
昭和四十五年	1,234	1,234
昭和四十六年	1,234	1,234
昭和四十七年	1,234	1,234
昭和四十八年	1,234	1,234
昭和四十九年	1,234	1,234
昭和五十年	1,234	1,234
昭和五十一年	1,234	1,234
昭和五十二年	1,234	1,234
昭和五十三年	1,234	1,234
昭和五十四年	1,234	1,234
昭和五十五年	1,234	1,234
昭和五十六年	1,234	1,234
昭和五十七年	1,234	1,234
昭和五十八年	1,234	1,234
昭和五十九年	1,234	1,234
昭和六十年	1,234	1,234
昭和六十一年	1,234	1,234
昭和六十二年	1,234	1,234
昭和六十三年	1,234	1,234
昭和六十四年	1,234	1,234
昭和六十五年	1,234	1,234
昭和六十六年	1,234	1,234
昭和六十七年	1,234	1,234
昭和六十八年	1,234	1,234
昭和六十九年	1,234	1,234
昭和七十年	1,234	1,234
昭和七十一年	1,234	1,234
昭和七十二年	1,234	1,234
昭和七十三年	1,234	1,234
昭和七十四年	1,234	1,234
昭和七十五年	1,234	1,234
昭和七十六年	1,234	1,234
昭和七十七年	1,234	1,234
昭和七十八年	1,234	1,234
昭和七十九年	1,234	1,234
昭和八十年	1,234	1,234
昭和八十一年	1,234	1,234
昭和八十二年	1,234	1,234
昭和八十三年	1,234	1,234
昭和八十四年	1,234	1,234
昭和八十五年	1,234	1,234
昭和八十六年	1,234	1,234
昭和八十七年	1,234	1,234
昭和八十八年	1,234	1,234
昭和八十九年	1,234	1,234
昭和九十年	1,234	1,234
昭和九十一年	1,234	1,234
昭和九十二年	1,234	1,234
昭和九十三年	1,234	1,234
昭和九十四年	1,234	1,234
昭和九十五年	1,234	1,234
昭和九十六年	1,234	1,234
昭和九十七年	1,234	1,234
昭和九十八年	1,234	1,234
昭和九十九年	1,234	1,234
昭和百年	1,234	1,234

(2) 畑作物は

夏作では粟、大豆、小豆、玉蜀黍、蜀黍、甘藷、馬鈴薯、綿、煙  
 草、大麻、  
 冬作では大麥、裸麥、小麥、燕麥、ライ麥、ヘアリーベッチ等が  
 ある。  
 氣候の影響は冬の嚴寒と、春季の播種期各麥の出穂期に於ける乾  
 燥である。この爲、農民は独自の耐寒耕作法を採用し、僅少の水  
 分も作物の生育に利用する。  
 夏作では過濕に備へて高畦を作り排水を良好にし、畦上に播種す  
 る。  
 冬作では冬季の防寒、春季の乾燥を防ぐ見地から畦間に播種する。  
 作物分布と作付方式(輪作様式)は地域的に明瞭である。  
 主要畑作物と氣候との關係は次の通りである。

地帯 所屬 道名 氣象的 特徵 栽培 田作物 名

南 緯 地 方	全北全南慶北慶南	冬期温暖ニシテ 雨期多ク至ル	大麥、粟、小麥、大豆、甘藷、陸稻、 粟、陸稻、陸稻、陸稻、陸稻、大豆、小豆
中 緯 地 方	京畿忠北忠南江原	中府	大麥、陸稻、陸稻、陸稻、陸稻、大豆、小豆
西 緯 地 方	黃海、平南、平北	冬期寒期厳シク 雪少ナリ初夏 乾燥シク	小麥、陸稻、陸稻、陸稻、陸稻、大豆、小豆
北緯地方高地帯	咸南、咸北 標高五〇〇米以下	夏季短少 シテ秋長イ冬ニ シテ寒シク	春時大麥、大豆、小豆、稱蜀黍、蕎麥、大麻
北緯地方高地帯	咸南、咸北 標高五〇〇米以上	夏季短少 シテ秋長イ冬ニ シテ寒シク	春時大麥、大豆、小豆、稱蜀黍、蕎麥、大麻

秋時大麥の栽培限界は黃海道を二分し、京畿道北部より、江原道北部に出て、元山に至る線以南で、以北は春時大麥である。この線は全年の平均気温一〇〇に相當する。對寒性の弱い内地種大麥、裸麥の限界は平北沿海地方より平南の北部、咸南南部に至る線で全年八乃至九〇に當る。これらの限界は漸次北進の傾向がある。粟は乾燥に堪へ多濕を忌む作物で、京畿以北に多く、南緯は慶北

一部の雨量の少い山間部にあり、これは又、畑作地域の主要食料作物として重要である。大豆、蕎麥は肥料少くて良く、氣候、風土の制約も少く、全緯に見る。馬鈴薯、豆麻、ホツブの如きものは北緯高地帯及び類似地帯に限られる。陸地棉は比較的暖地の南緯が主であるが、平安南北道に普及し、二二三万町歩に達する（大正十年は一〇五万町歩）煙草は耐旱性強く、朝鮮の氣候風土に適し、全緯にあり、特に中州安東、龍仁、成川、寧越、全域地方は銘葉の産地である。畑作物主要輪作式は次の通りである。

地帯	所 屬 道 名	主ナル栽培作物ノ組合セ
京畿忠北忠南全北	京畿忠北忠南全北	大麥一大豆一大麥一大豆
三年四作 全南慶北忠南江原	全南慶北忠南江原	大麥一雜穀一大麥一雜穀
道襄陽以南沿海地方	道襄陽以南沿海地方	大麥一棉 一大麥一棉

二年三作 黄海平南平北ノ南半江原忠北寔川丹陽  
 方面慶北榮州奉化方面慶南永興以直  
 麥類一豆類大豆小豆綠豆粟  
 一年一作 平北山地帶咸南定平以北咸北  
 燕麥馬鈴薯春時大麥蕎麥粟

。果樹は過温を忌むを以て朝鮮は概して好適であるが柑橘、枇杷には不適である。鐵道沿線にあるのは主に經濟的理由による。養蠶に對しても好適、對寒性品種、蠶種の改良により全鮮に行はれる。  
 尙主要畑作物の最近の作付狀況は次の通りである。

朝鮮最近十箇年間食糧作物累年表  
 一、作付段別

年次	大麥	粟	小麥	大豆	小豆	粟	稗	黍	玉蜀黍	蕎麥
昭和三年	八九四	七九二	三四六	七九三	二四一	八九一	八六	一六	一〇八	一〇八
六	九〇〇	七九三	三三三	八〇〇	二三九	八〇七	八三	一六	一〇八	一〇四
七	八九九	七九二	三二四	八一〇	二三四	七七	七七	一六	一一〇	一一三
八	八九九	七九二	三二二	八〇四	二三三	七四	七四	一五	一一三	一〇七
九	八八八	七九二	三二六	七九五	二三四	七八	七八	一五	一一三	一一六
一〇	八七七	七九二	三二七	七九二	二三五	七二	七二	一五	一一九	一一六
一一	八六一	七八九	三三四	七八七	二三〇	六八	六八	一五	一二九	一一二
一二	八五七	七八九	三四一	七八五	二二七	六五	六五	一四	一三七	一一九
一三	八四一	七八七	三四五	七六七	二二四	六〇	六〇	一三	一四〇	一一三
一四										

單位 千町歩

昭和	二、收穫高									
	年次	大麥	裸麥	小麥	大豆	小豆	粟	稗	黍	玉蜀黍
三	75417	22035	20062	3868	795	395	69	751	603	603
一三	9795	2772	2030	4263	890	5840	81	905	639	639
二	6814	1963	1605	3784	759	5065	74	855	555	555
一	8752	1627	1933	4375	934	4861	71	715	516	516
〇	7994	1285	1838	3812	875	407	65	87	682	682
六	7385	1023	1762	4356	915	506	87	89	664	664
七	8004	837	1778	4410	877	539	84	84	602	602
八	7885	1023	1762	4356	915	506	87	89	664	664
九	7994	1285	1838	3812	875	407	65	87	682	682
昭和三	75417	22035	20062	3868	795	395	69	751	603	603

これによると裸麥、小麥玉蜀黍は増加、大小豆、稗、黍は減少し  
 である。  
 次に増産計畫の一例は次の通りである。

年次	大麥		合計 産量	計 總生産量
	増産量	總生産量		
基準		7,778,820 (5,583,774)		17,761,903 (13,568,857)
16	575,287 (402,701)	8,354,107 (5,986,475)	1,75,077 (1,52,491)	19,176,980 (16,511,348)
17	1,172,574 (820,802)	9,526,394 (6,404,576)	387,752 (635,980)	20,849,655 (17,604,837)
18	1,799,733 (1,259,813)	11,153,833 (7,664,387)	644,807 (1,04,887)	21,606,710 (18,673,714)
19	2,450,329 (1,715,230)	13,604,149 (9,379,617)	975,430 (210,321)	22,909,333 (19,119,188)
20	3,125,485 (2,187,840)	16,728,635 (11,566,514)	1,453,434 (325,809)	24,226,437 (20,895,746)

備考 括弧内ハ裸麥換算 P.206a1

# 食糧作物増産並所要資材調

(日滿支産業建設五年計畫總批發一覽表附録)

年次	大 麥		裸 麥		小 麥		粟		合 計	
	増産量	総生産量	増産量	総生産量	増産量	総生産量	増産量	総生産量	増産量	総生産量
基準		7,978,820 (5,583,774)		2,972,438		2,027,075		4,984,550		17,761,903 (13,518,857)
16	575,227 (402,701)	8,552,104 (5,986,475)	224,593	3,198,031	221,334	2,248,429	153,863	5,138,413	1,175,077 (1,002,491)	19,126,980 (15,511,348)
17	1,172,574 (820,802)	9,149,394 (6,404,576)	463,309	3,436,747	461,471	2,488,566	270,398	5,274,948	2,387,752 (2,035,980)	20,349,653 (17,604,837)
18	1,799,733 (1,259,813)	9,776,553 (6,343,587)	716,039	3,687,477	719,430	2,746,525	409,105	5,194,155	3,144,807 (2,104,887)	21,606,710 (17,672,744)
19	2,450,329 (1,715,230)	10,427,149 (7,299,004)	981,249	3,954,657	1,002,368	3,029,463	511,484	5,496,034	4,945,430 (4,210,321)	22,927,333 (19,719,180)
20	3,125,485 (2,187,840)	11,102,305 (7,771,614)	1,258,659	4,232,097	1,303,936	3,331,031	576,454	5,561,064	6,214,534 (5,326,809)	24,226,437 (20,845,746)

備考 括弧内ハ裸麥換算トス 換算率 0.7 単位石

P.20601

これによると裸麥、小麥玉蜀黍は増加、大小豆、稗、黍は減少し  
てゐる。  
次に増産計畫の一例は次の通りである。

一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四
一三	七四一七	二二〇三	二〇六二	三八六八	七九五	八九〇	五八〇〇	三九七	六九	八一	七四

裏面白紙



特殊作物としての棉花は古くから朝鮮農村の重要な作物であるが従来は専ら在來棉に限られたのである。陸地棉の栽培は明治廿七年で、翌廿八年に棉花栽培協會が設立されてゐる。茲來棉採種法の改良普及等を経て、面積、生産の増加に努めたが、昭和四年以降に於いては作付反別の積極的増加を中止し、集約栽培の普及を計つて段當收穫高の増加に努めたのである。最近の目標は作付反別、五〇万町歩、生産高、實棉六〇〇万擔でこの第一期計畫として昭和八年以降十ヶ月間に作付二十五万町歩、實棉三〇〇万擔を目標として増産計畫を實施中であるが、實績は表の如く收穫高は約七〇%の成績である。

年次	作付反別 (千町歩)		收穫高 (万擔)		反當收量 (斤)	
	陸地棉	在來棉	陸地棉	在來棉	陸地棉	在來棉
昭和十年	一〇八	六二	一七〇	四四	一一三	七一
昭和十一年	一六四	六四	八九	一三七	五四	七五
		計		計		平均
		二二〇		一四一		一〇二
		二二九		一三三		六〇

士	一七五	四八	二二三	二〇〇	四〇	二四〇	一一四	八三	一〇八
士	一八九	四七	二三六	一八〇	三〇	二一〇	九五	六五	八九
士	二二二	三一	二五三	一九一	一九	二一〇	八六	六一	八三

この内地地棉は栽培面積としては年々増加しつつあるが、收穫高は昭和十一年に大きな災害があつた。

在来棉は近頃反別、收穫高共に減少の傾向にある。

朝鮮の棉作は真豆、特に日本の棉作地としては極めて重要な地歩を占めて來たが、東亞全般の棉作建設の見地からは必ずしも良好な立地條件を具へるものとは云はれない。

棉作の立地條件は氣温と降水とに重點が置かれるが氣温に就いては棉作期間二〇度以上、無霜期間二〇〇日以上を必要とし、降雨關係としては年降水量が約一、五〇〇耗以下で季節的に乾雨期の明瞭に區分せられるとかが殆んど決定的に必要である。然し降雨の多寡に關しては寧ろ第二義的で特に寡雨の地域に就いては灌

漑施設の整備により良好なる棉作を見ることが出来る。例へばエジプト、北米のアリゾナ、カリホルニアの各州、英印のパンジヤフ地方等である。降雨の多い地域に於ては乾雨期の季節的配分が絶対に必要の條件である。然も棉作期間特に後期三ヶ月以上は乾燥し、月五〇耗以下であることが望ましい。

然してこれらの事情に加へて更にこの後期の乾燥期は出來得べくんば無風状態を呈し、颱風等の脅威の無いことである。朝鮮に於いては氣温、降水の配分に於いては、特に支障はないが颱風の被害は不可避であり、それに伴ふ豪雨も先づ避けられない。又、夏の雨は量に於いては充分であるが極めて不平均で屢々旱魃の憂きへある。

次に朝鮮棉作上の重大な問題は以上の自然的條件と、他の農作との關係に甚く生産費、及び價格の問題であるが、東亞の他の地境でより良好な立地條件を求めることが出來た場合には如何にして

生産を維持して行くかである。然して先づ各種の條件から見て、繰播にして六〇乃至七〇万擔を維持すべきものと考えらる。

現在朝鮮の棉作は南緯西部の平壤地に重點がある。特に陸境棉に於いて然りであるが、この地域は明かに最大の米作地域である。將來棉作を維持して行くには米作に於ける灌溉用水利施設がどの程度に迄整備し得らるるかに歸せられる。即ち日本の觀點に於いては主食糧の米を可及的距離に獲得して自給度を高く維持することが希望せらるゝからである。

生産能率は反當收量で見ると氣候條件の比較的良好な全南が最高で慶南、全北、平南等がこれに次いでである。その詳細は次の通りである。

棉花生産 (昭和十四年)

地域	作付反別 千畝	收穫高(實棉) 擔	反當收量 斤	農家戸數 千戸	作付反別 反歩	收穫高 斤
朝鮮道	11,000	1,617,700	147	2,477	0.99	63.5
忠北	1,300	2,170	167	1,300	1.17	69.3
忠南	1,200	1,900,000	158	1,180	0.79	57.1
全北	11,000	1,111,000	101	2,350	0.33	37.3
全南	5,600	4,800,000	111	1,300	1.31	100.2
慶北	3,600	3,100,000	86	2,300	1.10	69.4
慶南	3,700	3,100,000	84	2,300	1.17	106.3
黃海	3,600	1,600,000	44	2,300	0.96	66.7
平南	3,600	1,600,000	44	2,300	0.93	76.0
平北	3,600	1,600,000	44	2,300	0.39	41.1
江原	3,600	1,600,000	44	2,300	0.92	41.1

合計	感北	感南
(三三・〇)	(〇・三)	(三二・七)
(一八・八)	(一・九)	(一六・九)
(六・一)	(三・三)	(二・八)
三〇・三	一・八	二八・五
〇・八	〇・〇	〇・八
六九・六	一・〇	六八・六

備考

( ) は總數中の在來棉を示す。

台湾

1. 自然的立地條件  
イ. 地勢形

台湾は北回歸線を中心に南北に細長く、九州島程の面積の島である。背稜山地は島の東寄りを南北に縦走し、日本列島中最高  
の山地が分れ、連嶺として東西斜面を分けてゐる、東側にはこれに併走して台東山脈があり、中に台東縱谷平野を持つが、その他では濁水溪扇狀地が主なるものである。  
台湾の生産地域としては西側の山麓から海岸迄に開けた盆地丘陵、台地扇狀地、沖積低地、干拓地等を織り交ぜた細長い平野に限られる。これ以外では少數の高砂族によつて行はれる山地農業があるが、質、量共に特に取擧げるに足りないものである。西岸の平野は前記の如く、地形的に複雑であるが、年間高温であるために、各種の農業、特に水稻、甘蔗は坤圳によつて代表される灌漑施設に全く制約されてゐる。即ち水利こそ台湾農業

の發達を基礎付けるものである。  
口、氣候

北  
氣温は一般に高温で、此の台北では年平均二二、八度、年較差は一三、三度で南の花蓮港では年平均二二、五度、年較差九、九度ある。このため米、甘蔗、玉蜀黍、茶、柑橘等の生育は良好である。

平均氣温

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
花蓮港	一七四	一七四	一八九	二一六	二四五	二六三	二七三	二七一	二六〇	二五五	二一〇	一八七	二三五
臺北	一五二	一五〇	一六八	二〇七	二四一	二六八	二八三	二八〇	二六四	二三〇	一九九	一六九	二一八

(攝氏度)

降水量

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
花蓮港	五五	一〇五	一〇〇	一四一	一五〇	一七二	一八八	一四四	一〇九	一〇三	八〇	六五	一三三
臺北	八九	一三〇	一五五	一七四	二二五	二八二	三〇六	二八八	二五三	二二一	一五九	七〇	二〇三

(耗)

降水量は山地に多く、平野に少いのが、通則であるが臺灣に於いては西海岸地域が最も少く、年一五〇〇耗以下、澎湖島では一〇〇〇耗以下である。然し山地に於いては極めて多量の降雨があつて、阿里山では年平均三、三三〇耗を示し、このため河川は屢々氾濫の危険があるが、農業水利施設の發達には好都合である。臺灣の氣温の状況ではこの程度の降雨は是非共必要とするところで、さもなくば乾燥に過ぎる。颱風は年二三回本島に襲來するが、其他もこの附近を通過し、その影響は免れないが、特に夏季に於いてはこのための降水が多い。これと季節風(冬は北東風、夏は南西風)との關係で冬には中部以南の平野では著しく乾燥し、夏

早魃さへ見るので埤圳の施設が絶對に必要である。  
2 經濟的、社會的條件

臺灣の農業は民族社會的には支那人農業であり、經濟的には内外地需給上、特殊の位置を占める米、甘蔗の農業である。その他バナナ、柑橘等内地依存の傾向が強いが、米、甘蔗に比較すべくもない。

社會的、民族的條件は從來のまゝ、小作、小農經營が著しいが、經濟的には米、甘蔗の内地の需給上に占める位置が相當に大きいので、これに對する水利施設の整備、擴充及び品種、技術の改良並に作付奨励、規正等は決して着適し得ない。

國土計畫としての臺灣農業の問題は内地食糧需給上の立場から米作を如何に取捨するかと云ふ點と、米作と雜作の關係に立つ甘蔗作を如何にするかの點にある。

これらは何れも東亞全域の立場から考察せらるべきは云ふ迄もな

い。尙現在に於ける農業人口は減少の傾向があるが尙、總人口の五〇%以上に及んで居り、内地の次第に低比率化するものに比較してはや、良好である。

3 農業の概要

1 開發狀況並に耕地度

西部の平野の地域に耕地の開墾は限定されるが、總計約八八六千甲、總面積に對して二二・六%である。現在迄の結果に於いては次表の如く、耕地總計の増加は昭和二年に對して昭和十四年には七五%増であるが、兩期作田は一九%増、單期作田では第一期作田は減であるが、第二期作田は著しい増加を示し、その合計では九三・九%の増増を示してゐる。畑は逆にこの間二四・五%の減である。

要するに耕地の絶對量の増加は余り期待し得ないので、米及び甘蔗を中心とした水利改良が地目變換を極力推進してゐる形である。







い結果を齎らしたのである。今その概要を示せば次の通りである。

年次	作付面積		計	收穫		計	甲當		計
	一期作	二期作		一期作	二期作		一期作	二期作	
昭和四年	240.1	345.5	585.6	385.3	362.8	748.1	11.88	10.50	11.06
昭和五年	275.3	358.1	633.4	448.3	388.8	837.1	12.65	10.86	11.64
昭和六年	282.9	370.5	653.4	463.6	385.1	848.7	12.83	10.40	11.45
昭和七年	292.1	392.8	684.9	422.1	472.8	894.9	12.95	12.04	13.07
昭和八年	295.3	401.1	696.4	493.9	442.3	936.2	13.34	11.03	12.01
昭和九年	297.4	390.2	687.6	452.1	457.8	909.9	13.17	11.73	12.44
昭和十年	305.8	393.9	699.7	432.8	479.4	912.2	13.15	12.17	13.04
昭和十一年	310.9	371.8	682.7	473.9	482.0	955.9	13.84	12.30	13.00
昭和十二年	304.4	373.7	678.1	441.2	482.3	923.5	13.50	12.30	12.90
昭和十三年	291.2	353.6	644.8	488.6	493.1	981.7	13.78	13.95	13.86
昭和十四年	275.5	370.1	645.6	403.1	512.1	915.2	14.63	13.84	14.18

これで見ると最近十ヶ年間に於いて作付反別は六三三・四千甲（昭和五年）から六四五・六千甲（昭和十五年）即ち四・四％の増加で、現狀維持的であるが、收穫高では七三七一千石から九一五二千石、即ち二四・二％の増。これは甲當收穫で一・七石から一四・一石、即ち一〇・六％の増加になる。

年次生産から見た安定の状況は十ヶ年平均收穫高は八八一三千石、最高は昭和十三年の九八一七千石で、十ヶ年平均に對して一・一％増收、最低は昭和五年の七三七一千石で十ヶ年平均に對して一・六％減收である。上下の差は二四四六千石、十ヶ年平均に對し二七％で朝鮮は元より、内地に對しても遙かに較差は少なく、安定状態を現はしてゐる。米品種の改良は云ふ迄もなく内地系蓬來米種の移植である。従來は内地種の移植困難と見做されて來たが、日本農業技術は遂にこれに成功せしめ在來種の植付面積を蚕食して急速に傳播したのである。今増加の概要を示せば次の通りである。

年	作付面積	收穫高	甲當收量	在來梗米 作付面積	收穫高	甲當收量
大正元年	三三〇	七六九石	石	四〇〇一四一甲	三五六六二六	八・五石
五年	六九	七七七五		四〇四三九八	四〇五三六四四	一〇・〇
十年	二三〇	七一九六		四二〇七六一	四一九二七九一	一〇・二
昭和元年	三三三三六九	一三〇七二〇	一〇・六	三三五五九七	三七七三三三五	一一・二
五年	一三三三三七	一八〇六二〇六	一三・四	三七〇三五四	四三三六〇〇七	一一・七
十年	三〇四九八五	四四九六〇〇三	一四・七	二六二九六〇	三二一六六〇〇	一二・二
十一年	二九九七一八	四六三三二〇二	一五・五	二七二二七六	三五〇二四四六	一二・九
十二年	三二二八七〇	四七八三〇〇三	一五・三	二七八九五三	三五三九七七三	一二・七
十三年	三二〇七二二	四二七六三三三	一七・〇	二五六一七〇	三六〇九五二五	一四・一
十四年	三二七〇四二	四七九六七三一	一五・一	二四三六四二	三三二八一五	一三・六

即ち蓬來米は僅か卅年足らずの期間に總計四八〇萬石を收穫し、甲當收量は最近五ヶ年平均で一五・五石、反當では一・六八石になり、内

地平均二・〇石の約八四％に當る。この點は内地程迄でなくとも尙向  
上の餘地を有するものと考へられ、特に甲當收量の少い在來品種を蓬  
來米種に全面的に置き換へることは一層有意義と云ふべきである。

(2) 甘蔗

甘蔗は高温多雨の地域に適するが、特に赤道地帯の高温多雨多濕  
の氣候は甘蔗に最適と云はれる。台湾の甘蔗作は氣候的には最良  
の立地條件を具へては居らない。即ちそれは栽培期間の點で表明  
される。赤道地域では普通一ヶ年未滿であるが台湾では概ね一ヶ  
年を要する。

台湾甘蔗作の發達は云ふ迄もなく、日本の砂糖需給問題として考  
へられる。即ちこの觀點から完全に自給し、更に一部は滿支に供  
給し得る程度の餘裕を示したのである。

今南方國が支配下に置かれたのであるから、台湾の甘蔗作は大東  
亞廣域自給の立場から再考せられねばならない。特に内地食糧需

給上台湾の占める地位との關係に於いては台湾の甘蔗作と競作の立場にある。元より輕々に甘蔗作を廢止して米作其他の直接食糧作物に轉換すべきを云ふのではない。台湾でも甘蔗作を以つて利用する方が有利であると考へられる地域もあるわけである。現在の甘蔗作地は次の通りである。

昭和十七、八年度甘蔗作許可面積

水田	四四〇〇九 <sup>甲</sup> 内	兩期作田	二七三二一 <sup>甲</sup>
水田輪作田	四九八一	單期作田	一六七八八 <sup>甲</sup>
平地畑計	五二一八八		
山地畑	二二七二九		
計	一六八七三七		

この間兩期作田の二七三二一<sup>甲</sup>は直に水稻作に移し得るものにして、單期作田は兩期と灌溉用水の關係から一期作になり又は二期作になるもので、これも水稻の作付をすることが出来る。

然し水田輪作田は分散のもの、集合せるものによつて用水關係からの制約は免れない。平地畑、山地畑については水稻化は殆んど不可能である。これを要するに直に水稻作に移し得るものは兩期作水田の二七三二一<sup>甲</sup>と單期作田の幾割かに屬するもので、甲當り一期作一四、六三石、二期作一三、八四石とすれば兩期作田に於て七七七八二九石を收穫し、單期作田、輪作田で相當に收穫し得るにしても一〇〇萬石程度の増産を得ると云ふ程度である。併し乍ら甘蔗の共榮園生活過剩に鑑み逐年生産を減じて食料作物に轉換すべきは必然の動向と見るべきである。尙最近の米作と甘蔗作との關係を示せば次の通りである。

年次	總耕地		作付面積		米	甘蔗	收	米	甘蔗	高
	面積	一期作	二期作	面積						
昭和五年	八三三〇	二七五三	三三	三三	一〇九〇	一三	四〇八三	一六六	一〇八	一〇六
昭和十年	八五〇九	三〇五八	三六	三九	一二六	一四	四三三	一四一	一〇七	一〇八
昭和十一年	八七五三	三〇〇九	三六	三九	一〇八	一四	四七三	一五二	一〇三	一〇八
昭和十三年	八八三三	三〇四四	三五	三七	一二六	一四	四八二	一四二	一〇三	一〇八
昭和十四年	八八四四	三〇九二	三五	三七	一三〇	一五	四八八	一四七	一〇三	一〇八
昭和十四年	八八五五	三一〇一	三一	三七	一六〇	一九	四〇三	一四六	一〇三	一〇八

年次	總計石當り		總計石當り		甘蔗
	一期作	二期作	一期作	二期作	
昭和五年	1150	1100	1150	1100	1150
昭和十一年	1100	1100	1100	1100	1100
昭和十二年	1100	1100	1100	1100	1100
昭和十三年	1100	1100	1100	1100	1100
昭和十四年	1100	1100	1100	1100	1100

これによると面積的には米作地は昭和十四年に總耕地の三〇%（第一期作）乃至四〇%（第二期作）以上で、甘蔗作地は二〇%以下である。價格では昭和十四年に甲當り米第一期作は三九〇圓、第二期作は三六二圓で、甘蔗の七〇四圓には遙かに及ばない、然

しこれだけでは米との競作關係は明かでないが、これを栽培期間前に見ると、米は四、五ヶ月であるが、甘蔗は一七、八ヶ月で約四倍の長期間に及ぶから單に甲當り生産價格の多寡ではなく、生産費との關係で利潤が如何に相違するか、重要である。米作との競作關係に就いては兩者の州別作付面積を見れば一層明かである。即ち次表の如く兩者共に台中州以南に集中してゐるが就台中、台南州に於いてはその關係が著しい。

各州別の米及甘蔗栽培面積

(單位 千甲)

計	昭和十二年					昭和十三年					昭和十四年										
	花	臺	高	臺	新	臺	花	臺	高	臺	新	臺	花	臺	高	臺	新	臺			
運	港	東	雄	南	中	竹	北	港	東	雄	南	中	竹	北	港	東	雄	南	中	竹	北
六七八・一	一七・〇	一一・二	九二・五	一三九・三	一六九・二	一四八・五	一〇〇・四	六・一	一・六	二二・〇	六一・二	二五・六	五・三	二・九	一七・〇	一・三	八九・九	一二四・五	一五六・七	一四五・三	一〇〇・〇
一二四・六	六・一	一・六	二二・〇	六一・二	二五・六	五・三	二・九	一七・〇	一・三	八九・九	一二四・五	一五六・七	一四五・三	一〇〇・〇	六・一	一・六	二二・〇	六一・二	二五・六	五・三	二・九
六四四・八	一七・〇	一一・三	八九・九	一二四・五	一五六・七	一四五・三	一〇〇・〇	一・八	六・四	二二・四	六三・六	二九・三	六・五	三・二	一八・〇	一・八	八七・四	一二六・四	一五七・一	一四四・〇	九九・八
一三四・二	一・八	六・四	二二・四	六三・六	二九・三	六・五	三・二	一八・〇	一・八	八七・四	一二六・四	一五七・一	一四四・〇	九九・八	一・八	六・四	二二・四	六三・六	二九・三	六・五	三・二
六四五・五	一八・〇	一二・八	八七・四	一二六・四	一五七・一	一四四・〇	九九・八	一八・〇	一二・八	八七・四	一二六・四	一五七・一	一四四・〇	九九・八	一八・〇	一二・八	八七・四	一二六・四	一五七・一	一四四・〇	九九・八
一六七・三	七・一	二・七	二七・〇	七六・七	三七・五	一三・一	三・八	七・一	二・七	二七・〇	七六・七	三七・五	一三・一	三・八	七・一	二・七	二七・〇	七六・七	三七・五	一三・一	三・八

台灣最近十箇年間食糧作物果年表

一作付段別

單位甲

年次	大麥	小麥	大豆	粟	黍	玉蜀黍	蕎麥	苜蓿
昭和五	六二二	四一三	八八六八	四〇五六	五七一三	一四七五	四九	一四七〇八一
六	六七三	五二八	八六四五	四〇三三	五六三一	一五一一	三八	一三三〇八一
七	六四一	七九七	八三六一	四一三三	五七四〇	一四二〇	四一	一三三〇八一
八	五九九	六六七	八二九四	三九九四	五六七四	一五七四	三四	一三六〇六〇
九	五四一	八四六	七七五三	四〇七九	五六八三	一五二〇	三四	一四四四四八
一〇	五七一	八七五	七四三三	三九九四	五六三三	一五四九	二八	一四四三三三
一一	五九三	六八〇	七五四四	三九六一	五五四四	一四八九	二八	一四四四五五
一二	六七四	五四〇	七二四二	三八五〇	五三三一	一六五八	二九	一四三三〇八
一三	七三三	六一三	六四四七	三九三三	五三一	一六六五	三一	一三八七三四
一四	七二〇	五九三	五三〇八	三六九八	四一五	一六〇一	九	一三〇三八一

三 收穫高

單位 石 甘藷ノミ斤

年次	大麥	小麥	大豆	粟	黍	玉蜀黍	蕎麥	甘藷
昭和五	三三〇九	三七九六	三六八五四	六九九〇	一〇八九六	一一四六一	三五〇	三二一六五〇
六	四一六三	三六七六	三九八三六	八九一〇	一〇二八五	一一七九九	三三七	三〇〇四六八
七	三六九四	四八八二	三六五九〇	一〇四四五	一三九三四	一一八八三	二七五	三〇〇四六八
八	三六八九	三二八三	三六〇二六	一〇七八八	三九七一	一一七三〇	二二〇	三〇〇四六八
九	四〇六三	七五九五	三六〇六八	一〇六二六	一三〇五七	一一三九八	一〇〇	三〇〇四六八
一〇	四九七七	八八三一	三六二六七	四九五二	四六六二	一一三三〇	一三八	三〇〇四六八
一一	四三一一	四〇八四	三六一五八	一〇八二八	一〇五七六	一一三三二	一〇〇	三〇〇四六八
一二	四五九一	四二七二	三三〇八九	八四一一	九三七	一一一八二	七七	三〇〇四六八
一三	四二八四	一〇三四二	三〇八四九	八七三三	八六九	一四九六八	六三	三〇〇四六八
一四	四三三三	四〇八五七	三〇五二七	八七四一	六八一	一四三一九	七六	三〇〇四六八

